

名古屋城調査研究センター 年報 4
令和 4 年度

2 0 2 4

名古屋城調査研究センター

目次

I 調査研究事業	1
1 発掘・試掘調査	2
(1) 天守台穴蔵石垣等試掘調査	
(2) 天守台穴蔵石垣背面調査	
(3) 不明門北土橋石垣根石発掘調査	
(4) 小天守西側土橋発掘調査	
(5) 本丸搦手境門跡周辺発掘調査	
(6) 表二の門試掘調査	
(7) 二之丸庭園第10次発掘調査	
(8) 西之丸発掘調査	
2 その他調査	18
(1) 二之丸庭園景石調査	
(2) 石垣カルテの作成	
(3) 特別史跡範囲内石垣現況調査	
3 工事立会	21
(1) 二之丸庭園修復整備工事	
(2) 二之丸庭園便所改修工事	
4 資料調査（文書典籍・美術工芸）	23
概要	
複写収集資料一覧	
5 デジタル化事業	24
(1) 名古屋城史跡管理システム	
(2) 名古屋城関係資料データベース	
II 資料管理	26
1 所蔵資料・受託資料の概要	26
(1) 所蔵資料	
(2) 令和4年度受贈資料	
(3) 令和4年度購入資料	
(4) 令和4年度受贈・購入図書	
2 資料の修理	28
(1) 名古屋城旧本丸御殿障壁画保存修理事業（文化庁補助事業）	
(2) 織田信長関係染織資料	
3 資料の利用	29
(1) 資料貸出	
(2) 写真貸出	
(3) 熟覧	
III 展示事業	30
1 西の丸御蔵城宝館 展示室	30
(1) 「風薫る 殿の御庭」	
(2) 名古屋城振興協会所蔵品展「火縄銃」	
(3) 「初公開 門外不出 巨大杉戸絵」	

(4) 「本丸御殿に秘められた意味—将軍たるもの、清貧であれ、人格者たれ—」	
(5) 「家康とごはん 名古屋城でいただきます」	
2 西の丸御蔵城宝館 情報ルーム	88
(1) 西之丸発掘調査成果速報展	
3 その他	89
(1) 「名古屋城刀剣展—尾張に伝わる刀剣—」	
IV 教育普及事業	91
1 刊行物	91
(1) 名古屋城調査研究センター研究紀要 第4号	
(2) 名古屋城調査研究センターだより 第4号	
(3) 西の丸御蔵城宝館特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」リーフレット	
(4) 特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)発掘調査報告書 第3次・第4次 [名古屋城調査研究報告4・埋蔵文化財調査報告書3]	
(5) 特別史跡名古屋城跡本丸内堀発掘調査報告書(令和元年度・令和2年度) [名古屋城調査研究報告5・埋蔵文化財調査報告書4]	
(6) 名古屋城表二の門試掘調査報告書 第1次・第2次調査 [名古屋城調査研究報告6・埋蔵文化財調査報告書5]	
(7) 国秘録 御巡覧留 [名古屋城調査研究報告7・名古屋城史料叢書1]	
(8) 名古屋城調査研究センター年報 3 令和3年度	
2 レファレンス	93
3 現地説明会	93
(1) 西之丸発掘調査	
(2) 二之丸庭園第10次発掘調査	
4 講師派遣	95
V 組織と職員	96
VI 参考資料	97
1 名古屋城の活動	97
(1) 催事等	
(2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議	
2 入場者の推移	99
(1) 名古屋城入場者数	

I 調査研究事業

名古屋城調査研究センターは、考古学・歴史学・美術史などの分野を横断した総合的な研究を推進し、特別史跡名古屋城跡の保存・活用を進めるとともに、その調査研究成果を広く情報発信していくことを目的に令和元年（2019）4月に設立された。

設立から4年目となった令和4年度は、考古分野では、天守台石垣の調査、二之丸庭園の発掘調査などを実施し、特別史跡の現況の把握に努めた。歴史分野では、これまでの調査成果を取りまとめた資料集を刊行し、美術工芸分野では、戦災で焼失した天守等に伴う焼損金属資料の調査・研究に取り組むなど、各分野で積極的に調査研究に取り組んだ。

そうした成果は、その調査の目的・趣旨に応じて、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議等にて報告したほか、『名古屋城調査研究センター研究紀要』等、各種の刊行物等により公開した。

1 発掘・試掘調査

(1) 天守台穴蔵石垣等試掘調査

調査期間 令和4年(2022)7月22日(金)～11月4日(金)

調査地区 本丸

調査面積 9.2㎡

調査目的 天守台における遺構の現況確認のための調査

調査担当 二橋慶太郎、大西健吾

調査概要

名古屋城総合事務所では、天守台内部における遺構の現況確認のための試掘調査を令和3年度(2021～2022)より行っている。今年度は昨年度に続き天守台北面の調査区①、新たに大天守、小天守を結ぶ橋台の調査区⑨で調査を行った。

ア. 調査区①

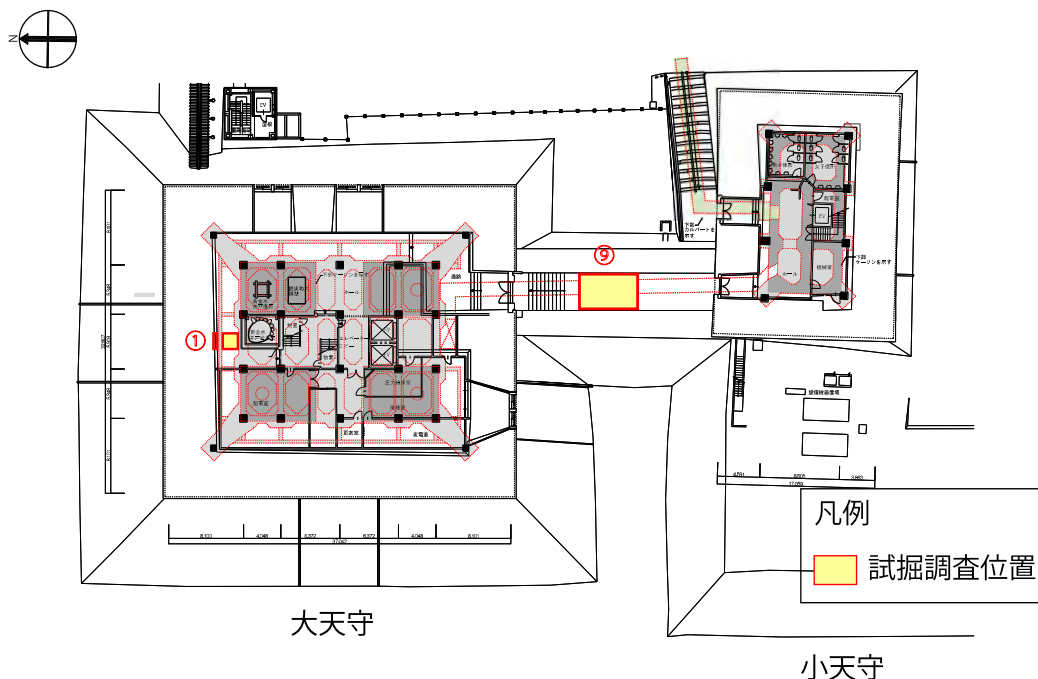
本調査区では昨年度調査により、近世に造成された土層(近世盛土)を掘り込んで据え付けられた石列が検出されていた。しかしながら部分的な検出にとどまりその性格等は不明瞭であった。今年度はこれらの点を解明するため、石列延長線上東西にそれぞれ1.3×0.5m(西側は有識者等との意見交換を踏まえさらに1.3×2.0m拡張)の調査区を設定し石列の更なる検出を試みた。

調査の結果、調査区東西で石列の延長を4石分確認し、構成する石材の総数は7石となった。石質は硬質砂岩1石、花崗閃緑岩6石であり、名古屋城石垣に使用されているものと同様である。花崗閃緑岩の2石には矢口長約10cmの矢穴痕も確認された。未だ部分的な検出に留まるものの、天守北面ラインに平行して石材が並ぶこと、石材の規模、形状、加工方法等も石垣に使用されるものと類似することから、近世期穴蔵石垣の根石部分と考えている。

イ. 調査区⑨

橋台における遺構の残存状況を確認するため、橋台中央に5.0×4.0mの調査区を設定した。しかしながら、調査区中央には戦後の天守閣再建工事時に埋設されたボックスカルバート(通信線等を収納するためのコンクリート構造物)が存在するため、実際に掘削したのは調査区西側3.5×0.6m、東側3.5×0.9mである。

調査の結果、東西両方で天守閣再建工事の際の掘り返しの痕跡(攪乱)が確認されたが、一部では近世に造成された土層(近世盛土)、橋台側面石垣の下段部分とそれに伴う捨て石等を検出した。



調査位置図



調査区①石列検出状況（南東から）



調査区⑨全景（北から）

(2) 天守台穴蔵石垣背面調査

調査期間 令和4年(2022)9月26日(月)～11月2日(水)

調査地区 本丸天守台

調査面積 34㎡

調査目的 天守台穴蔵石垣背面の現況確認のための調査

調査担当 二橋慶太郎、大西健吾

調査概要

天守台石垣は、堀底からの高さが約20.0mに達し、名古屋城内で最大の高さを誇る。慶長15年(1610)の築城以降、宝暦2～5年(1752～1755)の宝暦の大修理、昭和27～31年(1952～1956)の戦災後の修理積み替え、昭和32～34年(1957～1959)の天守閣再建工事を経て現在に至る。天守台石垣では近世から現代にかけて幾度かの積み直し工事が実施されており、それらが石垣に与えた影響、残存遺構の有無等を調査するため天守台石垣背面に3箇所の調査区を設定し発掘調査を実施した。

調査の結果、近世遺構は検出されなかったが、天守閣再建工事における改変の状況を一部確認できた。

ア. 調査区①

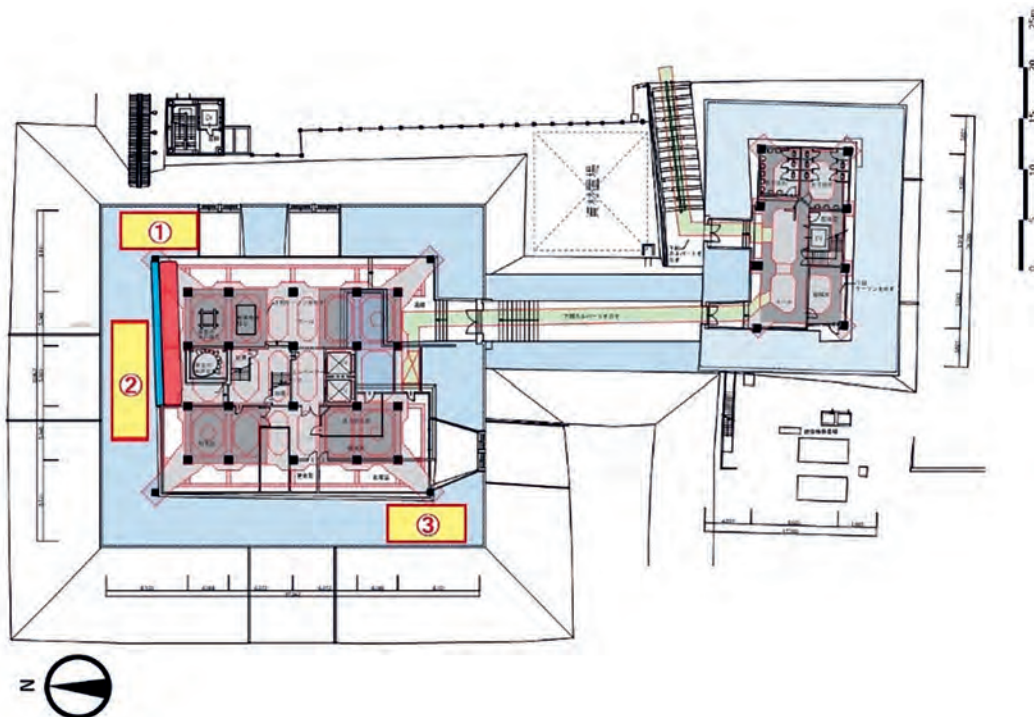
当時の工事写真等から比較的戦災後の改変が少ないと考えられる天守台石垣北東隅角部において、遺構の残存状況を確認するために設定した調査区である。4.1×3.0mの調査区を設定し約1.0m掘削したが、天守閣再建工事時の砂と礫を多量に含む攪乱土が厚く充填されており、近世遺構等は検出できなかった。

イ. 調査区②

天守台北面は天守閣再建工事の際に大きく改変されており、これらが石垣の安定性に与える影響を検討するため設置した調査区である。4.9×3.0mの調査区を設定したが、大型の礫等に阻まれ実際に掘削したのは1.0×1.4m程度であった。本調査区でも約1.0m掘削し、天守閣再建時の砂と礫を多量に含む攪乱土が厚く堆積する状況を確認した。

ウ. 調査区③

調査区①と同じく戦災後の改変が少ないと考えられる天守台石垣南西隅角部での遺構の残存状況を確認するために設定した調査区である。2.9×2.5mの調査区を設定し約1.0m掘削した。本調査区では隅角部付近を中心に「たたき」が敷かれ、その直下には砂を含まない栗石状礫層が堆積していた。これらは当時の施工図面等から昭和27～31年(1952～1956)の戦災後の修理積み替えに伴う施工と考えられ、それ以降の天守閣再建工事時においてもこの周辺は改変が及ばなかったことが明らかとなった。



調査位置図



調査区①完掘状況（南から）



調査区③完掘状況・「コンクリート」敷設面検出（北から）

(3) 不明門北土橋石垣根石発掘調査

調査期間 令和5年(2023)1月30日(月)～2月14日(火)

調査地区 本丸

調査面積 8㎡

調査目的 不明門北土橋石垣の現況確認のための調査

調査担当 二橋慶太郎、大西健吾

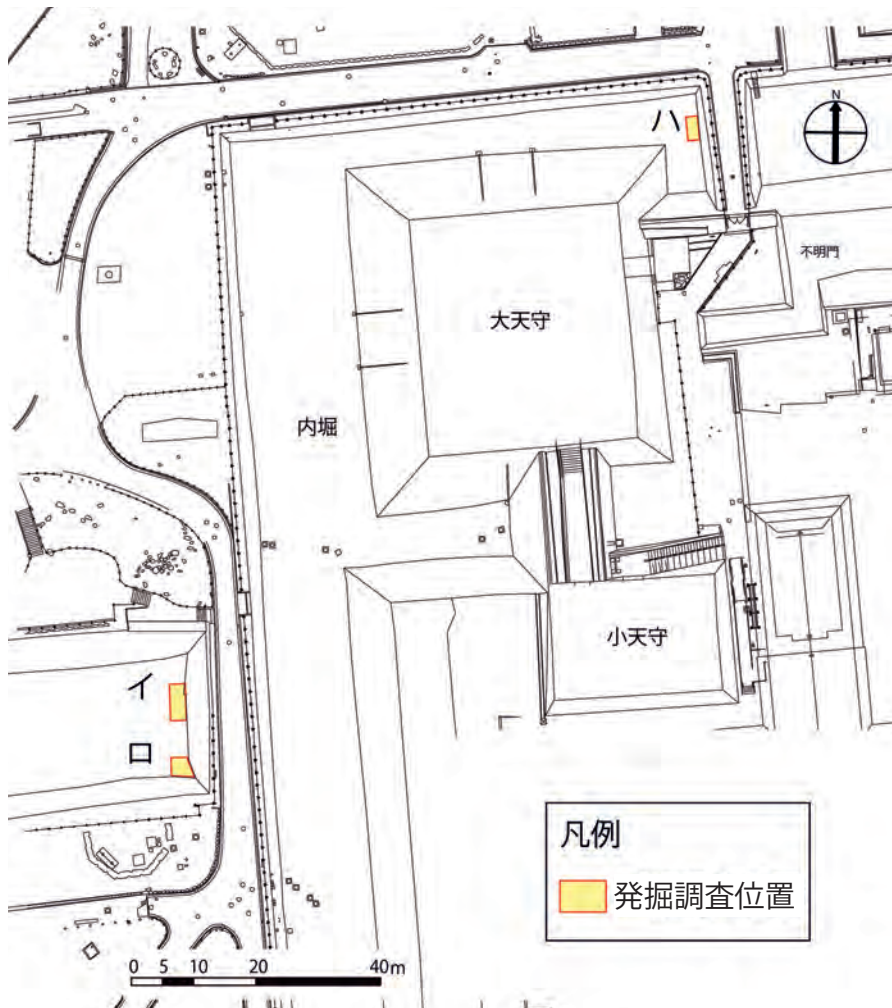
調査概要

不明門北土橋石垣は御深井丸と本丸をつなぐ土橋石垣である。本石垣は明治24年(1891)の濃尾地震による崩落後に積み直されており、名古屋城内の主要観覧ルート上に位置することからも安定性の確認が求められてきた。本調査では根石付近の状況を確認することで石垣の状況を適切に把握し安定性を検討するための情報を得ることを目的とした。

調査は不明門北土橋石垣の裾部に4.0×2.0mの調査区を1箇所設定し行った(調査区ハ)。掘削の結果、堀底面の土の直下に太平洋戦争時の焼け土や戦災遺物を敷き均した層、戦前の旧地表面、濃尾地震時の石垣崩落に由来すると思われる礫や割石を多数含む層を検出し、これらを経て地表より約1.0m下の地点で近世に造成された土層(近世盛土)を検出した。

石垣の状況としては、土層の堆積状況、石材の形状、加工方法等からおおよそ現在の堀底面より上で濃尾地震後の積み直しが行われたことを確認した。濃尾地震以前の石垣については目視の限りでは石材の劣化や割れ、膨らみ等の変状は確認できなかった。

出土遺物については、前述の戦災後の敷き均し層中で多数の瓦、金属製品(釘、銅板等)を検出した。これらは多くが熱を受けており戦災時に天守から焼け落ちた部材の一部と考えられる。



不明門北土橋石垣根石発掘調査・小天守西側土橋発掘調査位置図



調査区全景（北西から）



調査区全景と石垣地中部分の状況（西から）



石垣地中部分の状況（西から）

(4) 小天守西側土橋発掘調査

調査期間 令和4年(2022)12月12日(月)～令和5年(2023)1月25日(水)

調査地区 西之丸

調査面積 18㎡

調査目的 小天守西側土橋石垣の現況確認のための調査

調査担当 二橋慶太郎、大西健吾

調査概要

小天守西側土橋は、西之丸、御深井丸をつなぐ土橋である。土橋側面は石垣であり、西側の石垣は明治24年(1891)の濃尾地震での崩落後に積み直されている。本石垣は名古屋城内の主要観覧ルートに位置する一方で、裾部付近には築石の突出等の変状が見られるため、石垣の安定性を検討するため石垣裾部での発掘調査を行った(調査位置はI-1-(3)参照)。

ア. 調査区イ

土橋石垣の裾部に見られる築石突出の状況を把握するため、石垣裾部に6.0×2.0mの調査区を設定し、地表下の現代に造成された土層、明治24年(1891)の濃尾地震時の石垣崩落に由来する可能性がある礫や割石を多数含む層まで面的に掘り下げ、最小限の範囲でその下層の近世に造成された土層(近世盛土)まで掘り下げた。掘削の結果、築石突出部に連なる石垣が近世盛土層中まで検出され、突出部は濃尾地震による石垣崩落以前に築造された石垣の一部であることを確認した。そのため、濃尾地震後、崩落前の石垣より約0.5～0.7m内側より積み直しを行ったこととなるがその理由は不明である。

以上の通り、土橋石垣は濃尾地震による崩落前の石垣より若干内側に築かれている状態であり、通常の石垣に比べ安定状況が不明瞭である。今後は石垣のモニタリング調査等も実施し、定期的に確認する。

イ. 調査区ロ

土橋石垣南側の安定性を確認するため、南側東西方向石垣との入角部裾部に2.0×3.0mの調査区を設定し、調査区イ同様濃尾地震直後と想定する層まで掘り下げ、一部のみ近世盛土層まで掘削した。

掘削の結果、現況石垣の下部を2段分検出したが、目視の範囲では築石の割れやゆがみ等の大きな変状は確認できなかった。



調査区全景(南から)



調査区イ全景（北西から）



調査区イ 突出部（写真右隅）より連なる石垣（西から）



調査区ロ全景（北から）

(5) 本丸搦手境門跡周辺発掘調査

調査期間 令和4年(2022)8月24日(火)～11月30日(木)

調査地区 本丸

調査面積 66㎡

調査目的 特別史跡名古屋城跡搦手馬出に位置した境門跡の痕跡、および現在設置されている石積みの下部状況の調査

調査担当 西本茉由、濱崎健、村上慶介

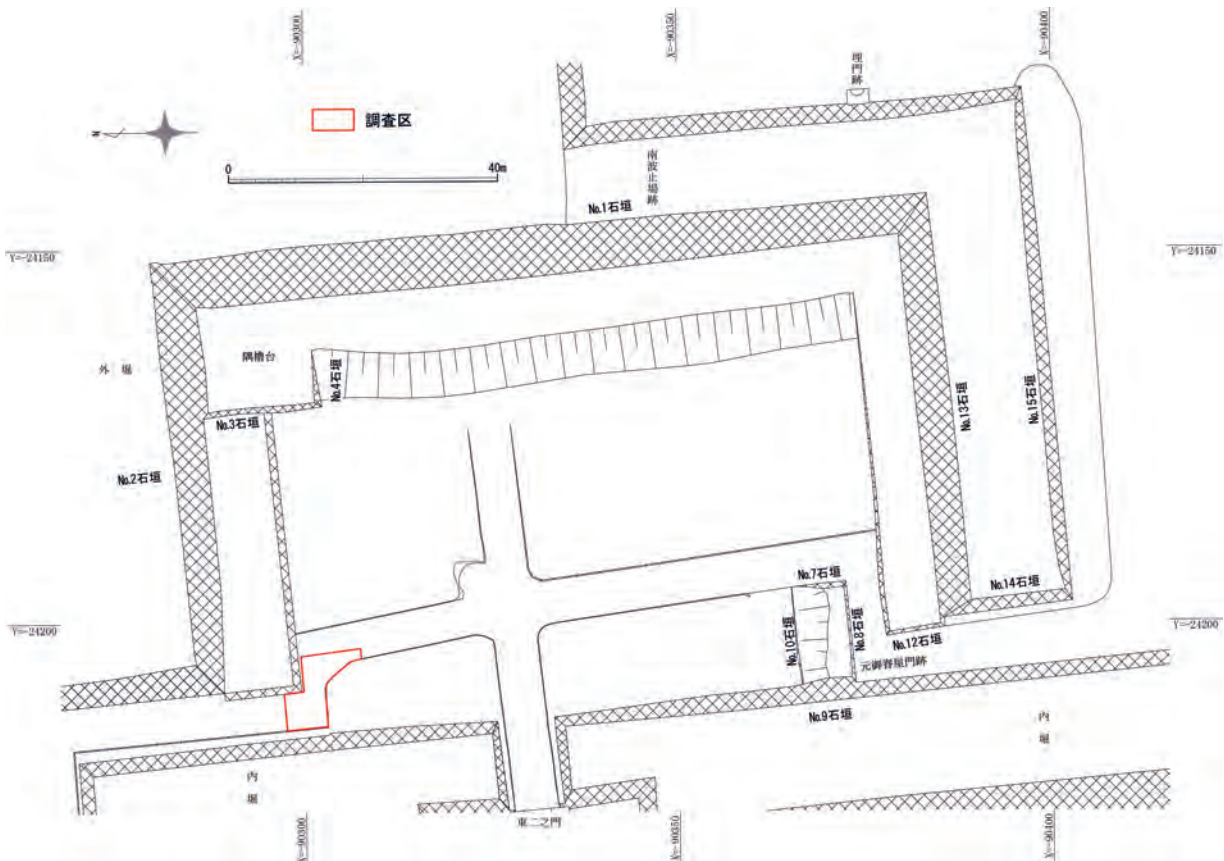
調査概要

名古屋城搦手馬出では平成15年(2003)から石垣の積み直し工事を実施している。積み直し後は、周辺の修景整備を行う計画となっている。今回の調査地は江戸時代に境門が位置したと推定される地点である。平成15年(2003)に本調査地周辺の石垣を解体する際に、石組み暗渠状遺構を確認し、平成17年(2005)には境門周辺の遺構を確認するための発掘調査が行われた。その結果、石組み暗渠状遺構が暗渠としての機能を喪失していることが判明し、また地表に露出している石積みの下部から新たな石列が確認された。

今回の調査は、搦手馬出周辺石垣積み直し基本計画に記した修景整備を行うために、境門跡に現在設置されている現代の石積みと平成17年度(2005～2006)に確認された地下遺構との関係を確認すること、平成17年度に確認された石組み暗渠状遺構に排水機能をもたせることができるか確認すること、の2点を目的として実施した。

前回の調査では石組み暗渠状遺構の一部が未掘であったため、今回は石組み暗渠状遺構に直交するようにサブトレンチを設定して調査を行った。その結果ゴム製の電線カバーが出土し、この遺物の出土により暗渠状遺構は現代になってから構築されたことがわかった。また以前の調査で確認されていた石列を再度確認し、現代の石積みはこの石列の軸をずらして構成されたと考えられる。それ以外に瓦廃棄坑と雨落ち状遺構の2基の遺構を確認した。

雨落ち状遺構は瓦を地面と垂直方向に立てて並べて形成されており、構築時期は不明ながら近代に廃絶した遺構で、門の雨落ちと考えられる。瓦廃棄坑は瓦を大量に含んだ層で構成されている土坑で、境門廃絶時の遺物が含まれていることが想定され、その位置も柱跡等の境門を構成する構造物の跡と一致する可能性がある。いずれの遺構も境門に関連があると思われる、修景整備に向けての手がかりを得ることができた。



調査区全体平面図



調査区全景（東から）



瓦廃棄抗土層堆積状況（南から）



雨落ち状遺構検出状況（南から）



石組み暗渠状遺構・榎接続状況（北東から）



石積み下部石列検出状況（北から）

(6) 表二の門試掘調査

調査期間 令和4年(2022)8月22日(月)～9月22日(木)

調査地区 本丸

調査面積 36㎡

調査目的 重要文化財名古屋城表二の門の大規模修理工事計画に伴う雁木復元整備の検討

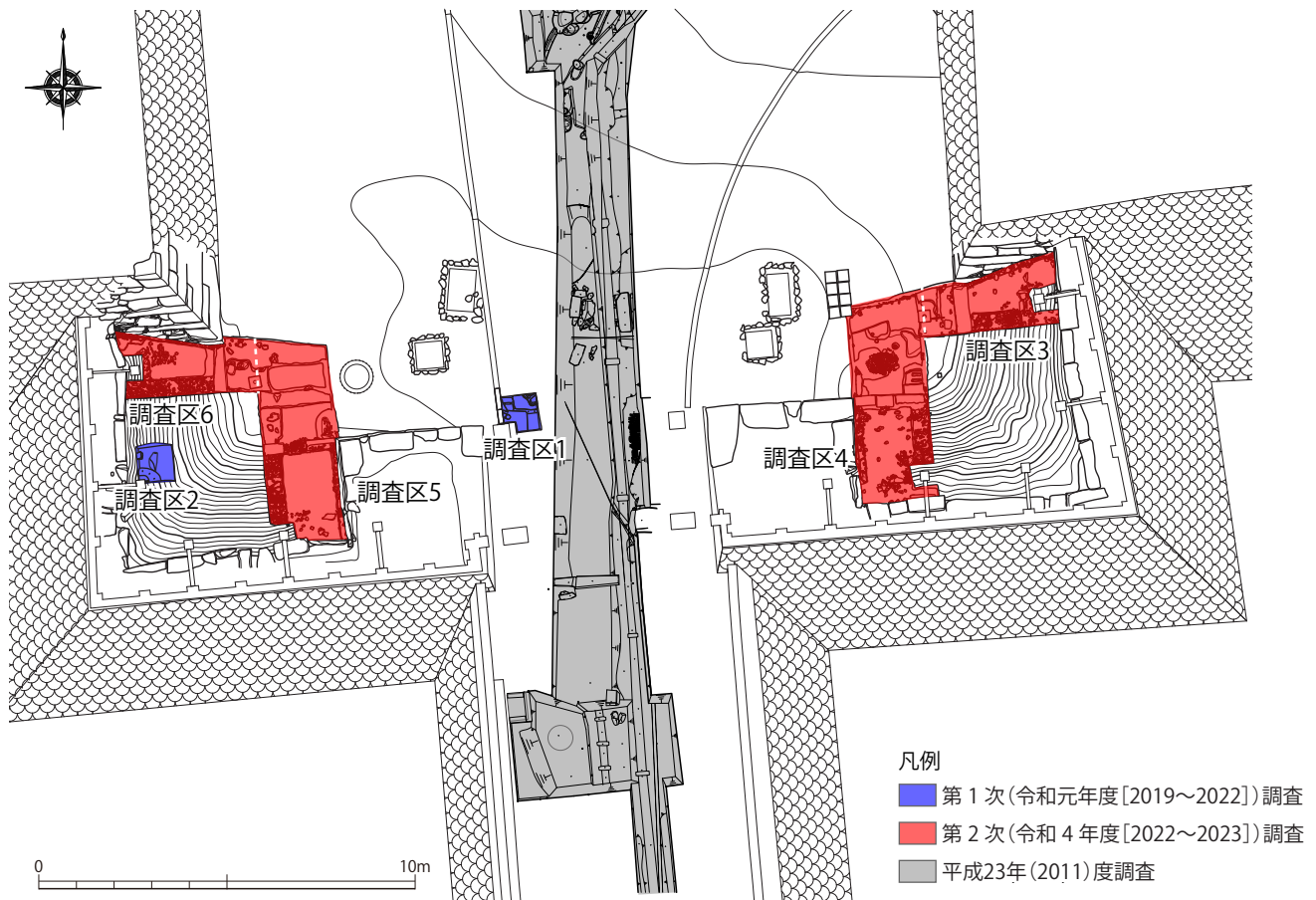
調査担当 大村陸、酒井将史

調査概要

重要文化財名古屋城表二の門は経年劣化が進行しており、大規模修理工事の計画が進められている。修理計画と合わせて、表二の門附属土塀の背面にかつて存在した雁木(石段)について情報を収集するため、試掘調査を実施した。調査区は附属土塀背面の土塁に4箇所(調査区3～6)を設定した。調査面積は36㎡である。

試掘調査の結果、雁木に関連する遺構として、雁木の最下段と考えられる切石、石垣表面を階段状に割り取った加工痕、土塁斜面に密集する円礫などを確認した。切石はすべての調査区の斜面裾部に横並びの状態出土した。そのうち1箇所では切石が抜き取られていた。また、かつて雁木と接していた石垣面において、石垣の表面を割り取った加工痕がみられた。加工痕は雁木に関連するものと考えられるが、部分的にしか認められず、雁木の段数を確認することはできなかった。すべての調査区で土塁斜面部に円礫が密集する状況を確認したが、円礫より下層で瓦を確認したため、築城当初の背面構造からは改変されていると考えられる。

以上のような成果から雁木に関連する遺構が残存することが判明したため、令和5年度(2023～2024)に土塁全体を調査範囲として発掘調査を実施する予定である。なお、令和4年度(2022～2023)調査成果の詳細は『名古屋城表二の門試掘調査報告書 第1次・第2次調査』(令和5年[2023]3月31日刊行)を参照のこと。



調査区位置図



調査区 3・4 完掘状況（北西から）



調査区 5・6 完掘状況（北東から）

(7) 二之丸庭園第10次発掘調査

調査期間 令和4年(2022)9月26日(月)～令和5年(2023)3月20日(月)

調査地区 二之丸庭園(北園池、東部)

調査面積 計428㎡(北園池:12㎡、東部416㎡)

調査目的 北園池:池護岸タタキ背面、池底、築山内部の構造把握及び園路の状況確認のための調査
東部:近世遺構の状況把握のための調査

調査担当 花木ゆき乃、高橋圭也、村上慶介

調査概要

本調査は、『名勝名古屋城二之丸庭園整備計画書』(名古屋市2022)における第1次工事(北園池)に伴う緊急追加調査及び第2次工事(東部)に向けた事前調査として実施した。調査区は北園池に5箇所、東部に1箇所(北区画・南区画)設定した(調査区位置図参照)。調査区1～3は池の構造確認、4～5は園路遺構確認、6は庭園遺構残存状況の確認を主たる目的とした。

調査区1は北園池護岸のタタキ背面を調査するため約2.0×1.0mの調査範囲を掘削した。主な出土遺物は、山茶碗、近世陶器、瓦片等であり、造成や流入により混入したものと考えられる。現地表面から深度30cm程度掘削した箇所から、池を構築した際の土壌と考えられる均一なオリブ褐色砂質土を検出し、その範囲の記録を作成した。

調査区2は北園池の池底の状況を確認するため、池底で、地面が露頭している箇所約3.0×1.0mの調査範囲とし、掘削した。主な出土遺物は、近世・近代陶磁器、ガラス片、鉄釘等である。掘削深度0.2m程度で、近代以降に溝として使用したと考えられる凹面のモルタル片を一部確認した。その下の暗褐色粘質土で構成される造成土を深度0.4～1.5m程度除去すると均一に広がる粒度の細かい黒褐色粘質土を検出した。池底の基盤層であると判断している。池底にタタキが敷設されるまでに0.4～1.5m規模で池底面を均していることが判明した。

調査区3は北園池内の築山内部の状況を確認するため、築山の南西部分約1㎡の調査範囲とし、掘削した。出土遺物は、表面採集したものを除いて土中には瓦片を検出するのみであったことから、短期間による造成で、流入物が少なかったものと判断できる。深度約0.3～0.6mに0.1～0.3m大の黄褐色粘質土ブロックが多量に混じる層が検出され、その下には肌理の細かい黒褐色粘質土層を一部確認した。これら盛土の種類の違いは、築山に浸透する雨水を効率的に排水しつつ、形状を維持するための工夫であったと考えられる。

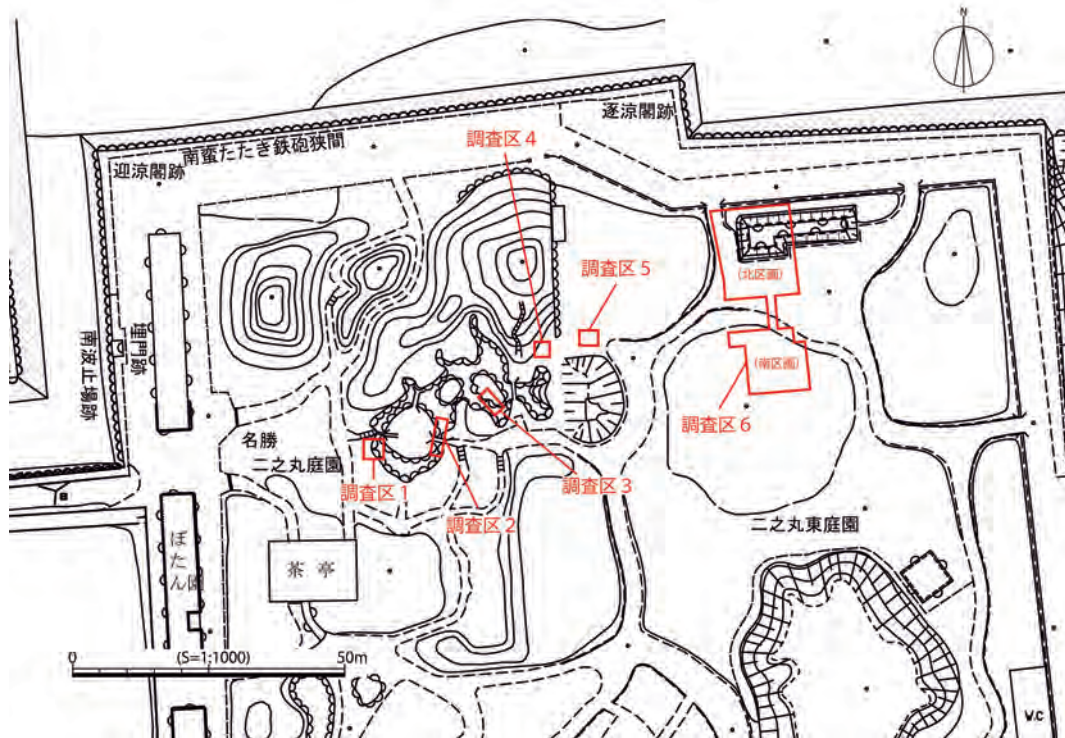
調査区4は、景石背面の園路遺構の有無を確認するため、約1㎡の調査範囲を深度約1.5m掘削した。調査区北側の権現山の造成に伴う流入土が上部土層大半を占め、園路遺構の検出に至らなかった。出土遺物は、近現代の植木鉢や瓦片など、後世に流入したものが主体であった。

調査区5は、調査区4で検出を試みた園路の延長部分が残存しているのかを確認するため、露出している景石の周囲約5㎡の調査範囲を深度約1.0m掘削した。調査の結果、北園地のタタキ護岸を一部確認したものの、園路遺構の検出には至らなかった。また、景石は、その下の層からレンガ片や、近代以降の瓦片等が出土されたため、近世庭園としての原位置を留めていないことが判明した。

調査区6では、およそ416㎡の規模に対し調査を実施した。以下便宜上「北区画」、「南区画」に分けて解説する。

調査区6(北区画)では、『御城御庭絵図(以下、「絵図」という。)]に描かれた文政期と推定される排水溝、ほぞ穴を伴う門礎石2石、塀の礎石を検出した。また絵図で確認されてないものの、東西に延びる高さ40cm程度の2段重ねの石段を検出したほか、北区画南西角には、景石を2石確認した。出土遺物は、近世～近代瓦が中心であり、廃棄土坑からは、近代～近現代陶磁器、ガラス、金属製品が出土している。

調査区6(南区画)では、明治初期の兵舎建設に伴う造成や配水管埋設、昭和50年代の盛土、近現代廃棄土坑等により、近世遺構が改変されているものの、南区画北西部で枯池跡、南区画中央西側で水門跡を検出した。これらの遺構が機能していた時期は不明であるが、遺構の出土状況、出土遺物の様相から、近世後半～近代初頭にかけて造営された庭園遺構の一部でないかと推定している。出土遺物は、近世～近代瓦片、レンガ片を中心とし、近代陶磁器、金属製品であった。



調査区位置図



調査区3 調査風景 (南より)



調査区6 (北区画) 遺構検出状況 (南西より)

(8) 西之丸発掘調査

調査期間 令和4年(2022)2月14日(月)～8月31日(水)

調査地区 西之丸

調査面積 1,057㎡

調査目的 西の丸御蔵城宝館の外構整備のための発掘調査

調査担当 酒井将史、濱崎健、大村陸、村上慶介

調査概要

名古屋城の西之丸には、かつて六棟(当初は五棟)の米蔵が配置された「御蔵構え」とよばれる空間が存在したことが文献(『金城温古録』)に記されている。このうち、三番御蔵・四番御蔵については、重要文化財等の展示・収蔵施設(西の丸御蔵城宝館)として建物の外観復元を行ったが、他の四棟の米蔵(一番・二番・五番・六番御蔵)については、整備が行われていない。蔵跡の位置表示などの整備をおこなうにあたり、蔵の情報を収集するため、発掘調査を実施した。

一番御蔵(A～C区)、二番御蔵(C～F区)、五番御蔵(G区・H区)、六番御蔵(I区)、水道(J区)の範囲確認等を目的に、計10箇所の調査区を設定した。当初は全1,045㎡の予定であったが、途中遺構の範囲と性格を把握するために、I区西側に12㎡の拡張区を設けた。

調査の結果、近代においても建物自体は存続した一番御蔵と六番御蔵については、蔵に関する遺構を検出できたが、近代初めに建物が取り壊された二番御蔵と五番御蔵では、近世の遺構は確認できなかった。

一番御蔵の調査では、A区・B区より礎石の抜き取り痕跡や近代に倉庫として活用された際の水路などを検出した。また、一番御蔵の東から二番御蔵の西にかけて設定したC区の調査では、一番御蔵・二番御蔵間に存在したとされる御蔵御門の柱位置を示す痕跡や『金城温古録』にも記されている「水道」と推定される石組水路を検出した。

また六番御蔵の調査(I区)では、礎石の抜き取り痕跡や蔵の周囲を巡る地覆石を確認し、蔵の規模や位置を把握することができた。

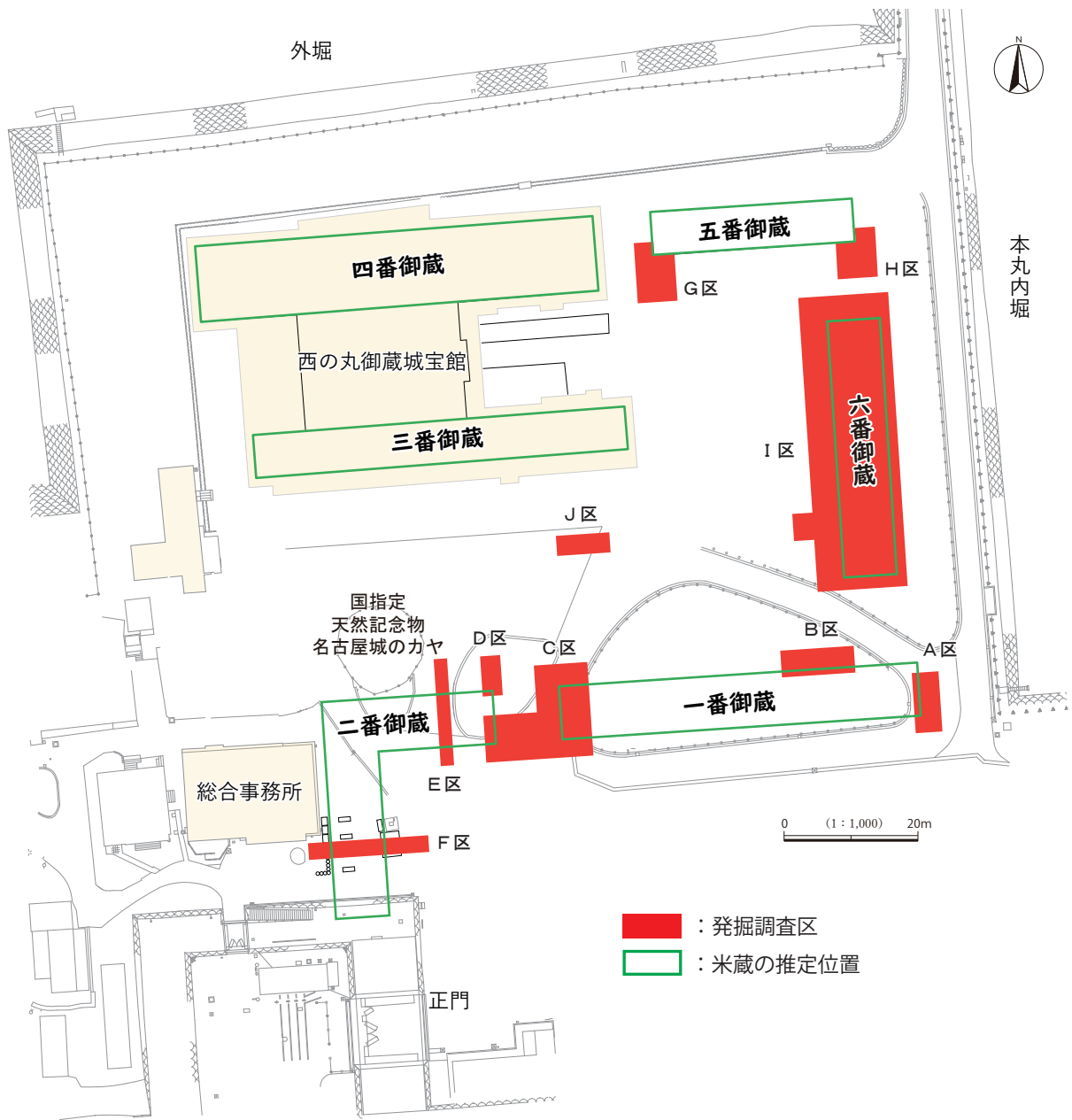
今後は、発掘調査で得られた情報等をもとに御蔵構えの整備を計画・実施していく。



B区 調査風景(北西より)



I区 石列検出状況(東より)



調査位置図

2 その他調査

(1) 二之丸庭園景石調査

調査期間 令和5年(2023)1月9日(月)～3月31日(金)

調査対象景石 名勝二之丸庭園 1,058石

調査目的 景石の石種、大きさ、産地などを把握し、庭園修復整備事業における新補景石選定の参考にするもの

調査担当 高橋圭也、花木ゆき乃

調査概要

名勝二之丸庭園を西、東、北池に便宜的に区分し、今回は西にて景石鑑定を行った。景石に対して肉眼観察と計測を行い、観察内容を景石カードに記載した。景石カードは1石に対して1枚作成した。また、平面図に石種ごとに色分けを行った石種分布図を作成した。

観察の結果、近世の作庭と考えられている箇所は高さ1.0mを越える大きな片岩が多く、砂岩が少ない石種構成であった。近代の作庭と考えられている箇所は高さ1.0m程度の砂岩と加工された花崗岩が多く、片岩が少ない石種構成であった。

(2) 石垣カルテの作成

調査期間 令和5年(2023)1月30日(月)～3月29日(水)

石垣カルテ作成面積 11,187㎡(46面)

オルソ画像作成面積 0㎡

調査目的 特別史跡範囲内の石垣の基礎的情報(長さ・高さ・勾配・積み方など)の収集及び健全性の調査

調査担当 大村陸、二橋慶太郎

調査概要

石垣カルテの作成は平成29年度(2017～2018)より継続的に実施している事業であり、令和4年度(2022～2023)で6年目となる。

令和4年度の石垣カルテでは本丸、二之丸、御深井丸、西之丸、三之丸地区(水堀を含む)の石垣を対象とした。石垣に近接して勾配の計測や肉眼での積み方などの観察、破損状況の確認を行った。水堀部分については、ボートにより接近して観察を行った。

調査の結果、直ちに崩落の恐れがある石垣は見られなかったものの、石垣の変状や築石の割れ、間詰石の抜けが各所で確認された。なかでも二之丸外堀北東隅の134N・135N・204N石垣では、檜台周辺で変状や飛び出し等が顕著に確認され、天端部も大きく乱れている状況を確認した。外堀に面した石垣ではあるが、崩落の危険性の高さを考慮し、今後も状況を注視していく。

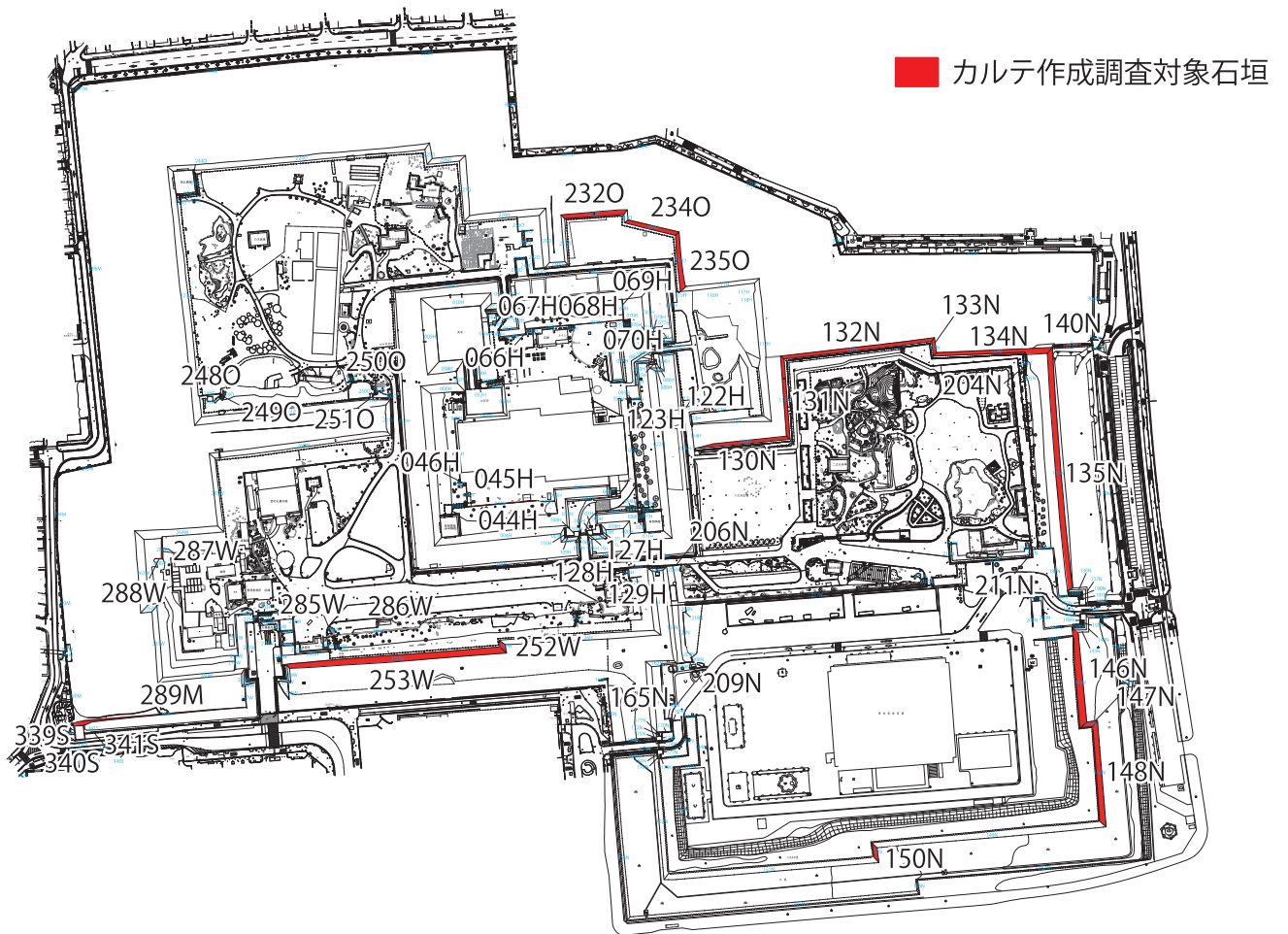
そのほか、西之丸外堀の253W石垣では、使用石材と刻印の分布の切り替わりを顕著に確認することができた。丁場割図では東から前田・毛利(秀就)・寺澤・竹中・福島と複数の大名に分けられており、石材と刻印の切り替わりがこれらの丁場境に対応すると考えられる。また、本丸東北隅櫓の069H・070H石垣、三之丸巾下門の339S・340S石垣の角石に比較的軟質の砂岩が用いられていることを確認した。城内でよく見られる硬質砂岩(養老山地で採石されたいわゆる河戸石)とは異なるもので、採石地が異なることが考えられる。軟質砂岩は風化による剥離等の劣化が進んでおり、今後も継続的な観察が必要な箇所である。



現地調査の様子（123H石垣）



現地調査の様子（水堀部）



令和4年度石垣カルテ調査対象石垣位置図

(3) 特別史跡範囲内石垣現況調査

調査期間 令和4年(2022)6月1日(水)～令和5年(2023)3月31日(金)

調査地区 本丸・二之丸・西之丸・御深井丸・三之丸地区(特別史跡範囲内)

調査面積 約67,300㎡(365面、搦手馬出解体範囲を除く)

調査目的 日常点検として石垣に大きなき損や変状がないか確認し、現状を記録する

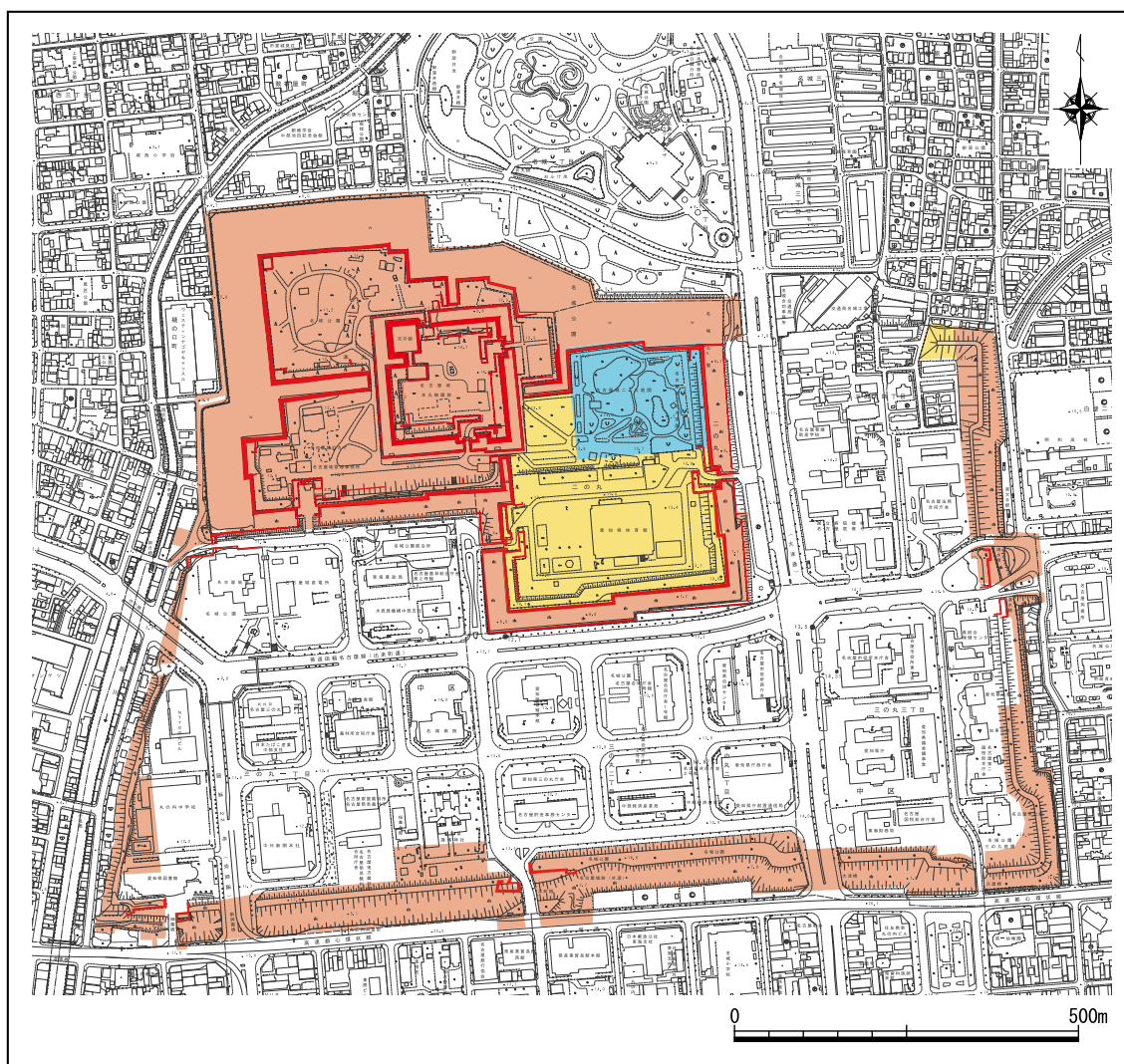
調査担当 村木誠、酒井将史、西本菜由、花木ゆき乃、二橋慶太郎、濱崎健、高橋圭也、大村陸、村上慶介、大西健吾

調査概要

名古屋城跡内における石垣管理の一環として、特別史跡範囲内石垣の現況確認調査を行った。

調査は名古屋城調査研究センターの考古担当学芸員が分担し、担当の石垣を半年に1回の頻度で通年観察した。調査にあたっては石垣石材の落下など、石垣に大きなき損や変状がないかを確認し、写真撮影による記録を行った。

通年による調査の結果、石垣に大きなき損や変状は確認されなかったものの、一部の石垣では間詰石の落下が確認された。今後も継続して調査を実施し、石垣の保全に努めていく。



特別史跡指定範囲 名勝指定範囲 史跡範囲(未告示) 調査対象石垣

調査対象石垣位置図

3 工事立会

(1) 二之丸庭園修復整備工事

工事期間 令和5年(2023)2月13日(月)～3月28日(火)

工事地区 二之丸(北)

事業面積 ー

工事原因 名勝名古屋城二之丸庭園修復整備工事(北園池護岸タタキのひび割れ修理、景石の保存修理)

立会担当 高橋圭也、村上慶介、花木ゆき乃

立会結果

二之丸庭園では平成24年度(2012～2013)から毎年修復整備工事を実施している。令和4年度(2022～2023)は北園池にて護岸タタキのひび割れ修理と景石の保存修理を行った。

ひび割れ修理は、護岸タタキのひび割れ部分の苔や汚れ等を清掃後、補修材を充填した。補修材の配合については自然科学分析の結果等を踏まえたサンプルを作成した上で作業を行った。

景石の保存修理は石の大きな割れの内部に補修材を充填した。割れによる崩壊を防ぐためにステンレスピンで結合し、表層は補修材を含むモルタルで埋め、さらに表面には石粉で石材意匠を模した化粧を行い、景観に溶け込む処置を行った。

景石の保存修理の際、ステンレスピンと石材を結合するためにエポキシ樹脂等の補修材を使用したところ、石材の隙間から流出した補修材の一部が池底のタタキに付着して硬化したため、除去して原状に復旧した。

なお、保存修理の着手前写真では直立していた護岸タタキが完了立会時に傾倒していることを確認した。護岸タタキについては庭園部会構成員の指導の下、復旧を行う予定である。



ひび割れ修理



景石の保存修理

(2) 二之丸庭園便所改修工事

工事期間 令和4年(2022)9月21日(水)～令和5年(2023)2月8日(水)

工事地区 二之丸(北)

事業面積 ー

工事原因 二之丸庭園内の便所改修

立会担当 酒井将史、西本菜由、濱崎健、大村陸、高橋圭也、花木ゆき乃

立会結果

二之丸庭園便所改修工事に際し、立会を実施したものである。

便所改修にあたり、新規の配管を設置するために約51㎡の掘削を行った。掘削は二之丸庭園便所設置時に掘削された範囲内で行われた。遺物は出土しなかった。



新規掘削立会写真

4 資料調査（文書典籍・美術工芸）

概要

令和4年度（2022～2023）は、調査研究センターが発足した令和元年度（2019～2020）より継続的に収集してきた名古屋城関連の文献・史料の内、公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所（東京都豊島区）が所蔵する歴代藩主の名古屋城巡覧記録である『国秘録 御巡覧留』3冊を翻刻の上、解題を付して『名古屋城史料叢書1』として刊行した。文献・史料収集は継続して実施し、下記一覧のとおり、9件21点の名古屋城関連資料を複写・収納した。

名古屋城整備事業に基づく発掘調査で、令和4年度に実施した本丸内堀・本丸表二の門・二之丸庭園・西之丸御蔵構での発掘調査において、発掘の裏付け・補完を行う文献調査を実施した。その成果の一部は各報告書に反映した。

重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画修理事業並びに障壁画復元模写事業において、修理及び復元模写方針策定に関する助言・管理指導を行い、修理・復元模写が完了した案件については納品確認・保管措置を行った。令和3年度（2021～2022）より継続して実施している織田信長関係染織資料の修理については修理経過指導を行った他、名古屋城銅鯨・金鯨鱗片・焼損金具類の科学調査を実施し、成分・組成の解析を行った。

その他、昨年度に引き続き西の丸御蔵城宝館展示室において特別展1回・企画展4回・名古屋城振興協会所蔵品展1回を実施し、展示の裏付けとなる調査・検証を行った上で、初公開品を含む重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画を延べ209日間にわたって公開した。名古屋城振興協会所蔵品展「火縄銃」の実施に合わせて刊行した『名古屋城振興協会所蔵作品集 火縄銃』では編集協力を行い、特別展「家康とお嫁様—名古屋城と春姫お輿入れ—」展では調査に基づき展示品リーフレットを編集・刊行した。

複写収集資料一覧

資料名	資料番号	点数
徳川林政史研究所所蔵資料		
国秘録 御巡覧留 一	旧蓬左-28-3-35	1冊
国秘録 御巡覧留 二	旧蓬左-28-3-36	1冊
国秘録 御巡覧留 三	旧蓬左-28-3-37	1冊
国秘録 御巡覧留続篇 一	旧蓬左-28-3-38	1冊
国秘録 御巡覧留続篇 二	旧蓬左-28-3-39	1冊
国秘録 御巡覧留続篇 三	旧蓬左-28-3-40	1冊
尾州御留守日記（天保5年）	尾2-69	3冊
尾州御留守日記（天保8年）	尾2-70	4冊
尾州御留守日記（天保9年）	尾2-71	3冊
書状留	林-3235	2冊
木材仕出注文書	林-2703	1冊

5 デジタル化事業

(1) 名古屋城史跡管理システム

概要

令和4年度(2022~2023)は、発掘調査の調査区設定および城内における現状変更等に活用するため、特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置情報を下記の通り集成し、システムに登録した。

今後も、名古屋城内で実施された現状変更、発掘調査等について、情報の更新を進めていく。

登録情報

令和4年度(2022~2023) 特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置 全62件

(2) 名古屋城関係資料データベース

概要

名古屋城調査研究センターでは、令和元年度(2019~2020)より名古屋城に関する資料の高精細デジタル画像を検索・閲覧できる「名古屋城関係資料データベース」を導入した。現在は所内での調査研究事業に活用している。また、データベースの拡充を図るため、毎年継続的に名古屋城関連史料の高精細デジタル画像を作成し、データベースへの追加登録を行っている。

令和4年度(2022~2023)は、名古屋市蓬左文庫所蔵「張州雑誌」、多久市郷土資料館所蔵「多久鍋島家文書」、個人蔵の名古屋城関連図面の高精細デジタル画像をデータベースに登録し、画面上で原資料の閲覧ができるようにした。

登録情報

令和4年度(2022~2023) 新規登録画像

種類	提供	資料点数	画像点数
古絵図	個人	21点	50点
	名古屋市蓬左文庫	3点	10点
古典籍	名古屋市蓬左文庫	50点	2,514点
古文書	多久市郷土資料館	13点	13点

データベース登録画像一覧

種類	提供	画像点数
古絵図	愛知県図書館	2点
	徳川美術館	15点
	徳川林政史研究所	10点
	名古屋市博物館	12点
	名古屋市蓬左文庫	1,712点
	個人	40点
昭和実測図	名古屋城総合事務所	310点
その他図面	名古屋城総合事務所	86点
野帳	名古屋城総合事務所	277点
拓本	名古屋城総合事務所	561点
ガラス乾板写真	名古屋城総合事務所	737点

重要文化財旧本丸御殿障壁画	名古屋城総合事務所	1,080点
古典籍	名古屋市蓬左文庫	5,444点
古文書	多久市郷土資料館	13点
合計		10,299点

※ 上記表「令和4年度新規登録画像」を含む。

※ 令和4年度より資料の種類に「古文書」を追加した。

※ 資料1件につき複数の画像を登録した資料があるため、画像点数は資料件数とは異なる。

Ⅱ 資料管理

1 所蔵資料・受託資料の概要

(1) 所蔵資料

①重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 (331面、附16面)

重要文化財 名古屋城本丸御殿天井板絵 (331面、附369面) 計1,047点

慶長20年(1615)造営、寛永11年(1634)増築の本丸御殿内に描かれた障壁画群。本丸御殿は昭和20年(1945)の空襲により焼失したが、事前の疎開により襖絵、障子腰貼付絵、杉戸絵、天井板絵は焼失を免れた。なお、壁貼付絵は取り外しが困難なことから事前の疎開ができず、本丸御殿と共に焼失した。

障壁画は慶長造営期・寛永増築期を通じて、狩野派の絵師によって描かれた。慶長造営期は当時の狩野家当主であった狩野貞信をはじめ、狩野甚之丞などが担当、寛永増築期は江戸幕府の御用絵師である狩野探幽をはじめ、狩野奎之助などが担当した。

城郭御殿の障壁画が一括して保存されている事例は、京都市・二条城と名古屋城の2例のみであり、全国的に見ても極めて貴重な資料群である。

文化財指定の経緯

昭和17年	1942	6月26日	障壁画345面(附16面)が国宝保存法に基づく国宝(旧国宝)に指定
昭和25年	1950	8月29日	文化財保護法施行に伴い、旧国宝のうち障壁画199面(附16面)が重要文化財に指定(旧国宝指定分のうち障壁画146面は戦災により焼失)
昭和30年	1955	6月22日	障壁画132面が重要文化財に追加指定
昭和31年	1956	6月28日	天井板絵331面(附369面)が重要文化財に指定

②ガラス乾板写真 738枚

昭和15～16年(1940～41)に、旧国宝に指定されていた建造物24棟および本丸御殿障壁画を中心に撮影された写真。一部、戦後に撮影されたものや他のガラス乾板写真の転写などを含む。

③昭和実測図 307枚

昭和7年(1932)時点で旧国宝に指定されていた建造物24棟の詳細な実測図。昭和7年(1932)実測調査開始、昭和17年(1942)完了、第二次世界大戦による中断を経て、昭和27年(1952)に清書完了。屋根瓦や飾金具の拓本も含まれる。

④その他の主要な所蔵資料

1. 享元絵巻…尾張藩七代藩主・徳川宗春の治世下、享保17～21年(1732～1736)頃の名古屋城下本町通沿いの様子を描いた画卷。遊郭や芝居小屋の賑わいなど、当時の風俗を鮮やかに描く。
2. 金城温古録…奥村得義、定によって編纂された名古屋城の詳細な記録集。明治26年(1893)に名古屋城の本丸・西之丸などが陸軍省から宮内省に移管され、名古屋離宮となるが、名古屋城本はその際に第三師団司令部所蔵本(現靖國神社遊就館本)を転写し作成された。全64巻のうち、得義が尾張藩に献納した31巻分のみの写本となっている。
3. 木子コレクション…故木子進發氏が収集した計865点に及ぶ刀剣・刀装具のコレクション。
4. 戦災資料…焼損した天守・本丸御殿の金具、金鯰の鱗片、焼夷弾の弾頭など。
5. 収集資料…武器、甲冑、名古屋城の図面類など、近世武家文化・名古屋城に関わるものが中心。

(2) 令和4年度受贈資料

・名古屋城関係綴 1件1点

名古屋市教育委員会社会教育課が昭和31年（1956）から32年（1957）にかけて起案した名古屋城に関する現状変更許可申請の決裁書類の綴り。名古屋城管理事務所の増改築工事、天守閣等再建工事に昭和29年度（1954～1955）の天守穴蔵石垣解体に関する文書の一部を含む。

・御深井焼能面箱形水滴・刀・能装束など 4件72点

尾張藩土生駒家に伝わった御深井焼能面箱形水滴および刀などの他、観世流シテ方として活動された寄贈者が自身の演能に際して誂えた装束および能道具一式。

・刀・槍など 3件3点

「刀 銘 尾張国政常/天保十己亥年十一月吉日」・「脇指 銘 蓬左政常」・「三角槍 銘 兼常」の尾張ゆかりの刀工作品。

・某華族家伝来甲冑・刀剣・拵など武具 26件34点

水戸徳川家・清水徳川家をはじめとする諸大名家伝来の甲冑・刀剣類を一括して伝えた某華族家伝来品の他、寄贈者自身が収集した上杉鷹山所持の「太刀 無銘 志津」などの刀剣・武具類。

・黒漆塗葵紋十六裏菊紋蒔絵長持・名古屋城古釘転用火箸など 3件4点

尾張徳川家3代綱誠正室新君の婚礼道具の一つである葵紋及び十六裏菊紋付き長持をはじめ、天守閣再建時に寄付金への謝礼として用いられた名古屋城の古釘を転用した火箸など。

(3) 令和4年度購入資料

・絵図 「名古屋城新御殿図」 1件1点

江戸時代後期、尾張藩10代藩主・徳川斉朝が隠居屋敷として名古屋城下御深井御庭の西に設けた新御殿を描いた平面図。

(4) 令和4年度受贈・購入図書

(単位：冊)

	報告書	図録	紀要	年報	資料集	リーフレット	一般書籍等	合計
受贈	100	173	55	35	11	13	157	544
購入	6	1	1	0	0	0	40	48
合計	106	174	56	35	11	13	197	592

2 資料の修理

(1) 名古屋城日本丸御殿障壁画保存修理事業（文化庁補助事業）

昭和61年（1986）からの継続事業。障壁画331面については平成17年度（2005～2006）に根本修理（解体修理）を完了した。平成27年度（2015～2016）より根本修理完了画面について点検修理を実施しており、並行して天井板絵331面（附369面）の根本修理を実施している。令和4年度（2022～2023）は下記に示した画面を修理した。

このうち天井板絵の点検修理は、令和4年度からはじめた修理であり、過去に修理した天井板絵の状態を点検修理するもので、折上部の天井板絵（R天井板絵）から開始した。

また、R天井板絵の修理が令和4年度分を含め3面で終了する見込みであるが、そもそもR部の修理は、本紙と木部の間にカーボンを挟むという天井画としては前例のない工法を、修理技術者・文化庁・名古屋城管理事務所（当時）間で協議し開発したものである。本紙・木部間の構造は、修理終了後は隠れてしまうので、百年後に来るかもしれない再修理時に構造がよく把握できるよう、令和4年度補助事業の中で構造模型2基を制作することとした。

2基のうち1基は木部の模型とし、1基は木部に下張・カーボンなどを順に貼り合わせた。使用した材料もあわせて納品された。今後は展示等でも活用し、市民啓発を行う予定である。

令和4年度（2022～2023）修理画面

①点検修理

作品名	場所	形状		面数
山水花鳥図 41	対面所納戸次之間 西側	襖絵	紙本着色	4面
山水花鳥図 42	対面所納戸上之間 東側	襖絵	紙本着色	4面
風俗図 38	対面所次之間南側	障子腰貼付絵	紙本着色	4面
竹椿図 95	御湯殿書院上段之間 北側	襖絵	紙本金地着色	1面
画題不詳 1	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
雁図 2	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
画題不詳 3	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
山水図 4	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
合計				17面

②根本修理

作品名	場所	形状		面数
山水図 196	上洛殿一之間	天井板絵R変形	紙本墨画	1面
七宝唐草文図附 283～318	上洛殿三之間	天井板絵	紙本着色	26面
合計				27面

(2) 織田信長関係染織資料

令和3年度に引き続き、下記に示した染織資料の修理を行った。令和4年度（2022～2023）は、解体、汚れや折れの軽減、補修である。

資料番号	資料名	材質	員数
499-1	萌黄四ツ目菱斜格子緞子地木瓜紋鎧下着	緞子地	1領
499-2	紅麻地木瓜紋籠目文鎧下着	麻地	1領
497-1	軍旗	絹、革、金箔	2旒

3 資料の利用

(1) 資料貸出

なし

(2) 写真貸出

48件185点（観光用写真を除く）

(3) 熟覧

熟覧日	熟覧者	熟覧目的	熟覧資料
令和4年度（2022～2023） 4回	名古屋城本丸御殿復元模写 共同体	名古屋城本丸御殿模写作成 の参考のため	重要文化財名古屋城旧本丸 御殿障壁画・天井板絵

Ⅲ 展示事業

1 西の丸御蔵城宝館 展示室

(1) 「風薫る 殿の御庭」

展示概要

会期：令和4年（2022）4月23日（土）～6月12日（日） 51日間

入館者数：39,250人（1日平均769.6人）

出品件数：32件

展示趣旨：

かつて名古屋城にあった二之丸御庭は、文政年間（1818～1830）に尾張藩10代藩主・徳川斉朝がおこなった大改造によって様々な趣向を凝らした和風回遊式庭園へと変貌を遂げた。また、水堀を挟んで名古屋城の北側に造営された下御深井御庭は、自然豊かな景観を生かした庭園として歴代藩主の憩いの場となっていた。本展示会では、江戸時代後期の二之丸御庭を描いた巨大絵図「御城御庭絵図」をはじめとした数々の資料から、名古屋城にあった二つの大名庭園の姿を紹介する。

作品解説

第一章 二之丸御庭

名古屋城二之丸御殿は初代藩主・義直が元和6年（1620）に移り住んで以来、江戸時代を通して尾張藩の政庁かつ藩主の居住空間となった。

寛永6年（1629）頃には、義直によって御殿の北側に御庭が造営された。当初は義直が重視した儒教思想を反映した中国風庭園だったが、文政年間（1818～1830）には10代藩主・斉朝によって御庭の大改造がおこなわれた。義直時代にあった中国風建物は姿を消し、二之丸御庭は茶席や築山が点在する和風回遊式庭園になった。園路の周辺には多くの樹木や草花が植えられ、四季折々の風景を楽しむことができた。

明治になると二之丸は陸軍の管轄となり、御庭の大部分が撤去された。しかし、現在の北池周辺は陸軍時代も庭園として利用されたため、池や石組が残っており、往時の景観をしのぶことができる。

1 御城二之丸図【おしろにのまるず】

江戸時代 天保13年（1842）以降 名古屋城総合事務所蔵

江戸時代後期の二之丸全体を描いた図面。二之丸御殿は尾張藩の政庁および藩主の居住空間であった。御殿の南側には、馬場や弓場を備えた「向屋敷」があり、藩士たちが藩主や重臣に武芸を披露する場として使用された。御殿の北側には10代藩主・斉朝によって文政年間（1818～1830）に改造された二之丸御庭が描かれており、広大な規模を誇っていたことが分かる。二之丸御殿は常用の御殿であり、何度も増改築がおこなわれた。本図は御殿奥向の長局为天保13年（1842）に移築された後の位置に描かれているため、作成年代为天保13年以降であることが確実である。

2 御城御庭絵図【おしろおにわえず】

江戸時代 19世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

10代藩主・斉朝による改造後の二之丸御庭を描いた巨大絵図。義直時代の唐風建物は撤去され、築山や茶席を設けた和風回遊式庭園となっている。東側にも御庭が拡張され、御庭の東南には新たに園池が設置された。茶席には季節や場所にちなんだ名前が付けられ、間取りが描かれている。これらの茶席は庭内を遊覧するときの休憩や饗宴の場として使用された。庭内には季節ごとに景観が変わるように桜や紅葉などの植栽が施され、御殿の桜之間付近にあった「御植木屋」では、花壇や植木鉢を並べた雛壇が設置されていた。

3 徳川斉朝書状【とくがわなりともしょじょう】

江戸時代後期 天保12年(1841)6月6日付 名古屋城振興協会蔵

10代藩主・斉朝が幕府若年寄である大岡忠固・内藤頼寧に出した書状。天保12年(1841)5月28日に12代将軍・家慶の嫡子である家祥(のちの13代将軍・家定)と鷹司政熙の娘である有姫の縁組が公表されたことについて、祝賀の言葉を述べている。斉朝の藩主在任期間は寛政12年(1800)から文政10年(1827)で、隠居後は名古屋城北側の「新御殿」に居住していた。斉朝が隠居生活を送りながら将軍家と書状を介してやり取りをしていた様子が見える。

4 多春園御引建伺図面【たしゅんえんおひきたてうかがいずめん】

明治3～4年(1870～1871) 名古屋市蓬左文庫蔵

二之丸御庭に建っていた二階建ての茶席「多春園」の間取りを示した図面。平面図を重ねて間取りを示している。多春園が明治初年頃に三之丸にあった「御屋形」に移築された際の図面で、従来の間取りが墨線、改築部分が朱線で示されている。一階には六帖と三帖の部屋があり、西側には土間に降りる通用口と二階に上がる階段があった。多春園は栄螺山の北麓にあった。その名の通り春の景観が意識され、「御城御庭絵図」には多くの桜が園路に植えられている。

5 多春園御二階図【たしゅんえんおにかいず】

明治3～4年(1870～1871) 名古屋市蓬左文庫蔵

多春園二階の間取りと屋根の形状を示した図面。出品番号4「多春園御引建伺図」と同じく、明治初年の移築時に作成された図面である。二階には東面に七帖と三帖の部屋があり、西側の階段から入ようになっていた。手すりの付いた縁側が巡らせてあり、庭内の眺望を楽しめる構造になっていた。出品番号2「御城御庭絵図」には多春園の二階と屋根が描かれていないため、本図は全体の構造を知ることができる貴重な資料である。

6 余芳亭障壁画 障子腰板絵 春景草花図【よほうていしょうへきが しょうじこしいたえ しゅんけいそうかず】

江戸時代 19世紀 名古屋城総合事務所蔵

二之丸御庭にあった茶席「余芳」にはめられていた腰板付きの障子戸。障壁画の下部にはタンポポやレンゲソウが描かれ、上部には金砂子を散らすことで春霞がたなびいた遠山の景色を表現している。余芳とは残り香という意味を持つ言葉であり、冬から春へと季節が移ろいゆく時期の景観を描いていることが分かる。茶席「余芳」は、北池の東岸付近にあった四畳半一室の小さな建物で、北東に上段、南面に開口部である縁側が配置されていた。西面の戸を開けると、池の中島を眺めることができる構造になっていた。

★(出品番号7～11)「名古屋城二之丸庭園」発掘調査出土遺物

明治4年(1871)以降、二之丸御庭の大部分は解体されたが、御泉水周辺の「北庭」は現在も残存しており、大名庭園としての姿を残していることから、昭和28年(1953)には「名古屋城二之丸庭園」として国の名勝に指定された。その後の発掘調査等によって、江戸時代後期の庭園遺構が地下に残されていることが分かり、平成30年(2018)にはかつての二之丸御庭のほぼ全域が名勝の追加指定を受けている。平成25～27年(2013～2015)の発掘調査では、栄螺山北の多春園付近や権現山東麓の山下御席付近で建物遺構が確認されたほか、御庭で使用されていたとみられる瓦も出土している。

7 三葉葵紋丸瓦【みつばあおいもんまるがわら】

江戸時代 18～19世紀 名古屋城総合事務所蔵

栄螺山北で発掘された丸瓦。瓦当面には陽刻の葵紋が彫られており、葉脈も陽刻で表されている。

8 三葉葵紋丸瓦【みつばあおいもんまるがわら】

江戸時代 18～19世紀 名古屋城総合事務所蔵

権現山東で発掘された葵文の丸瓦。瓦当面には陽刻の葵文が彫られているが、出品番号7「三葉葵紋丸瓦」とは異なり、葉脈が薄い陰刻で表され、側面の周縁部も狭くなっている。

9 兎紋緑釉丸瓦【うさぎもんりよくゆうまるがわら】

江戸時代 18～19世紀 名古屋城総合事務所蔵

権現山東で発掘された丸瓦。小型であるため軒棧瓦の一部であるとみられる。瓦当面には陽刻の兎文が彫られ、発色が良くないものの緑釉がかけられている。二之丸庭園の発掘調査では他にも兎文瓦の出土例があるため、庭内で使用された文様であることが推測される。

10 連珠三巴紋緑釉軒丸瓦【れんじゅみつどもえもんりよくゆうのきまるがわら】

江戸時代 18～19世紀 名古屋城総合事務所蔵

権現山東で発掘された軒丸瓦。瓦全体に緑釉がかけられており、瓦当面と側面は綺麗な緑色になっている。

11 菊花紋施釉海鼠瓦【きっかもんせゆうなまこがわら】

江戸時代 18～19世紀 名古屋城総合事務所蔵

権現山東で発掘された施釉瓦で、体部の直線的な形状から海鼠瓦もしくは塀などの屋根部分であると推定される。側面には陰刻の菊花文が彫られ、上面には陽刻の菊花文が貼り付けてある。全体的に灰釉がかけられているが、菊花文のみ鉄釉がかけられ黒色になっている。

12 桜御間南御庭四季之図【さくらおんまみなみおにわしきのず】

江戸時代後期 19世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

二之丸御殿桜之間の南面にあった内庭を描いた図面。桜之間は藩主の私的な生活空間である奥向にあった御座所の一つで、北隣の梅之間とともに二之丸御庭に隣接していた。飛び石が北側の入口から延びており、椿・蠟梅・桜・紅葉・ドウダン等の季節の草花や、槇・蘇鉄・松等の樹木が全面に植えられていた。ほかに石組や石灯籠があり、庭内の景観を形作っていた。殿舎に囲まれた狭い空間ながら、季節ごとに様々な景観を楽しめる内庭であったことが分かる。

13 二之丸御殿釘隠金具【にのまるごてんくぎかくしかなぐ】

江戸時代前期 17世紀 名古屋城総合事務所蔵

二之丸御殿に使用されていたとされる釘隠。釘隠は和釘の頭を隠すために長押上に取り付けられる金具で、名古屋城の御殿では華やかな装飾を施した飾金具が用いられた。葵紋の周囲に菱形模様を配して左右に菊花を散らしている。二之丸御殿が本丸御殿と同じく豪華な装飾を散りばめた建物であったことが推測される。二之丸御殿は明治4年(1871)の廃藩置県以降、建物の解体が急速に進み、御殿の装飾品は建築部材と共に大部分が失われた。本品は二之丸御殿の装飾を伝える貴重なものとなっている。

14 葵紋付銀葉缶【あおいもんつきぎんやかん】

江戸～明治時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

尾張徳川家で使用された銀製の葉缶(銀瓶)。簡素な造形をしているが、瓶全体に唐草模様があしらわれ、胴の部分に五つ・蓋に三つの葵紋が配置された大名調度らしい道具である。付属する木箱の表側には「御備銀 御広敷御用部屋」とあり、大奥との取次役である御広敷の詰所に保管されていたことが分かる。さらに、木箱の裏側には「名古屋城址 徳川邸」とあり、明治時代の尾張徳川家の屋敷の一つである「奥山町邸」で使用されていたことが分かる。

15 梨子地葵紋付棗【なしじあおいもんつきなつめ】

江戸時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

棗は茶道で抹茶を入れるための容器で、濃茶で用いる「茶入」に対して薄茶で用いる漆器のことをいう。金梨子地が施されており、蓋上には金時絵で葵紋があしらわれている。徳川家で用いられた大名道具とみられる。斉朝は茶事に造詣が深く、庭内でも茶会を催していた。二之丸御庭では「多春園」や「霜傑」のほか、権現山東麓の「山下御席」で茶会がおこなわれた記録が確認できる。

16 黒漆塗松橋鶴亀蒔絵香合【くろうるしぬりまつたちばなつるかめまきえこうごう】

江戸時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

香合は香を入れる容器で、炉の中で焚く香木や練香などを入れるために用いられた。本品は複数の香を入れるために、容器内のスペースが上下二段に分かれるようになっており、蛤型の蓋を合わせて三重構造になっていた。黒漆塗の上から金蒔絵で長寿吉祥の象徴である松・橋や鶴・亀を精緻に描いた優美な香道具である。

17 黒漆塗葵紋唐草蒔絵菓子盆【くろうるしぬりあおいもんからくさまきえかしぼん】

江戸時代 19世紀 名古屋城総合事務所蔵

高台が付いた黒漆塗の菓子盆。胴部には金蒔絵で三つの葵紋と唐草模様が施され、器の中央には大きく葵紋があしらわれている。徳川家で用いられた大名道具とみられる。嘉永元年（1848）に14代藩主・慶恕（慶勝）の実父である高須松平家10代藩主・松平義建が御庭御覧に招かれた際には、二之丸御庭の「霜傑」で煎茶と菓子が振る舞われており、本品のような器が使用されたことが想定される。

★義直時代の二之丸御庭

「中御座之間北御庭惣絵」は、初代藩主・義直によって寛永6年（1629）頃に造営された初期の二之丸御庭を描いた巨大絵図である。

御庭の西南には、義直の御座所である二之丸御殿の「中御座之間」があり、そこから園池の中島にある「四達堂」を通じて「金声玉振閣」と呼ばれる八角堂や、儒教の聖人を祀る「御祠堂」まで園路が延びている。中国風の建物が立ち並んでおり、義直の理想を反映した中国風庭園の姿を知ることができる。

10代藩主・斉朝時代の御庭を描いた「御城御庭絵図」では、「御祠堂」や「金声玉振閣」は姿を消し、二之丸北端の「迎涼閣」や「竹楼（逐涼閣）」も和風の建物に変わっている。同じ庭園を描いた絵図ではあるものの、趣は大きく異なっていたことが分かる。

第二章 下御深井御庭

下御深井御庭は、名古屋城北側の湿地帯に造営された広大な庭園で、現在の名城公園一帯にあった。義直が寛永11年（1634）に3代将軍・家光の上洛に合わせて造営したのが始まりで、南側には蓮池が水をたたえ、北側には松林がつくられており、自然の景観を色濃く残していた。御庭は幾度かの改変を経たのち、文政年間（1818～1830）には二之丸御庭と同様に、10代藩主・斉朝による改造がおこなわれた。御庭内には茶席や架空の宿場町など遊芸に興じるための施設のほか、「御深井焼」を焼成する窯も設けられていた。明治になると御庭があった土地は陸軍の練兵場とされたため、名城公園には江戸時代の面影はほとんど残されていないが、水堀の対岸から天守を見渡した風景によって、わずかに往時をしのぶことができる。

18 下御深井図面【したおふけずめん】

江戸時代後期 19世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

10代藩主・斉朝によって文政年間（1818～1830）に改造された後の下御深井御庭を描いた図面。下御深井御庭は名古屋城北側の湿地帯に造営され、名古屋城後背の防衛機能も担っていた。蓮池を中心に広がる自然の景観を残した庭であった。蓮池の周辺には松山・竹長押・瀬戸の三茶席が設けられたほか、北側には架空の宿場町「杉股町」と門前町「達磨町」が設けられており、広大な敷地を生かして遊び心に富んだ空間が広がっていた。庭内には陶器を焼成するための窯も設置され、尾張藩の御庭焼である「御深井焼」や「萩山焼」の製作がおこなわれていた。

19 御深井庭園真景図【おふけていえんしんけいず】

江戸時代 19世紀 名古屋城総合事務所蔵

下御深井御庭内の景観を描いた貴重な絵図。真景図とは、実在する風景を写し取るように描いた絵画作品のことで、左下の署名から丙戌年に朴山という絵師によって描かれたことが分かる。ここでいう丙戌年とは、10代藩主・斉朝時代の文政9年（1826）であるとみられる。中央には蓮池に浮かぶ中島があり、右上には金鯪を戴く名古屋城天守があることから、下御深井御庭を西側から見た風景を描いていることが分かる。蓮池の水景や水面越しに遠望できる天守の景観を生かした、下御深井御庭の眺望を知ることができる。

20 御樹木畑之図【おじゅもくはたけのず】

江戸時代 17世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

下御深井御庭の茅庵御門北側にあった「御樹木畑」を描いた図面。御蓮池に沿って延びる園路に張り出した茶席が描かれている。この茶席は「向島御茶屋」と呼ばれ、出品番号19「御深井庭園真景図」に描かれた風景と同じように天守を遠望できたとみられる。本図にある付箋から、向島茶屋は元禄11年（1698）に御勝手を残して2代藩主・光友の側室である松寿院（勘解由小路様）の下屋敷に移築されたことが分かる。

21 茅庵御勝手図面【ぼうあんおかってずめん】

江戸時代 18世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

向島茶屋の御勝手部分だけを示した図面。茶席が移築された後も、茅庵御門の番所裏には御勝手が残されていた。東には茶席とつながっていた「御取付之間」が確認できる。ほかに囲炉裏のある板間や薪小屋があり、雪隠も多数設置されていた。出品番号18「下御深井図面」には、この御勝手は描かれていない。この場所は10代藩主・斉朝の隠居屋敷である新御殿の敷地内となったため、御勝手も取り壊されたとみられる。

22 金城温古録 五十 御深井御庭大体【きんじょうおんころく ごじゅう おふけおにわだいたい】

江戸～明治時代 19世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

『金城温古録』は尾張藩士・奥村得義が藩命を受けて編纂した名古屋城に関する歴史記録。全64巻で構成される。本図は文政3年（1820）頃の下御深井御庭の全体図で、蓮池に浮かぶ中島や松山・瀬戸・竹長押の三つの茶屋の位置が描かれている。本書では寛永年間（1624～1643）の御庭造営以来、文政3年までは古体が伝わっていたとされているが、実際は御庭が北側に拡張されて田畠が設けられたほか、茅庵御門付近の向島茶屋が移築されるなど、細かい改変がおこなわれていた。

23 松山御茶屋絵図【まつやまおちゃやえず】

江戸時代 18世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

蓮池の北にあった茶席「松山御茶屋」の間取りを示した平面図。蓮池と松林に囲まれた、自然豊かな景観を備えていた。名古屋城から蓮池を挟んで北側に位置していたため「向ふ島」という別称があった。建物の北東にある上段から蓮池を見渡すことができたほか、東側にも縁側が設置され、松林方向にも解放的な間取りとなっていた。寛永15年（1638）には、將軍家からの使者の接待場所として使われた由緒ある茶席である。

24 金城温古録 五十二 御船番所古体【きんじょうおんころく ごじゅうに おふねばんしょこたい】

江戸時代 19世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

下御深井御庭の南端にあった船番所を描いた図。名古屋城御深井丸からの眺望が描かれている。二之丸にある埋門の下には船着場が設置され、船に乗って水堀を渡り、下御深井御庭の船着場に降りることができた。正面には三河国にある猿投山の遠望が描かれており、手前には高麗御門と三之丸の志水御門が描かれている。名古屋城側から下御深井御庭を眺めると、木々の合間から竹長押茶屋の屋根が見えていたことが分かる。

25 竹長押御茶屋（中野御茶屋）絵図【たけなげしおちゃや（なかのおちゃや）えず】

江戸時代 18世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

蓮池の南にあった茶席「竹長押御茶屋」の間取りを示した平面図。裏面に「中野御茶屋絵図」と記されているが、2代藩主・光友時代の竹長押茶屋と間取りが一致するため、竹長押茶屋の平面図であることが分かる。上段が水上に張り出しており、上段の北側あった縁側から水面を眺めることができた。下御深井御庭の茶席としては唯一、個人宅に移築されて現存している。

26 御深井焼 鉄絵蓮花文平鉢【おふけやき てつえれんげもんひらばち】

江戸時代 19世紀 名古屋城総合事務所蔵

下御深井御庭で焼かれた平鉢。椀の内側に鉄絵の蓮花が描かれている。御深井焼は、寛永年間（1624～1644）に瀬戸の陶工を呼び寄せて、下御深井御庭の瀬戸山周辺に窯を築いて作陶させたのが始まりである。18世紀後半に一時中絶したが、10代藩主・斉朝によって再興され、幕末まで生産が続いた。底部には斉朝の再興後から使用された、御深井焼であることを示す「深井製」の丸印が捺されている。

27 御深井焼 胴締茶碗【おふけやき どうしまりちゃわん】

江戸時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

下御深井御庭で焼かれた茶碗。高台の脇に「深井製」の丸印が捺されている。全体に白濁色になるよう釉薬が塗られ、口縁から胴にかけて青色の釉と黄色の釉を垂らして二重掛けしている。やや胴回りが小さく、見込みの深い形状をしている。御深井焼は藩士や有力町人たちへの賞賜としても用いられていた。「深井製」印は尾張藩の公的な御庭焼であることを示す重要な符号であった。

28 変菱形水指【かわりひしがたみずさし】

明治時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

平板を菱形にして持ち手を取り付けた独特な形状の水指。本体に赤染釉、蓋に黒染釉を施した楽焼である。本体底部には「萩山」という印が捺され、蓋裏には12代藩主・斉荘の雅号である「金城主人」好の文字と「深井製」印が捺されている。一見すると斉荘が開窯した萩山焼の陶器に思えるが、二文字だけの「萩山」印は類例がなく、「深井製」の印影も本来の形とは異なっている。斉荘に縁の深い萩山焼にあやかって、明治以降に作陶された模作だと考えられる。

29 青窓紀聞 卷四十四 上【せいそうきぶん まきよんじゅうよん じょう】

江戸時代 嘉永6年（1853） 名古屋市蓬左文庫蔵

「青窓紀聞」は尾張藩重臣・大道寺家の用人であった水野正信による留書。嘉永6年（1853）に尾張藩が献金を募った際、多額の献金をおこなった者を下御深井御庭に招き入れ、歓待をおこなった記事がある。招待客の中には関戸哲太郎や伊藤次郎左衛門といった名古屋城下の御用達商人の名がみえる。招待客は下御深井御庭を遊覧し、瀬戸茶屋で饗応の御膳が振舞われたのち、藩からの賞賜として掛軸が与えられた。

30 瀬戸御茶屋絵図【せとおちゃやえず】

江戸時代 18世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

蓮池の北東にあった茶席「瀬戸御茶屋」の間取りを示した平面図。名称は「瀬戸山」の西麓に建てられたことに由来する。出品番号18「下御深井図面」と見比べると、南西部分が水面に張り出していたことが分かる。縁側には「御上り場」が設置されており、水上から船で直接入れる構造になっていた。上段は南を向いており、南西方向には水面越しにそびえ立つ天守を眺めることができた。下御深井御庭で饗宴を催す際に使用されていた茶席である。

31 朱漆塗葵紋散徳利【しゅうるしぬりあおいもんちらしとっくり】

江戸時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

総体を朱漆塗にした漆器の徳利。徳利は本来陶器で造られていることが多いため、丸型に膨らんだ胴から徐々に細くなっていく首までの曲線は陶器のような形状になっている。胴回りには金銀の金貝と金時絵で表現した11つの葵紋が散らしてあり、注口にも金泥が塗られた美しい造りとなっている。

32 梨子地葵紋散桜花文盃・盃台【なしじあおいもんちらしおうかもんさかずき・さかずきだい】

江戸時代 19世紀 名古屋城総合事務所蔵

総体に梨子地を施した盃と盃台。盃には金時絵で葵紋と桜花文が施され、高台裏にも葵紋を配してあり、きらびやかな造形になっている。器の内側である見込み部分には、松・竹・梅が描かれ、松の盃には長寿吉祥を象徴する鶴と亀が描かれている。盃台にも桜花が目立つように全体に散らされており、桜が咲き誇る春の様子をあしらった豪華な大名道具である。



企画展
「風薫る 殿の御庭」

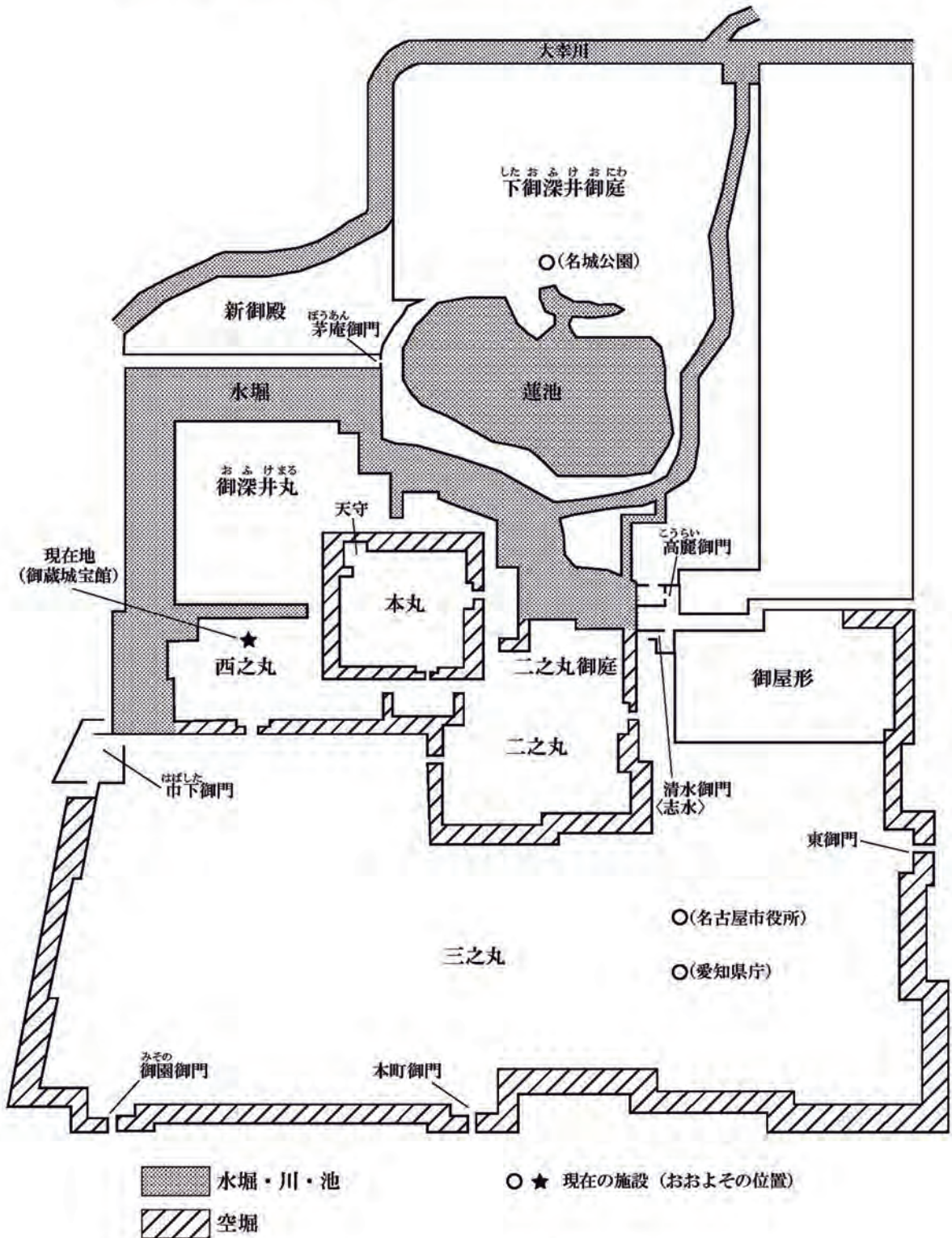
出品目録

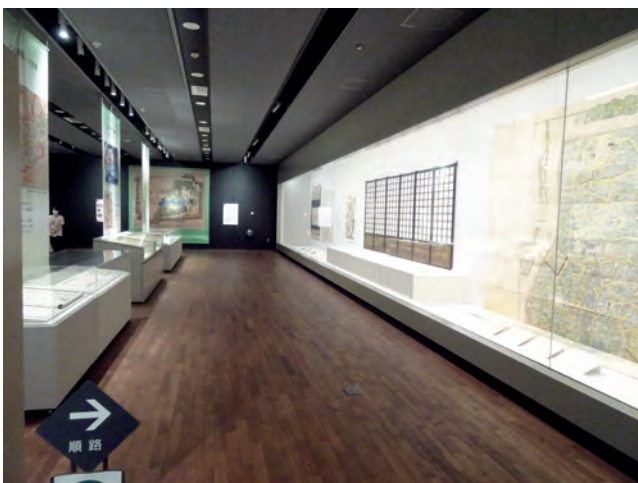
会期：令和4年4月23日（土）～6月12日（日）

かつて名古屋城にあった二之丸御庭と下御深井御庭は、文政年間（1818～30）に尾張藩10代藩主・徳川斉朝がおこなった大改造によって、様々な趣向を凝らした和風回遊式庭園へと変貌を遂げました。本展では、江戸時代後期の二之丸御庭を描いた巨大絵図「御城御庭絵図」をはじめとした数々の資料から、殿さまたちの憩いの場であった二つの大名庭園の姿を紹介します。

	名称	頁数	年代・作者など	所蔵
第1章 二之丸御庭				
1	御城二之丸図	1幅	江戸時代 天保13年（1842）以降	名古屋城総合事務所
2	御城御庭絵図	1幅	江戸時代 19世紀	名古屋市蓬左文庫
3	徳川斉朝書状	1幅	江戸時代 天保12年（1841）6月6日	名古屋城振興協会
4	多春園御引建伺図面	1枚	明治時代 明治3～4年（1870～71）	名古屋市蓬左文庫
5	多春園御二階図	1枚	明治時代 明治3～4年（1870～71）	名古屋市蓬左文庫
6	余芳亭障壁画 障子腰板絵 春景草花図	6面	江戸時代 19世紀 伝・松野梅山筆	名古屋城総合事務所
7	葵文丸瓦	1点	江戸時代 二之丸庭園栄螺山北より出土	名古屋城総合事務所
8	葵文丸瓦	1点	江戸時代 二之丸庭園権現山東より出土	名古屋城総合事務所
9	兔文緑釉丸瓦	1点	江戸時代 二之丸庭園権現山東より出土	名古屋城総合事務所
10	三巴文緑釉軒丸瓦	1点	江戸時代 二之丸庭園権現山東より出土	名古屋城総合事務所
11	菊花文施釉海鼠瓦	1点	江戸時代 二之丸庭園権現山東より出土	名古屋城総合事務所
12	桜御間南御庭四季之図	1枚	江戸時代 19世紀	名古屋市蓬左文庫
13	二之丸御殿釘隠金具	2点	江戸時代 17世紀	名古屋城総合事務所
14	葵紋付銀葉缶	1口	江戸時代 19世紀 奥山町邸調度品	名古屋城振興協会
15	梨子地葵紋付甕	1合	江戸時代 18世紀	名古屋城振興協会
16	黒漆塗松橋鶴亀蒔絵香合	1合	江戸時代 19世紀	名古屋城振興協会
17	黒漆塗葵紋唐草蒔絵菓子器	1基	江戸時代 19世紀	名古屋城総合事務所
第2章 下御深井御庭				
18	下御深井図面	1枚	江戸時代 19世紀	名古屋市蓬左文庫
19	御深井庭園真景図	1幅	江戸時代 文政9年（1826）	名古屋城総合事務所
20	御樹木畑之図	1枚	江戸時代 17世紀	名古屋市蓬左文庫
21	茅庵御勝手絵図	1枚	江戸時代 18世紀	名古屋市蓬左文庫
22	金城温古録 五十 御深井御庭大体	1冊	江戸～明治時代 19世紀 奥村得義・定編	名古屋市蓬左文庫
23	松山御茶屋絵図	1枚	江戸時代 18世紀	名古屋市蓬左文庫
24	金城温古録 五十二 御船番所古体	1冊	江戸～明治時代 19世紀 奥村得義・定編	名古屋市蓬左文庫
25	竹長押御茶屋絵図	1枚	江戸時代 18世紀	名古屋市蓬左文庫
26	御深井焼 鉄絵蓮花文平鉢	1口	江戸時代 19世紀	名古屋城総合事務所
27	御深井焼 胴締茶碗	1口	江戸時代 19世紀	名古屋城振興協会
28	変菱形水指	1口	明治時代 19世紀	名古屋城振興協会
29	青窓紀間 四十四 上	1冊	江戸時代 嘉永6年（1853）	名古屋市蓬左文庫
30	瀬戸御茶屋絵図	1枚	江戸時代 18世紀	名古屋市蓬左文庫
31	朱漆塗葵紋散德利	1口	江戸時代 19世紀	名古屋城振興協会
32	梨子地葵紋散桜花文盃・盃台	1組	江戸時代 19世紀	名古屋城総合事務所

江戸時代後期（19世紀）の名古屋城





(2) 名古屋城振興協会蔵品展「火縄銃」

展示概要

会期：令和4年(2022)6月25日(土)～9月4日(日) 72日間

入館者数：52,192人(1日平均724.9人)

出品件数：49件

展示趣旨：

火縄銃とは弾丸を銃口から装填する前装式の鉄砲です。火薬への着火に火縄を用いることから火縄銃と呼ばれます。天文12年(1543)の鉄砲(火縄銃)伝来以来、多くの大名が火縄銃の破壊力に魅了され、泰平の世であった江戸時代でも、万が一に備えて大量の火縄銃を所持しました。結果、日本は世界有数の火縄銃保有国となりました。

火縄銃を発砲するには銃だけでは足りません。火縄銃本体はもちろんのこと、弾丸・火薬・火縄といった道具が必要です。また、火薬や弾丸を安全に所持するために、専用の容れ物を用いなど、火縄銃にはさまざまな道具が附属しています。

本展覧会では、名古屋城振興協会が所蔵する火縄銃全点の他、附属する関連道具まで一堂に展示し、火縄銃の機能や扱い方を紹介します。お子様から大人の方まで一緒に楽しく火縄銃を学んでいただける展覧会です。

作品解説

第一章 火縄銃をよく見よう

どれも同じように見える火縄銃ですが、細部に目をやると、それぞれの火縄銃の違いに気が付きます。銃口の形や口径の大きさが違ったり、象嵌が施されたり、全長が背丈ほどある火縄銃などです。銃口の大きさ(使用する弾丸の大きさ)から十二匁筒など「何匁筒」と、銃身の大きさや長さから「短筒」や「大筒」などと呼ばれます。

火縄銃は一挺ずつ手作りで作られており、似た火縄銃はあっても現在の工業品のように全く同じ火縄銃はありません。一挺ずつよく見て、他と比べてたりしながら、それぞれの火縄銃の特徴を読み取ります。

【筒】銃身の別名です。

【匁】重さの単位です。1匁は3.75グラムで、5円玉と同じ重さです。

【象嵌】一つの素材に別の素材をはめ込む技法のことです。

1 火縄銃(十五匁筒) 銘：橋本由右衛門能當作 江戸時代 1挺

銃口径が2.2cmの火縄銃です。持ってみると重みがあり、存在感のある一挺です。

2 火縄銃(一匁五分筒) 銘：二重巻張 江州 國友九兵衛緑寿

金象嵌：丸に木瓜紋 江戸時代 1挺

國友九兵衛は近江国(滋賀県)の鉄砲鍛冶です。銃身に「丸に木瓜紋」の金象嵌が見られます。台尻には獅子の文様がつけられています。獅子は百獣の王とされ、瑞祥(めでたいことが起きること)の一つとして古代より崇められてきた想像上の生き物です。

3 火縄銃(五分筒) 銘：二重巻張 道元安太郎家富作 江戸時代 1挺

先目当部分に装飾が施されています。全体的にスリムな形状の細筒です。二重巻張とは、筒にした鉄にリボン状の鉄を二重に巻いた形式の銃身です。

4 火縄銃(六匁筒) 銘：芝辻勝右衛門(花押) 十五 銃床内墨書：長四尺七分六厘

銃床側面：「○に一」焼印「シ」刻銘 江戸時代 1挺

尾張藩の重臣成瀬家の犬山城に常備されていたと伝えられる火縄銃です。銃身銘にある芝辻勝衛門は摂津国堺(大阪府堺市)の鉄砲鍛冶とみられています。他の火縄銃に比べて、銃全長が長く、塀などの狭間から筒先を出して発砲したと考えられます。筒が長いほど、命中は高くなりますが照準を合わせることは難しくなります。

5 火縄銃（三匁五分筒） 銘：播州姫路之住高倉甚六作

真鍮象嵌：稲富一夢理齋（花押） 江戸時代 1 挺

高倉甚六という播磨国姫路（兵庫県姫路市）在住の鉄砲鍛冶によって作られた一挺です。銃身に「稲富一夢理齋」の真鍮象嵌があることから、砲術流派の稲富流の祖である稲富一夢（1552～1611）が注文した火縄銃だと推測されます。

6 黒漆塗黒糸威五枚胴具足 江戸時代 1 領 名古屋城総合事務所蔵

兜の前頭部や胴の前胸板三段目などに弾痕があります。合わせて7か所の弾痕が残されています。鉄砲の試し撃ちの跡ですが、鉄板を貫通することはなかったため、強固な甲冑として伝わっています。

7 火縄銃（三匁五分筒） 江戸時代 1 挺

銃身全体にアラバスクのような変形の唐草文様、銃口部には雷紋が金象嵌されており、装飾性の高い華麗な一挺です。

8 火縄銃（六匁筒） 銘：芝辻勝右衛門（花押）十三 銃床内墨書：長四尺八分八厘

銃床側面：「○に一」焼印「十六」刻銘 江戸時代 1 挺

この火縄銃も前出と同じく、尾張藩の重臣成瀬家の犬山城に常備されていたと伝えられる一挺です。

9 火縄銃（六匁筒） 銃床内墨書：長四尺五寸六分一厘

銃床族面：「○に一」焼印「ソ」刻銘 江戸時代 1 挺

銃全長が183.5cmにもなる火縄銃です。今回紹介する火縄銃の中で最も全長が長い一挺です。

10 火縄銃（十二匁筒） 江戸時代 1 挺

カラクリ部の留め具部分に桜のような五弁の花があしらわれています。作者は不明ですが、細かな部分に手の込んだ一挺です。

11 火縄銃（九十匁筒） 銘：芝辻藤左衛門清永 天保八年西七月力薬七十匁目

銀象嵌：荒浪 江戸時代天保8年（1837） 1 挺

銃身に「荒浪」の銀象嵌がみられます。また銃身銘により製作年が判明します。

参考出品 気砲 国友一貫齋作 江戸時代 1 挺

空気ポンプで銃の台かぶ部分のタンクに空気を繰り返し送り込んで、高圧になるまで圧縮し、その力で弾丸を発射する鉄砲です。壊れた舶来の風砲（空気銃の一種）を修理した鉄砲鍛冶の国友一貫齋は、修理の過程で構造を詳しく学びました。この経験から空気が動力になることに気づき、作り上げた銃が気砲です。

参考出品 気砲記 江戸時代 1 巻

第二章 火縄銃の構造を知ろう

火縄銃は「銃身」「銃床」「カラクリ」の3つに大きく分けられます。ここでは、「銃身」・「銃床」に「カラクリ」が付いた形状に分解しています。「銃身」「銃床」「カラクリ」はそれぞれに職人がおり、3つを合わせて一挺の火縄銃を作る分業制でした。日本に火縄銃が伝来した当時、尾栓部分のネジを作ることに困難を極めました。日本にはネジを作る技術がなかったのです。のちに、ネジを作る技術が開発されて国産火縄銃が作り出されました。

【銃身】「筒」とも言います。弾丸や胴薬を込める部分です。

【銃床】銃身を支える木部です。

【カラクリ】弾丸の発射機構です。

【尾栓】銃身の後ろのネジ栓です。

【カルカ（さく杖）】銃身に弾丸や火薬を押し固める硬い木の棒です。銃身の掃除にも使用します。

12 火縄銃（三刃五分筒） 銘：鍛惣巻張 谷口金蔵内改阿州臣笠井真信（花押）

江戸時代 1 挺

笠井真信は阿波国（徳島県）の鉄砲鍛冶です。銃床の木目が美しい一挺です。分解すると、銃床・銃身・カルカ（さく杖）・尾栓に分かれます。火縄銃には銃床・銃身・カラクリの専門職人がそれぞれおり、分業制で作られていました。江戸時代、日本にはネを作る技術がなく、尾栓のネジを作るのに苦労しました。

13 太刀筭槍鉄砲各処之図 江戸時代 1 巻

後出の弾丸入れ箱に附属している文書で、太刀・筭・槍・鉄砲の各部分の名称が細かに記されています。

第三章 容れ物

銃口から入れる火薬（胴薬）の容器や火皿にのせる口薬の容器など、火縄銃を発砲するにはたくさんの附属品が必要です。それらを納める容器には持ち主のこだわりが見られます。亀の甲羅をそのまま使った容器や漆を塗って蒔絵を施した容器など。ここでは江戸時代の胴薬入や口薬入を紹介します。

【胴薬入】銃口から入れる火薬の容器です。蓋部分が弾丸 1 発分の火薬量に調整されているなどの工夫がされています。

【口薬入】導火用の火薬を入れる容器です。火薬より使う量が少ないため、容器の口も狭く、表面に漆を塗るなどして火薬が湿気るのを防ぎました。

【蒔 絵】漆器の表面に漆で文様や文字などを描き、それが乾かないうちに金や銀などの金属粉を蒔いて器面に定着させる装飾技法です。

14 口薬入（八段鞠挟に片喰紋付） 江戸時代 1 合

15 口薬入（木瓜紋付） 江戸時代 1 合

16 口薬入（上がり藤に一文字紋付） 江戸時代 1 合

17 口薬入（朱塗） 江戸時代 1 合

18 口薬入（黒漆塗瓢蒔絵） 江戸時代 1 合

19 口薬入（なす形） 江戸時代 1 合

20 口薬入（丸に違い鷹羽紋付） 江戸時代 1 合

21 胴薬入（木製） 江戸時代 1 合

22 胴薬入（亀甲羅） 江戸時代 1 合

23 胴薬入（丸に抱き茗荷紋付） 江戸時代 1 合

24 胴薬入（三つ扇に片喰紋付） 江戸時代 1 合

25 胴薬入（尻膨形） 江戸時代 1 合

26 胴薬入（セセリ付） 江戸時代 1 合

27 胴薬入（亀甲羅） 江戸時代 1 合

28 胴薬入（鮫皮） 江戸時代 1合

追加1 胴薬入（弾丸袋付） 江戸時代 1合

第四章 弾丸を造る

火縄銃に欠かすことのできない弾丸造りの道具類です。火縄銃はそれぞれの口径に合わせた弾丸を使用するため、個々に弾鑄型が附属しています。鑄鍋で溶かした鉛を弾鑄型の穴から流しこみ固まったら型から出します。その後、穴と弾丸との間にできたサヤを削り落として丸く成形しました。

弾丸の大きさや重さによって射程距離や破壊力が異なります。時には鎧も貫通することがあったとされますが、敵に照準を定めて打つには、正確さは弓矢に劣ります。しかしその破壊力は計り知れず、相手を混乱にさせるには十分な威力でした。

29 鑄鍋 江戸時代 2口

30 鑄造杓 江戸時代 1本

31 鉛 江戸時代 2点

32 付け木 江戸時代 1束

火縄銃の弾丸を製造するときを使う道具類です。鉛を溶かすための鍋や杓、点火用の付木です。巻かれているのは鉛で、これを溶かして弾鑄型に流しこみ、弾丸を造ります。

33 弾丸入箱 江戸時代 1合

蓋部分に「○に玉」と大きく書かれており、弾丸造りの道具を納めていたと推測されます。弾鑄型や前出の太刀筭槍鉄砲各処之図が附属しています。

34 火打金各種 江戸時代 2点

35 弾丸各種 江戸時代 一式

個々の火縄銃にあった大きさがあるため、火縄銃一挺に必ず一個の弾鑄型が附属しました。材料には鉛が使われました。

36 火縄 江戸時代 1本

火縄は竹だと早く火が付きますが、濡れると元に戻りにくく、檜だとだけより若干火移りが劣るものの濡れてもよく乾燥すれば、ほとんど元通りになります。

37 弾鑄型（三十匁玉・二匁玉・二匁八分玉） 江戸時代 3本

弾丸を造るときを使う鑄型で、はさみ状の形をしています。先端部にある立方体を開くと両側に半球状の窪みが作られています。この先端部をとして穴から溶けた鉛を流しこみ、冷やした後、鑄型穴からの流し込み形状部分を削り落として丸く成形しました。

第五章 早く発砲する工夫

火縄銃は一発の発砲に、平均で20～30秒かかるといわれます。この時間を1秒でも短くするために様々な工夫がなされました。そのひとつが早合です。弾丸1発とそれを発砲するのに必要な火薬が入っており、それを銃口に充てると順に銃身に込められる一種の薬莢です。またそれらを素早く取り出すことができるようきれいに納められる胴乱という入れ物があります。現代でいうガンベルトのように、早合を身体に巻き付ける変わり種もあります。

38 火打金・火付具入 江戸時代 1点

留め具を開けると火打金が付いています。また根付部分や袋には付け木や火打石が入られるようになっており、携行用に小ぶりに作られています。

39 火打金入 江戸時代 1点

40 自動火打ち石機 江戸時代 1点

舶来品で江戸時代のマッチともいえます。

41 弾丸入 江戸時代 2口

弾丸を入れる革製の袋です。弾丸を一個ずつ取り出せるような工夫がされています。弾丸を出す口部分が烏のくちばしに似ていることから「烏口」とも呼ばれます。

42 礮早合 江戸時代 一式

最初の弾丸を発砲してから次の弾丸を発砲するまでの時間を短くし、素早く装填できるように作られた筒状の容器を「早合」と言います。早合は一発の弾丸を発砲するために適量火薬と弾丸一個がそれぞれに入れられており、一種の薬莢と言えます。この早合は肩から礮掛けにして使用しました。

43 胴乱（黒漆塗桐紋付）・早合 江戸時代 1合

胴乱は早合を始め、火縄・火打ち道具・火皿などを掃除するセセリなどの手入れ道具を収納するケースです。小さく平たい箱状の鞆で、腰につけたり、紐で肩から掛けたりして使いました。持ち主の個性が垣間見える資料です。

44 胴乱（黒漆塗葵紋付） 江戸時代 1合

45 胴乱（黒漆塗丸に二引紋付）・早合 江戸時代 1合

46 火縄銃型根付 江戸時代 1点

所蔵者無記名品は全て名古屋城振興協会所蔵品。

名古屋城振興協会所蔵品展

「火縄銃」

出品目録

会期：令和4年6月25日（土）～9月4日（日）



天文12（1543）年の鉄砲（火縄銃）伝来以来、多くの大名が火縄銃の破壊力に魅了され、泰平の世であった江戸時代でも万が一に備えて大量の火縄銃を所持しました。ところで、火縄銃を発砲するには銃だけでは足りません。火縄銃本体はもちろんのこと、弾丸・火薬・火縄といった関連道具が必要です。また火薬や弾丸を安全に所持するために専用の容器を用いるなど、火縄銃には様々な道具が附属しています。本展覧会では、名古屋城振興協会が所蔵する火縄銃全点の他、附属する関連道具まで一堂に展示し、火縄銃の機能や扱い方を紹介します。

	名称	頁数	製作年代
第一章 火縄銃をよく見よう			
1	火縄銃（十五匁筒） 銘 橋本由右衛門能當作	1挺	江戸時代
2	火縄銃（一匁五分筒） 銘 二重巻張 江州 國友九兵衛縁寿 金象嵌 丸に木瓜紋	1挺	江戸時代
3	火縄銃（五分筒） 銘 二重巻張 道元安太郎家當作	1挺	江戸時代
4	火縄銃（六匁筒） 銘 芝辻勝右衛門（花押）十五 銃床内墨書 長四尺七分六厘 銃床側面「〇に一」焼印「シ」刻銘	1挺	江戸時代
5	火縄銃（三匁五分筒） 銘 播州姫路之住高倉甚六作 真鍮象嵌銘 稻富一夢理齋（花押）	1挺	江戸時代
6	黒漆塗黒系威五枚胴具足 彦根藩家臣・木俣家伝来	1具	江戸時代 ※
7	火縄銃（三匁五分筒） 無銘	1挺	江戸時代
8	火縄銃（六匁筒） 銘 芝辻勝右衛門（花押）十三 銃床内墨書 長四尺八分八厘 銃床側面「〇に一」焼印「十六」刻銘	1挺	江戸時代
9	火縄銃（六匁筒） 無銘 銃床内墨書 長四尺五寸六分一厘 銃床側面「〇に一」焼印「ソ」刻銘	1挺	江戸時代
10	火縄銃（十二匁筒） 無銘	1挺	江戸時代
11	火縄銃（九十匁筒） 銘 芝辻藤左衛門清永 天保八年酉七月力薬七拾匁目 銀象嵌銘 荒浪	1挺	江戸時代
	参考出品 気砲 國友一貫斎作	1挺	江戸時代
	参考出品 気砲記	1巻	江戸時代
第二章 火縄銃の構造を知ろう			
12	火縄銃（三匁五分筒） 銘 鍛惣巻張 谷口金蔵内改阿州臣笠井真信（花押）	1挺	江戸時代
13	太刀筭槍鉄砲名処之図	1巻	江戸時代
第三章 容れ物			
14	口薬入（八段鞠挟に片喰紋）	1合	江戸時代
15	口薬入（木瓜紋）	1合	江戸時代
16	口薬入（上がり藤に一文字紋）	1合	江戸時代
17	口薬入（朱塗）	1合	江戸時代
18	口薬入（黒漆塗瓢蔓蒔絵）	1合	江戸時代
19	口薬入（なす形）	1合	江戸時代
20	口薬入（丸に違い鷹羽根紋）	1合	江戸時代
21	胴薬入（木製）	1合	江戸時代
22	胴薬入（亀甲羅使用）・大	1合	江戸時代
23	胴薬入（丸に抱き茗荷紋）	1合	江戸時代
24	胴薬入（三つ扇に片喰紋）	1合	江戸時代
25	胴薬入（尻膨形）	1合	江戸時代
26	胴薬入（セセリ付）	1合	江戸時代
27	胴薬入（亀甲羅使用）・小	1合	江戸時代
28	胴薬入（鮫革）	1合	江戸時代
追加1	胴薬入（弾丸袋付）	1合	江戸時代



(3)「初公開 門外不出 巨大杉戸絵」

展示概要

会期：令和4年(2022)9月17日(土)～11月6日(日) 51日間

＊前期9月17日(土)～10月4日(火)

＊後期10月5日(水)～11月6日(日)

入館者数：56,675人(1日平均1,111.3人)

出品件数：33件

展示趣旨：

杉戸絵とは、杉板に描かれた絵画で、廊下の仕切りとして使われる。江戸時代初期に建てられた名古屋城本丸御殿には、狩野派絵師による重厚な杉戸絵がはめられており、また明治維新後一時名古屋城を管理した宮内省は、名古屋離宮として本丸御殿を整備し、極上の杉を用いて杉戸を新調した。昭和20年(1945)の空襲により本丸御殿は全焼したが、襖絵や杉戸絵は直前に取り外されており、焼失を免れた。戦後、それら計1047面は重要文化財に指定され、名古屋城内の収蔵庫で保管され、再建された天守閣の中で順次公開されてきた。しかし、高さ2メートルを超える杉戸絵は、天守閣の門を通すことすらできず、展示はかなわなかった。令和2年(2020)、西の丸御蔵城宝館の完成にともない、すべての杉戸絵を西の丸御蔵城宝館の専用収蔵庫に収納した。収蔵庫に併設された展示室で、このたび公開する運びとなった。杉戸絵は、板に直接絵が描かれているため振動による絵具剥落の恐れがあり、他館への貸出は行っておらず、この意味でも門外不出である。

作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面は省略した。ここに収録しないパネル・キャプションもある。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

テーマ1 門外不出 巨大杉戸絵

杉戸絵は、二枚一組で廊下に建て込まれる。敷居から鴨居までの距離が杉戸絵の高さ(縦寸)になり、廊下の幅を2で割った数値が杉戸絵の幅(横寸)となる。名古屋城本丸御殿で一番大きな杉戸絵は、表書院の廊下に建てられていた。藩主謁見の場である表書院は、藩主の威光を家臣に示す大空間であり、表書院を取り巻く廊下も、高い天井と広い幅を誇っていた。それゆえに、表書院廊下の杉戸絵は大きすぎて戦後再建された天守閣展示室へいたる門を通せず、ながらも移動すらできなかった。ここに展示する杉戸絵は、まさに門外不出の巨大杉戸絵なのである。

作品1「竹虎図杉戸絵」 前期展示

作品2「麝香猫図杉戸絵」 後期展示

重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

慶長19年（1614） 玄関大廊下・表書院境

御殿への正規の入口である玄関棟（車寄）から大廊下を西に進むと、表書院棟にいたる。展示の杉戸絵は、大廊下と表書院の境にはめられていたもので、玄関・大廊下側（東側）に竹虎図、表書院側（西側）に麝香猫図が描かれている。框（周囲の木枠）を含めた高さは約210.0cm、幅191.0cm。杉板の厚さは1.5cm。樹齢を経た巨木からしか切り出せない板が、惜しげもなく用いられている。また框は、無節の桧に黒漆を塗り重ねたものである。なお、この面には鍵がなく、奥側（表書院側）からのみ鍵をかけることができた。

補助解説 「襖絵・杉戸絵」

襖絵は、紙と木からできている。細い木を格子状に組んだ骨組の両面に、和紙を何枚も貼り、その上から絵が描かれた本紙を貼り込み、引手や框（外枠）を取り付けて仕上げる。襖絵は基本的に部屋と部屋の間仕切りとして用いられる。一方、杉戸絵は、絵が描かれた杉板に、引手と框を取り付けたもの。部屋をとりまく廊下の仕切りとして用いられ、雨や風にさらされることも多い。逆に、廊下には襖は使えない。

補助解説 「虎」

本丸御殿の玄関は、一之間・二之間の二部屋からなり、竹林で群れ遊ぶ虎の親子が襖や壁に描かれていた。廊下の杉戸絵も竹と虎の絵であり、室内の画題と連動する。虎は、日本には棲息せず、明治以前の人々は中国や朝鮮から輸入された絵や虎皮によってその姿を知った。当時の人々にとっての虎は、畏怖すべき猛獣であるとともに子を慈しむ慈愛の象徴であり、さらに美しい皮が高価な贈答品とされていた。そのため虎は、しばしば城郭御殿の入口に描かれた。この杉戸絵の虎は、来る者を威嚇し内に住む貴人を守る、異国の霊獣なのである。

補助解説 「麝香猫」

表書院は上段之間・一之間などの5室からなり、「麝香猫図杉戸絵」がはまる廊下に接する三之間には、花咲く野原で群れ遊ぶ麝香猫が描かれていた。麝香猫は、アフリカやアジアの熱帯林に棲息する、ジャコウネコ科の哺乳類。あごがとがり、ふさふさとした尾がある。尾の付け根から芳香を発するため、中国や朝鮮で貴重視されてきた。麝香猫を描く江戸時代前期の杉戸絵は、ここに展示する名古屋城のものしか現存しない。絵師は、舶載された中国・朝鮮の版本挿絵や掛軸からその姿を想像し、御殿にふさわしい異国の珍獣として描いたと考えられる。

テーマII 誰が描いた 巨大杉戸絵

杉戸絵や襖絵などの障壁画には、画家の落款（サイン）がない。また杉戸絵は、劣化が早いとしばしば補筆され、誰が描いたかという筆者問題は不問にされがちである。展示の杉戸絵は、本丸御殿表書院上段之間の西入側にはめられていたものだが、筆者は狩野派の一員という以外わからない。しかし、鳥のポーズは、表書院一之間の「桜花雉子図襖絵」の雉子ときわめてよく似ている。下方向に木の枝や葉がしなうという造形意識も共通している。狩野派においては、基本的に粉本という手本に従って作画するため、同じような構図やポーズが時代と筆者を超えて受け継がれる。しかし、この杉戸絵と襖絵の関係はきわめて近く、同じ筆者と考えて矛盾しない。廊下の杉戸絵は、室内の襖絵に比べ格下の画家が描く事例もあり、たとえば寛永11年（1634）に増築された上洛殿では、襖絵は狩野探幽が描いたが、杉戸絵の多くは技量の劣る画家に割り振られた。しかし、慶長期創建部分である玄関・表書院は、近接する部屋の襖絵を担当した画家が、入側の杉戸絵も担当したと考えられる。

作品3 「松山鳥図杉戸絵」 前期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

慶長19年（1614） 表書院西入側・対面所東廊下境 表書院西入側北端か

松と岩、山鳥と思われる鳥のつがいを描く。向かいあう二羽のポーズは、表書院一之間の襖絵である作品5「桜花雉子図襖絵」の二羽の雉子ときわめてよく似ている。雌雄二羽が岩に立ち上から枝が下がるという基本的な構図も共通している。おそらく、室内の襖絵と入側の杉戸絵を同じ画家が担当したと考えられる。

作品4「竹鶏図杉戸絵」 後期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

慶長19年(1614) 表書院西入側・対面所東廊下境 表書院西入側北端 南面か

細い女竹と鶏の親子を描く。三羽の成鳥は、表書院一之間の襖絵に描かれる雉子と同じポーズをとっており、強い相関性を感じさせる。また女竹の葉は実物ではありえないほど強くしなっており、枝垂桜と見まがうほどになる作品6「桜花雉子図襖絵」の枝ぶりときわめて近い。おそらく、室内の襖絵と入側の杉戸絵を同じ画家が担当したと考えられる。

作品5「桜花雉子図襖絵」 前期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

慶長19年(1614) 表書院一之間北側 右端(東から1面目)

表書院一之間の襖絵。山桜の下で白雉のつがい視線を交している。桜の枝は実物よりはるかに強く折れ曲がりまたしなっており、この画家独特の造形感覚によりデフォルメされていることがわかる。作品3「松山鳥図杉戸絵」より画面の幅が狭いため雉子二羽の距離は近いが、二羽の目の間に見えない糸を張るような感覚も作品3「松山鳥図杉戸絵」と一致する。筆者は不明で、狩野孝信ともされるが確定できない。また、すみれやたんぽぽなどの草花は、江戸時代後期以降に描き加えられた後補である。

作品6「桜花雉子図襖絵」 後期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

慶長19年(1614) 表書院一之間北側 左端(東から4面目)

表書院一之間の襖絵。山桜の下で雉子が群れる。桜の枝は実物以上にくねくねとしなっており、この画家の個性を示している。右端の大きく体をひねる雉子は、作品4「竹鶏図杉戸絵」左端の鶏の裏返しで、その隣の虫をついばむ雉子のポーズは杉戸右面の雌鶏に繰り返されている。筆者は不明で、狩野孝信ともされるが確定できない。

テーマⅢ 巨大杉戸絵の細部に注目ー1 框と格1

杉戸絵は、杉板の四周に框という角材を取り付けることにより、鴨居と敷居の間に落とし込む仕組みになっている。框には、杉板が暴れないよう固定する意味もある。本丸御殿の西半分は、寛永11年(1634)に江戸幕府三代将軍家光の宿泊施設として増築された建物で、上洛殿、御湯殿書院などからなる。将軍御座所となった上洛殿は、金銀の金具を多用した豪華な建物で、杉戸絵の框も、黒漆塗の框に葵紋や唐草文を金蒔絵で表すという贅沢極まる仕様であった。ただし、御座所とそれ以外の場所をしきる杉戸絵は、御座所側の框にのみ金蒔絵をほどこし、裏側は無地漆としており、将軍御座所とそれ以外のバックヤードとを明確に区切っている。

作品7「雪中柴垣図杉戸絵」 前期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

寛永11年(1634) 鷺之廊下・上洛殿境 北側

対面所と上洛殿を結ぶ鷺之廊下の南西端に置かれた杉戸。この杉戸の奥が将軍御座所の上洛殿となる。東側(鷺之廊下側)には、雪をいだく柴垣が描かれ、雪持ち柳を描く鷺之廊下と同じ冬の景となる。框はすっきりとした黒漆塗蠟色仕上げであるが、裏面の框には、牡丹唐草文が金蒔絵されており、名古屋城本丸御殿以外では類例のない豪華な杉戸絵となっている。

補助解説「柴垣」

柴垣とは、葉の落ちた枝を束ねた簡素な垣。上洛殿の手前にこのような侘びたモチーフを選択し、次の豪華な空間への転換を劇的に演出している。ただし技法は、金箔(きんぱく)を貼った上に太い墨線で柴を描き、胡粉(白色の顔料)を厚く盛り上げ雪景色とするという凝ったもので、上洛殿への導入にふさわしい。寛永・寛文年間(1624~73)には、柴垣や竹垣、柵などを垂直・平行に描く構図が流行したが、本杉戸絵にはそれらに先行する力強さが満ちている。なお、左面の柴垣は、板に直接墨で柴を描き、胡粉を散らして雪を表すもので、技法も描線もまったく異なる。江戸時代後期以降の補筆と見たい。

作品8「竹図杉戸絵」 後期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

寛永11年(1634) 上洛殿鷺之廊下・上洛殿境 南側

漆黒の框には大振りの牡丹唐草文が輝くような金で蒔絵され、杉板いっぱい描かれた太い孟宗竹の緑色とあいまって、目をおどろかす色彩となっている。入口側にあたる裏面(北側。鷺之廊下側。写真参照)の框は一般的な黒漆塗で、絵には雪が積もる簡素な垣根が描かれている。かじかむような冬景色を描く鷺之廊下を渡り終えると、この竹図杉戸絵を境に、きらめくような上洛殿が広がるのである。

補助解説「合決り」

杉戸は、ふつう一尺幅（30.3cm）程度の板を複数枚はぎあわせるが、名古屋城本丸御殿では、一間幅（約180.0cm）の杉戸も二枚の板だけで作られている。三尺幅（約90.0cm）という広い板が贅沢にも用いられているのである。左右の板の合わせ目部分は、板傍を厚みの半分で切り欠いて組合せ（合決り）、2寸長さの合釘（両端を尖らせた釘）を打ってとめている。経年により板が乾燥しても隙間が空かないようにする、伝統的な細工である。

テーマⅢ 巨大杉戸絵の細部に注目－1 框と格2

本丸御殿は、昭和20年（1945）5月14日早朝の空襲により全焼した。その後木造による復元工事が始まり、平成30年（2018）、建物の復元が完了した。内部を飾る襖絵や壁貼付絵などの障壁画として、創建当初の色彩を再現した復元模写が作成された。杉戸絵や天井絵については現在も復元模写作成が続けられている。展示の框は、「雪中柴垣図・竹図杉戸絵」用に復元された框。無節の桧に黒漆を塗り重ね磨き上げ、金蒔絵を施すという、上洛殿が建立された寛永期と同じ技法で復元されている。寛永期と同じく、金蒔絵がある面に「竹図」、ない面に「柴垣図」の復元模写がはめ込まれる予定である。現在、名古屋城内の模写室において、名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体の先生方による「竹図」の復元模写制作が進んでいる。

作品15「杉戸框」 復元模写「雪中柴垣図・竹図杉戸絵」用 平成制作

復元本丸御殿のため、新たに制作された框。内部の板は取り外され名古屋城内の模写室に運ばれており、復元模写が描かれるのを待っている。杉戸絵1枚につき、縦框2本と横框2本があり、鎌柄という仕口により組み立てられている。蒔絵のある方が上手の上洛殿側で、杉板には作品8「竹図杉戸絵」の模写が描かれる。蒔絵のない方が下手の鷺之下側で、作品7「雪中柴垣図杉戸絵」の模写が描かれる。建物の格、すなわち使う人の身分が、蒔絵の有無を決定しているのである。

補助解説「心張棒」

復元本丸御殿では、入側（廊下）と外を隔てる板戸は、基本的に心張棒によって戸締りしています。写真は表書院の南入側で、柱と柱の間に板戸2枚と腰障子1枚がはまっており、左側の板戸の左下隅と右側の板戸の縦棧の間に心張棒を落とし込んでいます（右側板戸は腰障子の外側にあるので見えません）。早朝、御殿中の心張棒を外して皆様をお迎えし、閉城後にまたはめ込んでいます。詳しい仕組みは、復元本丸御殿でぜひお確かめください。なお御殿内外は、各種センサー、監視カメラ、常駐警備員による機械及び人的警備を併用し、24時間警備しております。

テーマⅢ 巨大杉戸絵の細部に注目－2 鍵は格1

本丸御殿の杉戸絵の大半は入側（廊下）の端に建てられていたが、上洛殿南入側の2組だけは入側廊下の半ばに位置し、通る者の行く先を遮っていた。2組の杉戸絵には奥側に鍵（打掛金物）が付けられ、奥からしか開閉できない。杉戸絵の奥には、将軍が坐す上段之間や将軍専用の手洗い場、御湯殿書院（風呂）、黒木書院など別の部屋が広がっていたが、そこまで進める者は限られる。杉戸絵は、手前と奥を区切る、厳然たる結界であった。

作品9「花桶図杉戸絵」 後期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

寛永11年（1634） 上洛殿南入側 一之間・二之間境 東側

上洛殿南入側の西寄り、すなわち一之間と二之間との境にはめられた杉戸の東側面（二之間側）である。鍵は奥の面（西側）にしかなく、この杉戸絵を開けるには奥側から鍵をはずしてもらうしかない。一之間のさらに奥には、上段之間や将軍・藩主専用の手洗い所があるが、その手前に別の鍵付き杉戸（桜図・躑躅雉子図。未出品）が立ちはだかっていた。二重の結界を通り抜けてはじめて、将軍・藩主という最高位の人物が座す空間に辿（たど）り着けるのである。

作品10「花車図杉戸絵」 前期展示 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画

寛永11年（1634） 上洛殿南入側 一之間・二之間境 西側

上洛殿南入側西寄り、すなわち二之間と一之間の境の位置にはめられた杉戸絵の西面（一之間側）である。七宝引手の外側に輪状の傷があり、L字形の鍵を回した時のあととわかる。この杉戸は、この先の一之間まで進める者を選別する仕切りであった。

補助解説「開け方・閉め方」

杉戸は二枚一組が基本である。展示の杉戸絵はすべて、二枚の内向かって右の面に構図の重心がある。「竹虎図」は右面に竹林があり、「麝香猫図」は右面に猫二匹、左面に猫一匹。「花車図」や「花桶図」も、右面に車や桶がある。実は、名古屋城の杉戸絵の大半が、右にモチーフを固めている。杉戸は、右面を手前、左面を奥にはめる。開ける時は、左面の引手に手をかけ、右に引く。引いていくと左面は右面に隠れるが、右面は隠れない。つまり、杉戸を開けても閉めても、見た目の豪華さに変化はない。逆に、「柴垣図」のように左面にもモチーフを描く杉戸では左面の筆致が新しく、江戸後期以降の補筆と見なされる。

補助解説「花桶」

花を投げ込んだ花桶を描く。花は、初夏の藤や山吹、夏の紫陽花、撫子、冬の椿などで、複数の季節にわたる。巡る季節を一画面に集めて永遠の生命を寿ぐ、吉祥画題なのである。本丸御殿の杉戸絵の中で複数の季節を描くのは、この花桶図と裏面の花車図だけで、その点でも本杉戸絵は傑出した存在である。花桶、花籠など単一の器物を描く杉戸絵は、寛永・寛文年間（1624～73）に流行し、名古屋城以外にも複数の遺品がある。その中で本杉戸絵は、大きな弧を描いてゆったりと枝をのばす構図や緻密な表現など、スケールの大きさと技術の高さにおいて初発性を示している。

補助解説「花車」

満開の花が生け込まれた巨大な花籠が、手押し車に乗る。花は、初夏の芍薬、夏の萱草、秋の菊などで、複数の季節にわたる。巡る季節を一画面に集めて永遠の生命を寿ぐ、吉祥画題なのである。本丸御殿の杉戸絵の中で複数の季節を描くのは、この花車図と裏面の花桶図だけで、その点でも本杉戸絵は傑出した存在である。車輪の左半分は現在、顔料が剥落し杉板の地色が見えている。もとは、粘りのある墨で塗り込めた上に白色の胡粉を盛り上げ金銀泥を載せたもので、黒漆塗金銀時絵の風情を示していた。花籠も、胡粉を盛り上げた上に金泥を塗っており、豪勢な画面であった。なお全面に撒かれた金銀の砂子の多くは、明治期の後補である。

テーマⅢ 巨大杉戸絵の細部に注目－2 鍵は格2

杉戸絵の鍵は、今の鍵とは異なり、二枚組の戸の両端にL字形の金属棒（打掛金物）を取り付け、ヒートン状の環付き金具（受坪）を柱に埋め込み、L字棒を環に掛ける形式であった。打掛と受坪の寸法や取付け位置が少しでもずれるとはまらないため、制作や取付けに手間がかかる。名古屋城には、約100点の打掛金物が伝えられている。伝来についての記録はないが、戦後本丸御殿の杉戸絵や襖絵から取り外されたものと考えられる。一方、鍵を受ける方の受坪は柱に埋め込まれていたため、昭和20年（1945）の空襲時大半が建物と運命をともにした。火災の痕も生々しい遺品2点のみが現存する。廊下の外側に建てる建具（雨戸や障子）には鍵がなく、心張棒という、両端を斜めに切り落とした角材を廊下側からあてがう。心張棒をかうだけで外から開けられず、内側からは心張棒をはずせば容易に開けられる。心張棒とは異なり、貴重な金属を用い一点ごとの調節が必要な杉戸の鍵は、それ自体高級品であった。

作品11「掛金物 L字形」旧国宝 江戸時代

L字型の打掛金物は、二枚組の杉戸絵や四枚組の襖絵の両端に取り付けられる。長さや太さから現存遺品は四種類に大別できるが、どの画面のものかは特定できない。銅（一部は真鍮）で casting し、唐草模様を毛彫りし、金鍍金をほどこし、部屋によって煮黒目もしくは墨差で唐草模様のみ黒く着色している。円形の部分（受坪）から固定用の二本の足が伸びている。

作品12「打掛金物 U字形」旧国宝 江戸時代

アーチ状の鍵は、杉戸絵ではなく、四枚組の襖絵の中央に取り付けられていた。左右両端の襖にはL字形の打掛がつけられ、柱の受坪に掛けるようになっていた。ただし、すべて鍵を掛けたままでも中央二枚を右か左に引きずれば、隙間はできる。すなわちこれらは、実用的な鍵ではなく、儀礼的な結界であり、鑑賞の要でもある。よって鍵には、金鍍金し繊細な唐草を毛彫りし墨差をするという装飾が施されていた。

作品13「打掛金物 唄」 旧国宝 江戸時代

打掛金具を取り付けると、戸の裏面に足が二本出る。その足を隠すための金具である。直径2.0～3.5cmという小さな金具であるが、裏葵紋（六花紋）を型鑿で彫り込み、魚々子鑿を打ち空間を埋めている。魚々子は1mm当たり最低2個という緻密さを誇る。名古屋城の杉戸絵には、打掛金具が外されたあと、唄が復旧されなかったものもある。展示の唄は外されたままの物で、昭和5年（1930）に国宝指定された本丸御殿の一部といえる。

作品14「打掛金物 受坪」 旧国宝 江戸時代

L字型の打掛を受ける金具。下部に方形の欠損部があるが、本来はここに環（わ）が付き、L字金物の受けとなっていた。厚さ1mmほどの薄い銅製金物で、柱に打ち込まれていたため、大半が昭和20年（1945）の戦災時、柱とともに焼失した。この2点は、終戦後、名古屋城職員が御殿の焼け跡から拾い集めたもの。痛ましく被災し、どの柱についていたかも不明であるが、わずかに2点しかない限りなく貴重な遺品。長さ9.0cm、幅1.5cmの小さな金具を金鍍金し、裏葵紋を打ち、細かな魚々子で空間を充填している。柱に埋め込まれた金具であるから、通常は目をひかず、貴人が触れる可能性もまったくない。鍵を掛ける立場の者のみが、この可憐な小世界を知り得たのである。

テーマⅢ 巨大杉戸絵の細部に注目－3 木裏と木表

杉戸絵は、板の両面に絵が描かれる。板には、表と裏がある。丸太から板を切り出した時、樹皮に近い方の面を木表といい、その裏、つまり木の中心に近い方を木裏と呼ぶ。一般に木表は木裏より白く、木目がくっきり見える。今回展示した本丸御殿の杉戸絵はすべて、上手（進行方向の奥側）に木表、下手（進行方向の手前側）に木裏が用いられている。奥の貴人側から下座を見たとき、美しい木表が目に入るよう配されていたのである。作品3「松山鳥図杉戸絵」（前期展示）と作品4「竹鶏図杉戸絵」（後期展示）は、表書院西入側の北端にはめられていた杉戸絵で、同じ板の表裏に描かれている。板目を見ると、3が木表、4が木裏で、画題の格も、高貴な鳥である雉子を描く作品3「松山鳥図杉戸絵」の方が、4より高い。しかし、江戸時代後期には表裏が逆にはめられていた可能性がある。逆にすると隙間ができてしまうため、逆になった理由はわからない。

作品16「金城録」 原本 奥村得義編 江戸時代後期成立 明治時代写

尾張藩士奥村得義が江戸時代後期に著した、名古屋城百科事典ともいべき「金城温古録」から、本丸部を正確に写した陸軍期の写本。内容は「金城温古録」と等しい。表書院北西隅の杉戸絵（作品3・4）の画題について、御上段西の北境二本の内の南面の絵は唐松に金鵲鳥、北面の絵は大和竹に雌雄の鶏と雛五羽と記しており、昭和前期に撮影された写真とは表裏が異なっている。

翻刻「御杉戸

二所ノ内、ジャカウノ間前東境二本西面ノ絵ジャカウ猫、
此東面ノ絵ハ大廊下二出
御上段西ノ北境二本、南面ノ絵唐松ニ金鵲鳥
北面ノ絵ハ次ノ御廊下二出
御廊下 二間四面八畳
南境御杉戸二本、北面絵大和竹ニ雌雄ノ鶏、雛五羽附」

作品17「名古屋城御本丸御殿中御絵」 原本 江戸時代後期 明治時代写

尾張藩御用絵師の神谷晴真（?～1862）による本丸御殿障壁画筆者の鑑定を記した書。作品4「竹鶏図杉戸絵」について、「御広間西御廊下北御杉戸 大和竹鶏画 右土佐筆」と記している。作品3「松山鳥図杉戸絵」についての記述はないが、西廊下北端の杉戸の南面が竹鶏図であったと読み、「金城温古録」とは逆のはめ方となる。「金城温古録」の著者奥村得義と神谷晴真はほぼ同時代の人物であり、「金城温古録」の誤りの可能性もある。

作品18「国宝史蹟名古屋城」 上下2冊 名古屋市編 彰国社発行 昭和17年（1942）

昭和10年代に名古屋市が撮影したガラス乾板の写真集。「金城温古録」とは異なり、「竹鷄図杉戸絵」が南面にはまっている。木の表裏や画題の格から見て、この写真のはめ方が本来と思われる。江戸時代後期の一時期、何らかの混乱により逆向きにはめられていたのか「金城温古録」の誤記か、詳細はわからない。なお、室内の欄間彫刻は下座側から見た時に映える構図になっていることが指摘されており、上座下座問題は単純ではない。

テーマⅢ 巨大杉戸絵の細部に注目－4 重い杉戸 引く工夫

巨大な杉戸絵は、重さ15kgにもなる。開閉のため引手が付けられ、戸車という木製の車輪が下框に仕込まれる。戸車は、框に切り込まれた柄穴に納められており、通常見ることはない。とくに名古屋城では、過去の修理において、衝撃を吸収するための緩衝材付き木製展示具（足）を杉戸絵の下框に取り付けてきた。ちょうど戸車が隠れる位置に付けたため、戸車の存在に気づきにくい。一方引手は、戸車と同じく実用品であるが、杉戸絵や襖絵の見所として歴史的に精緻な華飾が加えられてきた。とくに名古屋城本丸御殿の引手は、当時の金具の頂点ともいべき質を誇る。両方とも杉戸を引くための仕組みながら、表舞台に立つ引手と裏方の戸車。あわせてご覧いただきたい。

作品19「戸車」 江戸時代～戦前

固い木で作られた戸車。杉戸や舞良戸など重い建具の下部に、一枚につき二個付いている。戸車は、戸の自重でつぶれやすいため、消耗品として取り替えられてきた。そのため今の杉戸絵は様々な形の戸車が混在している。展示の戸車は、過去の修理において取り外されたもので、制作時期は確定できない。しかしこの小さな戸車が、重い杉戸を動かしやすくし、敷居の摩擦も減じてくれた。

作品20「七宝引手」 寛永11年（1634） 上洛殿一之間南「帝鑑図舞良戸」右1枚目

本丸御殿の障壁画には、精緻な引手がかはまっている。建物ごとに細工が異なり、上洛殿の引手は七宝を配するなど際立って豪華である。この引手は、成分分析のため上洛殿の舞良戸から取りはずしたもの。杉戸絵にも同工の七宝引手がかはめられている。中央の手掛り部分に葵紋を置き七宝繫文（円弧が連がる吉祥文）で囲み、周りの菊座（口座）は、青色と緑色に発色する象嵌七宝で縁取っている。その外側の縁座は筭紋で放射状に区画し、葵紋と七宝繫文を配する。筭の内部にも細緻な唐草を描き魚々子を打つ。全体を水銀で鍍金し、葵紋や七宝繫文の黒色部は煮黒味、筭部の唐草は墨差により黒色を付けている。

補助解説「引手の技法」

水銀鍍金：成型した銅の地金に水銀を塗り金箔を置き、水銀と金がアマルガム状にとけこんでから加熱し水銀を蒸発させ、篋で磨いて光沢を出す。箔置きを五回繰り返す場合五辺という。現在、水銀鍍金を行うには、法律上特殊な装置や水銀処理が必要である。

象嵌七宝：くぼめた凹部に釉薬を置き、焼成し発色させる。

煮黒味：鍍金した地金に鑿で文様をほり、鍍金部を削り地金を出し、硫化カリウム水溶液に漬け、文様部分のみ黒く色付ける。

墨差：鍍金後に漆を混ぜた墨を塗り、黒く着色する。

テーマⅣ 名古屋離宮の巨大杉戸

明治維新後名古屋城は陸軍省の管理下に置かれたが、明治26年（1893）宮内省に移管され、「名古屋離宮」と呼称を替えた。宮内省は、時の天皇はじめ皇族の御駐泊所として本丸御殿を整備し、菊紋の椅子や火鉢を天皇御料として持ち込んだ。日常用途のため、通路や洗面所も新設した。名古屋城には、菊紋引手が付く建具が複数あり、宮内庁に今も残る工事記録から、明治後半から大正にかけて宮内省内匠寮が制作した名古屋離宮の建具と推定できる。昭和20年（1945）5月の名古屋空襲直前、江戸期の障壁画とともに本丸御殿から取りはずされ別置されたため、戦災焼失を免れたと考えられる。これらは、絵がないため戦後の文化財指定の対象にならず、未調査のまま城内で保管されてきた。ここに、離宮期建具の一端を公開する。おそらく、戦後はじめての公開であろう。江戸期の杉戸と見まがうほどの大きな杉戸であり、まぎれもなく名古屋離宮、そして旧国宝名古屋城本丸御殿の一部である。

作品21「葵紋引手杉戸」明治29年（1896）か 2枚

裏葵紋（六花紋。葵紋の裏紋）の引手がついた大杉戸。伝来不明のまま、名古屋城内で長く保管されてきた。縦横の寸法や厚みは表書院の「竹虎図・麝香猫図杉戸絵」（作品1・2）とほぼ等しく、板二枚継ぎであることも共通する。しかし、引手の文様がわずかに異なり、框の面取り幅が数mm広く、框下の戸車の仕様が違う。黒漆塗の色が浅く節もやや多く、明治期の補作と推定できる。宮内省内匠寮の公文書によれば、明治29年、表書院南入側東西に板戸各2枚計4枚が新調された。文書中の図面は正確でなく文字情報との矛盾もあるため、疑問が残るが、これほどの大板戸が入る建物は表書院しか考えられない。よって、本板戸は、明治29年に新作された板戸と推定しておく。なお、明治20年代の宮内省は、建具を補作する場合「仕様は旧来の通り」とし、紋も江戸期の葵紋を継承していた。その後、葵紋を廃し菊紋を用いるよう方針を変えたい。

補助解説「工事録 六」（明治29年（1896））部分 宮内省宮内公文書館蔵

名古屋離宮の工事に関する宮内省の公文書。左側の図面に「●印之分建具新規仕置候」と朱書し、表書院南廊下の東端西端それぞれに赤丸がある。右頁には「表書院北廊下塗縁杉戸 堅六尺九寸 巾三尺 四枚」とあるが、この杉戸絵は現存している（今回未出品）。図面を信じれば、展示の大板戸は、図面のうちの右側の●、すなわち作品1・2杉戸絵の位置の東側に新しく敷居と鴨居を作って建て込んだことになり、そこまでの大工事をした痕跡もないため、誤記があると考えられる。いずれにせよ21は、江戸期の仕様を明治の職人が継承しようとした立派な大杉戸である。

作品22「菊紋引手杉戸」明治39年（1906）～大正5年（1916）頃 2枚1組のうち1枚のみ展示

作品21と同様名古屋城内で保存されてきた杉戸。記録や伝承は一切ないが、黒と金で菊紋を表す肉厚な菱形引手が目を引く。同じような菱形引手が昭和初期に黒木書院を撮影したガラス乾板写真（東京文化財研究所蔵）に写っている。宮内省の記録によれば、明治39年（1906）に黒木書院から御湯殿書院に通じる渡廊下を新設し、大正5年（1916）に改造している。本杉戸は、その際、東壁を壊して作られた杉戸のうちの黒木書院側（写真右側）の一枚である可能性が高い。全体に飛沫のようなシミがあるが、同じような飛沫痕のある襖絵が数多くあり、空襲直後か戦後の混乱期についた汚れと思われる。

作品23「菊紋引手大杉戸」明治39年（1906）～大正5年（1916）頃 2枚1組のうち1枚のみ展示

作品22と同じ引手の杉戸。杉戸の高さ・幅は一回り大きい、菱形引手や框の仕様は同じで、同時期に作られたものと考えられる。ガラス乾板写真（東京文化財研究所蔵）との比較から、御湯殿書院側（写真の左）の杉戸の可能性が高い。四枚継ぎの板の木目もほぼ一致する。昭和20年（1945）5月の空襲直前御殿からとり外され、戦災焼失を免れたものと考えられる。なお、平成の復元本丸御殿では、該当部分は江戸期の図面に従って復元しており、杉戸ではなく板壁がはまっている。

補助写真パネル「ガラス乾板写真」 帝国美術院附属美術研究所撮影 原版東京文化財研究所蔵

昭和13年（1938）、帝国美術院附属美術研究所（現東京文化財研究所）が本丸御殿を調査撮影したうちの一枚で、黒木書院の入側が撮影されている。襖で閉ざされた右側の部屋が黒木書院一之間・二之間で、その奥に、板戸、御湯殿書院への渡り廊下、御湯殿書院への板戸と続く。

補助写真パネル「ガラス乾板写真」 帝国美術院附属美術研究所撮影 原版東京文化財研究所蔵

右のガラス乾板写真の部分拡大。特徴的な菊紋引手の杉戸が二枚写っており、板の継目や木目もわかる。展示の菊紋引手杉戸（作品22・23）には、戦中の移動時か戦後の保管時についたと思われる飛沫のような染みがあるが、寸法や継ぎ、木目は写真の杉戸と矛盾しない。この角度の写真は名古屋市は撮影しておらず、極めて貴重な一カットである。

補助写真パネル「昭和実測図259」

黒木書院の建具についての昭和実測図。一之間入側の建具詳細図には、天地左右の四ヶ所に紋を配し台座を二重とする菱形引手が、くっきりと描かれている。このような形の引手は江戸期の本丸御殿にはなく、あきらかに離宮期の引手である。尺寸法で記された建具の大きさも、展示の杉戸とほぼ一致する。

補助写真パネル「昭和実測図241」

黒木書院と御湯殿書院は、上洛殿最奥部の離れで、江戸期には両書院を直接つなぐ通路はなかった。宮内省は、明治39年（1906）から大正5年（1916）にかけて、両書院を結ぶ渡り廊下を新設した。工事の詳細はわからないが、両書院の壁を壊し、廊下でつなぎ、それぞれの開口部に杉戸を作ったと考えられる。名古屋市が昭和初年に調査し作成した実測図には、この改築後の姿が描かれている。

補助写真パネル「菊紋引手」

二条城二の丸御殿 林檎図杉戸絵（白書院北入側（東） 南面東側）

明治以降に宮内省内匠寮が整備した離宮や御用邸には、菊紋引手が用いられている。引手の文様や制作方法は、建物により微妙に異なっている。写真は、二条城二の丸御殿白書院入側にはまる「林檎図杉戸絵」の引手。二条城は明治17年（1884）から二条離宮として宮内省により管理され、大正4年（1915）の御大礼時引手が菊紋に替えられた。文様は、名古屋城とは異なり打ち出しではなく、鑿で彫られている。

テーマⅤ 昭和実測図に見る杉戸

名古屋離宮は、昭和5年（1930）名古屋市に下賜され、同時に国宝として指定された。名古屋市は国宝建造物の保存に努め、昭和7年（1932）から、国宝建築物24棟の実測調査を開始した。天守、御殿などの寸法や仕様を野帳に記し、拓本も制作された。調査途中の昭和20年（1945）5月、名古屋城は焼夷弾の直撃により本丸を中心に被災し、御殿は全焼した。実測した野帳類は焼失を免れ、昭和27年（1952）に平面図、断面図、天井見上図など307枚の清書図面が完成した。これら清書実測図や野帳類は、昭和期天守閣再建工事と平成期本丸御殿復元工事において、根本資料として活用された。名古屋城総合事務所では、平成20年（2008）から清書実測図にたいし「昭和実測図」の固有名称を付け、ホームページでデータ公開している。

作品24「昭和実測図174 名古屋城御殿平面図」 昭和

名古屋離宮を昭和5年（1930）に下賜された後、名古屋市が、城内の全国宝建造物について実測し図面化したもの。すべての図面が完成したのは終戦後で、その時国宝建造物の大半は戦災焼失していた。昭和実測図とは、失われた国宝をせめて図面の中で取り戻そうとする技師の魂が込められた、寡黙にして正確、そしてきわめて美しい図面である。

作品25「昭和実測図190 名古屋城御殿表書院平面図」 昭和

玄関車寄、大廊下に続く表書院の平面図。表書院は、畳敷きの部屋五室からなる広大な建物で、図中の長方形の小楯が畳一畳を表す。周囲を取り巻く入側（廊下）には罫線が引かれており、拭板敷きとわかる。南入側の東端（大廊下との境）と、西入側の北端（対面所東廊下との境）に、御殿中最大の杉戸絵（作品1・2、3・4）が設置されていた。

作品26「昭和実測図185 名古屋城御殿大廊下詳細図」 昭和

入側々廻内部姿図・虎之間境姿図・表書院境姿図をのせる。左下の表書院境姿図に、大杉戸の寸法が記載されている。敷居から鴨居の樋端（戸をはめ込むための凸部。名古屋城はすべて付樋端という古い形式）までが六尺七寸。2メートルを超える、まさに巨大な大杉戸であり、図からはわからないが、極めて重い。

作品27「昭和実測図222 名古屋城御殿上洛殿東側立面図」 昭和

上洛殿の平面図。上洛殿は、寛永11年（1634）に三代将軍家光の上洛時の御座所として増築され、六室からなる。周囲を囲む入側にも長方形の小楯が引かれ、室内と同じ畳敷きと知られる。南西角の一之間を囲むように二組の杉戸が建てられ、一之間と二之間、上段之間と一之間を区切っている。入側の半ばに杉戸を置くのは本丸御殿のうち上洛殿しかなく、将軍のため幾重にも格と保全に配慮した特殊な建物であったことがわかる。

作品28「昭和実測図235 名古屋城御殿上洛殿一之間南入側 矩計建具等詳細図」 昭和

上洛殿の欄間や杉戸などの詳細な図面。上洛殿は、寛永11年（1634）に三代将軍家光の上洛時の御座所として増築された建物。杉戸絵の框の金蒔絵の模様も描き込まれている。蒔絵部分は原寸大の拓本をまず作り、そこから図面を起こしたもので、当時の調査の綿密さがうかがわれる。

作品29「昭和実測図304 名古屋城御殿上洛殿拓本 其二二」 昭和

左下の記載から、上洛殿一之間西入側の舞良戸襖の框の拓本とわかる。舞良戸とは、部屋と廊下を仕切る板戸で、室内側に絵を描いた紙を貼り、廊下側には舞良子という横棧を打つ。上洛殿の舞良戸は、板に金箔を貼り、黒漆塗の舞良子を打ち、框には黒漆塗の地に金蒔絵で唐草模様を描いていた。漆黒と金が互いに輝きあう、類例のない豪華な仕様であった。

補助テーマ「ガラス乾板から知る杉戸 -1」

名古屋市は、昭和15年（1940）から翌年にかけて、国宝建築物24棟のガラス乾板による撮影を下賜10周年記念事業として行った。ガラス乾板とは、薄いガラス板に感光材を塗ったもので、割れやすいが歪みが少なく、高画質の画像が得られる。昭和20年5月の空襲時、ガラス乾板は実測資料とともに被災を免れた。現存するガラス乾板は700枚を超え、廊下に屹立する杉戸絵もとらえられている。平成の復元本丸御殿では、動線確保のため、杉戸絵を入れていない。ガラス乾板写真を見てはじめて、杉戸絵により厳然と閉じられた真の御殿空間を知ることができる。御殿とは、今の復元本丸御殿に見るような開放的な空間では決してなく、行く先々を杉戸絵がはばむ閉鎖空間であり、逆に杉戸絵は、次の舞台に我々を誘う厳しくも華やかな扉なのである。

補助写真パネル「ガラス乾板写真1」 昭和15年あるいは16年撮影 原板名古屋城総合事務所蔵

本丸御殿大廊下を東側から撮影したもの。表書院南入側と大廊下の境に「竹虎図杉戸絵」（作品1）が写っている。その左側の表書院東入側との境にも「蝙蝠（こうもり）図杉戸絵」がはまっており、東入側への通り抜けをさえぎっている。

補助写真パネル「現在の復元本丸御殿写真」

復元本丸御殿の表書院を大廊下側（東側）から撮影した写真。手前の広い板敷部分が大廊下で、奥に伸びるやや狭い板敷部分が表書院の南入側、右に伸びる狭い板敷が東入側。杉戸絵をはめていないため、南入側と東入側が見通せているが、かつては杉戸絵がはまっており、先は見えなかった。

補助テーマ「ガラス乾板から知る杉戸 -2」

名古屋城を撮影したのは、名古屋市だけではない。離宮期、宮内省は、修理や儀式の記録写真を撮影し、写真の公開も行った。早くも、大正11年（1922）出版の『皇室写真帖』（皇室写真帖編纂所編・皇室写真帖発行所発行）に、対面所上段之間の一葉が収められている。大正13年（1924）には、宮内省が原板を貸与する形で『鳳闕』（上野竹次郎編・奉效会発行）が発行され、玄関・表書院の大床などを斜めから撮影した写真などが掲載された。昭和3年（1928）、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）が、本丸御殿で312枚の撮影を行った。同時期、帝室博物館（現東京国立博物館）も大規模な撮影を行い、写真頁約95頁の『名古屋離宮障壁畫大観 上下』を発行した（出版は下賜後の昭和5・6年、聚樂社）。下賜後の昭和6年（1931）、名古屋市は同館から乾板を借用し、『国宝名古屋城美術図録』を出版した。さらに昭和9年（1934）、新規撮影による『国宝建造物』が出版され、昭和13年（1938）には、帝国美術院附属美術研究所（現東京国立文化財研究所）が、525枚にのぼる写真を撮影した。名古屋城障壁画がいかに高く評価されていたかが窺われ、また写真の比較により修理履歴を追うことができる。

補助写真パネル「ガラス乾板写真2」 昭和3年（1928）

京都市立絵画専門学校撮影 原板京都市立芸術大学芸術資料館蔵

作品2「麝香猫図杉戸絵」左面の猫の目は、錐のようなもので穴が開けられている。破損の時期は確定できないが、昭和3年3月に京都市立絵画専門学校が撮影したガラス乾板写真では、黒目の色が丸く剥落し、中央に穴が開けられた様子がうつっている。現況では黒目が三日月形に塗り直され、さらに剥落が進行している。この撮影は、同校教授中井宗太郎の指導下で、人物画家中村大三郎や花鳥画家石崎光瑤が本丸御殿対面所の人物図や表書院の花鳥図を大量に撮影しており、貴重な資料となっている。

補助写真パネル「ガラス乾板写真3」 昭和3年（1928）

京都市立絵画専門学校撮影 原板京都市立芸術大学芸術資料館蔵

「麝香猫図杉戸絵」右面の猫の目は、複数の穴が開けられ、三日月形の黒目が描き加えられている。昭和3年（1928）に撮影された写真にも、三日月形の黒目が写っている。昭和3年の撮影の前後で補筆が行なわれた可能性もあるが、現時点では断定できない。

補助写真パネル「ガラス乾板写真4」 昭和3年（1928）

京都市立絵画専門学校撮影 原板京都市立芸術大学芸術資料館蔵

そもそも虎などの猛獣の障壁画は、恐怖感やいたずらにより眼球が塗りつぶされたり穴を開けられたりすることがしばしばある。まさに画竜点睛を欠いてしまうので、多くの場合、修理時に描き足される。名古屋城では、杉戸絵だけでなく「竹林豹虎図襖絵」（玄関一之間・二之間）の虎や豹のほぼ全頭が、昭和3年（1928）の写真では黒目を傷つけられた無残な顔で写っている。しかし、昭和15年（1940）頃名古屋市が撮影した写真では、すべて三日月形の目になっている。昭和3年（1928）から昭和15年（1940）までのどこかで、この補筆が行なわれた事になる。

補助写真パネル「ガラス乾板写真5」 昭和3年（1928）京都市立絵画専門学校撮影

原板京都市立芸術大学芸術資料館蔵

作品2「麝香猫図杉戸絵」右面の猫の目は、複数の穴が開けられ、三日月形の黒目が描き加えられている。昭和3年（1928）に撮影された写真にも、三日月形の黒目が写っている。昭和3年（1928）の撮影の前後で補筆が行なわれた可能性もあるが、現時点では断定できない。

補助写真パネル「ガラス乾板写真6」 昭和15年（1940）あるいは16年（1941）

名古屋市撮影 原板名古屋城総合事務所蔵

表書院西入側を南側から撮影したもの。突き当り（対面所東入側との境）に4「竹鶏図杉戸絵」が写っており、「金城温古録」の記述と異なるが、おそらくこの入れ方が正しい。同書を金科玉条と信じることへの警鐘である（パネルⅢ－3参照）。

補助写真パネル「ガラス乾板写真6-①」 昭和8年（1933）撮影 『国宝建造物 第一期第七号』掲載

（国宝建造物刊行会発行 昭和9年 名古屋市鶴舞中央図書館蔵）

『国宝建造物』は、著名な建築家伊東忠太らの監修により昭和8年（1933）から11年（1936）にかけて出版された大型写真集。名古屋城は第一期第一号に大天守小天守が、また七号に本丸御殿上洛殿が取り上げられ、それぞれ12葉のコロタイプ印刷画と解説書が頒布された。撮影は奈良市の写真家松岡光夢、解説は古建築修理を専門とした文部技師阪谷良之進。発行者矢野国太郎（徳富蘇峰の女婿）は、付属別刷の中で、経費を度外視し撮影したこと、阪谷技師が立会のため東京から通ったことを誇らしげに記している。たしかに欄間や釘隠、框の蒔絵などの細部がきっちりと撮影され拡大掲載されている。

補助写真パネル「ガラス乾板写真6-②」 昭和8年（1933）撮影 『国宝建造物 第一期第七号』掲載

（国宝建造物刊行会発行 昭和9年 名古屋市鶴舞中央図書館蔵）

前掲写真の拡大。上洛殿南入側を東（二之間側）から撮影しており、左面を引手の位置まで開けた「花桶図杉戸絵」が写っている。敷居や杉戸の構造上、杉戸を開けきることはできない。二之間側から奥の一之間側に行く場合、この畳半畳強、すなわちわずか1.0m強の隙間を通り抜けることになる。一間（約180.0cm）幅の大杉戸がはまる公的儀式用の表書院に比べ、上洛殿が将軍専用の奥座敷であったことが、ここからも理解できよう。『国宝建造物』シリーズの巻頭を飾ったのは、城郭国宝第一号である名古屋城で、小天守青銅鯨や大天守天井など他にない写真が収録されている。当時天守や御殿の撮影は名古屋城管理条例により禁止されており、本出版は特例と考えられる。ガラス乾板原板の所在は今不明であるが、出現を期待したい

補助テーマ「ガラス乾板から知る杉戸 - 3」

昭和13年（1938）に帝国美術院附属美術研究所（現東京文化財研究所）が行った本丸御殿障壁画の撮影は、全障壁画を対象とし、しかも可能な限り正対撮影するという悉皆的な撮影（悉皆とは全数のこと。対象資料を取捨選択しない）で、建物として美しい角度を選んで撮るという従前の撮影とは全く異なる。実は本撮影は、すでに昭和11年（1936）9月に名古屋市へ申請されており、市は御殿の撮影を禁ずる名古屋城管理条例にもとづき却下していた。しかし同研究所は、矢代幸雄所長の再申請書と正木直彦前所長の白筆書状を大岩勇夫名古屋市長に提出し、全障壁画の撮影と現況調査こそが研究上・作品保存上必須であると訴えた。それを受けて名古屋市は再度検討し、市としても全障壁画の写真が必要と判断して市長裁可により撮影を許可した。撮影は翌昭和12年（1937）6月と決まったが、同時期に貞明皇太后が名古屋城に行啓されることになり、昭和13年（1938）6月に延期され、さらに8月追加撮影が行われた。翌年の昭和14年（1939）には、名古屋市が経費負担し文部省に指導と実務を委託する形での全国宝建造物の実測調査と撮影を行うことが決定されており、昭和11年（1936）のこの経緯が、昭和実測図作成と昭和ガラス乾板撮影という名古屋城の二大調査事業に結実した可能性がある。

作品「名古屋城ニ関スル綴 昭和11年～12年」（特別公開）

昭和13年（1938）6月と8月の東京の美術研究所による本丸御殿障壁画撮影の経緯を記す、当時名古屋城を管轄していた名古屋市土木部公園課の決裁綴。「非常持出」と墨書された赤紙が表紙に張られており、杉戸絵などの障壁画やガラス乾板とともに戦火をくぐりぬけた。昭和11年（1936）9月29日付で美術研究所から撮影申請が出されたが、市は10月1日付で却下した。10月21日付で再度申請が出され、説明のため研究所所員が来名した。10月31日、却下した申請を許可する旨の伺いが起案され、12月7日、名古屋市長が承認した。

補助写真パネル「ガラス乾板写真7」 昭和13年（1938） 帝国美術院附属美術研究所撮影

原板東京文化財研究所蔵

昭和13年（1938）6月と8月、帝国美術院附属美術研究所（現東京文化財研究所）が、本丸御殿障壁画の大規模な調査と撮影を行った。菅沼貞三所長代理、田中喜作所員らが調査し、四切板85枚、キャビネ板440枚にのぼるガラス乾板写真が、中根勝初代写真技師により撮影された。本図は、上洛殿西入側を南から撮影したもの。突き当たりの雁之廊下との境にあるべき「梅図杉戸」がはずされ、上洛殿一之間の長押にたてかけられている。その前に柵が設置され、入側には畳を保護するための敷物が敷かれている。戦前の公開状況がよくわかる貴重な一枚である。

補助写真パネル「補助写真パネルガラス乾板写真8」 昭和15年（1940）あるいは16年（1941） 名古屋市撮影

原板名古屋城総合事務所蔵

右の写真の2年ないし3年後、名古屋市が同じく上洛殿西入側を南から撮影した写真。ただし前掲写真の撮影位置より数メートル奥（北寄り）の上段之間脇にカメラを置いている。公開用の柵や敷物は、撮影のため一時的に撤去されたらしく、「梅図杉戸絵」もはめ込まれている。杉戸絵の上には、岩波図を描く長押上小壁がきっちりと納まっている。杉戸絵があるがゆえにこの引き締まった空間が生まれることが、杉戸絵を外した右の写真と比較するとよくわかる。

テーマVI 引手が語る名古屋城史

昭和20年（1945）5月14日早朝の名古屋大空襲は、天守・本丸御殿など大半の建物を焼き尽くす猛火であった。三か月後の8月15日、第二次世界大戦は終戦をむかえた。戦後の混乱最中の12月、名古屋城管理事務所は、本丸御殿の金具や天守の銅製瓦などの金属片を焼け跡から拾い集めた。その中には、上洛殿を飾っていた花熨斗形釘隠の小指の先ほどのかけらもあり、総点数はおそらく数千点の規模になる。それらは、国宝建造物の遺品として米俵に詰められ、名古屋城中でひっそりと保存されてきた。俵の中に、痛ましく焼け焦げ破損した引手が数点含まれていた。引手がついていた建具は御殿とともに燃え、金属製の引手だけ残ったのである。薄く小さな破片であるが、戦時下そして終戦直後の名古屋城を語る証人である。

戦火を浴び、手掛り部を失った引手。昭和20年（1945）5月14日の空襲で被災し、同年12月、名古屋城管理事務所職員の手で焼け跡から収集されたものである。文様は、牡丹と唐草を蹴彫りで表し、空間を魚々子で埋めている。玄関・表書院の襖や杉戸には、牡丹唐草文引手と裏葵唐草紋引手の2タイプが用いられている。この引手は前者に属するが、細部は異なっている。襖は焼け引手だけ残ったため、どの襖についていたのかは確定できない。

テーマ 最後に 門外不出 もう一つの意味

杉戸絵は、粉状の顔料（岩絵具）を膠でとき筆にふくませ、杉板に描いていきます。杉板は十分に乾いたものを用いますが、年月を経るとさらに乾燥し収縮します。木と膠の収縮率が異なるため、板と顔料の間に隙間が生じ、顔料の剥離が生じます。膠の固着力も弱まるため顔料の粉状化が進み、粉が飛ぶように顔料が消えていきます。また杉戸絵は廊下という外界の影響を受けやすい場所にあるため、風や湿気、紫外線、鳥獣の害により、室内の襖絵にくらべ劣化が早くまた甚大となってしまいます。重さゆえの開閉時の損傷も頻発し、杉戸絵は痛ましい状態になりがちです。名古屋城の杉戸絵は、明治以降宮内省や名古屋市によってたびたび修理されており、今も継続的に点検修理しています。輸送時の梱包（こんぼう）や振動により顔料が剥離する危険性を鑑み、修理は名古屋城内の修復室で行い、他館の展覧会への出品も近年は行っておりません。この状況をご理解いただき、名古屋城の杉戸絵は特別史跡名古屋城の中でご覧くださいませよう、改めてお願い申し上げます。

補助解説「名古屋城の中での修復作業」

名古屋城では、文化庁の指導のもと「修理は永遠」という基本方針をたてている。毎年四週間にわたり京都の修理技術者が名古屋城の修復室に詰め、重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画の点検修理を行っている。杉戸絵や襖絵を寝かし、顔料が安定しているかどうかを綿密に点検し、不安定な場所にはごくわずかずつ膠をさしていく。地道で終わりのない作業である。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館 企画展「初公開 門外不出 巨大杉戸絵」

令和4年(2022)9月17日(土)～11月6日(日)

指定	資料名	時代	員数	期間
1 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面04 竹虎図杉戸絵	慶長19年(1614)	1組2面	前期
2 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面11 麝香猫図杉戸絵	慶長19年(1614)	1組2面	後期
3 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面27 松山鳥図杉戸絵	慶長19年(1614)	1組2面	前期
4 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面28 竹籬図杉戸絵	慶長19年(1614)	1組2面	後期
5 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面17 桜花雉子図襖絵 右から1面目	慶長19年(1614)	1面	前期
6 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面17 桜花雉子図襖絵 右から4面目	慶長19年(1614)	1面	後期
7 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面44 雪中柴垣図杉戸絵	寛永11年(1634)	1組2面	前期
8 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面58 竹園杉戸絵	寛永11年(1634)	1組2面	後期
9 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面61 花桶図杉戸絵	寛永11年(1634)	1組2面	後期
10 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面60 花車図杉戸絵	寛永11年(1634)	1組2面	前期
11 旧国宝	名古屋城本丸御蔵障壁面 打掛金物 L字形	江戸	一括	通期
12 旧国宝	名古屋城本丸御蔵障壁面 打掛金物 U字形	江戸	3点	通期
13 旧国宝	名古屋城本丸御蔵障壁面 打掛金物 唄	江戸	7点	通期
14 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 打掛金物 受坪	江戸	2点	通期
15	名古屋城復元本丸御蔵 杉戸 樞	平成	2組8本	通期
16	金城録	明治写	1冊	通期
17	名古屋御本丸御蔵中御絵	明治写	1冊	通期
18	国宝史蹟名古屋城 上下	昭和17年(1942)	2冊	通期
19 旧国宝	名古屋城本丸御蔵障壁面 戸車	江戸～明治	2点	通期
20 重要文化財	名古屋城本丸御蔵障壁面75-209 七宝引手	寛永11年(1634)	1点	通期
21 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 葵紋引手大杉戸	明治29年か	1枚	通期
22 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 菊紋引手杉戸	明治39年～大正5年か	1枚	通期
23 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 菊紋引手大杉戸	明治39年～大正5年か	1枚	通期
24	昭和実測図174 名古屋城御蔵平面図	昭和	1枚	通期
25	昭和実測図190 名古屋城御蔵名古屋城御蔵表書院平面図	昭和	1枚	通期
26	昭和実測図185 名古屋城御蔵大廊下詳細図	昭和	1枚	通期
27	昭和実測図222 名古屋城御蔵上洛殿東側立面図	昭和	1枚	通期
28	昭和実測図235 名古屋城御蔵上洛殿一之間南入側炬計建具等詳細図	昭和	1枚	前期
29	昭和実測図304 名古屋城御蔵上洛殿拓本其の二二	昭和	1枚	後期
30 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 牡丹唐草文引手	慶長19年(1614)か	1点	通期
31 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 裏葵紋引手	明治～大正	1点	通期
32 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 菊紋引手	明治～大正	1点	通期
33 旧国宝	名古屋城本丸御蔵 唐花文引手	明治～大正	1点	通期
特別公開	名古屋城二関スル樞	昭和11年～12年	1点	通期

前期 9月17日(土)～10月4日(火)

後期 10月5日(水)～11月6日(日)



名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展

初公開
門外不出 巨大杉戸絵

令和4年(2022)9月17日(土)→11月6日(日)

会 場：名古屋城 西の丸御蔵城宝館
開館時間：午前9時～午後4時30分(最終入館 午後4時)
ただし、修繕等により変更となる場合があります。
休 館 日：会期中は無休
入 館 料：入館無料
※名古屋城観覧料(500円)〔名古屋市内在住55歳以上、190円〕
の半額減額が適用されます。
主 催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター



名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展

初公開
門外不出 巨大杉戸絵

杉戸絵とは、杉板に描かれた絵画で、扉下の仕切りとして使われます。江戸時代前期に建てられた名古屋城本丸御殿には、狩野楓絵師による厚塗杉戸絵がはめられていました。また明治維新後一時名古屋城を管理した宮内省は、名古屋御蔵宮として本丸御殿を整備し、極上の杉を用いて杉戸を新調しました。

昭和20年(1945)の空襲により本丸御殿は全壊しましたが、襖絵や杉戸絵は直前に取り外されてお蔵免れされました。戦後、それら計1047面は重要文化財に指定され、名古屋城内の収蔵庫で保管され、再建された天守閣の中で順次公開されてきました。しかし、高さ2メートルを超える杉戸絵は、天守閣の門を通すことすらできず、展示はかまいませんでした。まさに門外不出だったのでした。

昨年、西の丸御蔵城宝館の完成にともない、すべての杉戸絵を西の丸御蔵城宝館の専用収蔵庫に収納しました。そして、収蔵庫に併設された見学会で、このたび公開する運びとなりました。本丸御殿が完成した歴々19年から438年、また本丸御殿焼失から77年を経た今、尾張徳川家の威容を示す巨大な杉戸絵が、暗れて目の目を奪います。また歴々天災・皇后をお遊ばした名古屋御蔵宮の杉戸も、戦後初めて公開いたします。

杉戸絵は、板に直接絵が描かれていたため震動による絵剥がしの恐れがあり、他館への貸出は行っていません。この意味でも門外不出である名古屋城本丸御殿の杉戸絵を、名古屋城の中でぜひご覧いただけます。

補と柄
名古屋城の杉戸絵の大半は、扉下の両端に位置していましたが、2層だけは扉下の半ばにはまっていた。これらの杉戸絵には鏝(打掃塗物)が付けられており、鏝からの剥がれは少ないが、この杉戸絵の鏝には、指室と進室専用の上段之鏝や通鏝(黒鳥)があり、奥に進む必要があるからでした。そして杉戸絵には、名古屋城の杉戸絵中屈指の名品として名高い「花巻鏝」が描かれていたのです。鏝は、鏝は杉戸絵から取り外され保存されています。小さな鏝ながら、繊細な磨き残りが窺えます。

巨大杉戸絵
杉戸絵の幅は、扉下の幅によって決まります。名古屋城本丸御殿で一番大きな杉戸絵は、茶室前の扉下に建てられていました。筆と鏝の両方である高貴な、漆の威容を誇る巨大な空襲で、漆を仕切る杉戸絵にも、製法を継承した木から切り出した板が響きあう響きあっています。

次回予告
令和4年11月19日(土)～12月18日(日)
名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展
本丸御殿に秘められた意味
― 狩野楓の心、遺言であら、人形者たれ―

名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展のご案内
地下鉄・名鉄線(日産線)下車 東山1駅(徒歩約3分)
地下鉄・名鉄線(日産線)下車 東山1駅(徒歩約3分)
※入館に際しては「名古屋城」(名古屋城)下車
徒歩約3分、徒歩約3分、徒歩約3分

お問い合わせ
名古屋城総合事務所
〒460-0001 名古屋市中区丸の内1-1-1 TEL:052-231-1100
https://www.nagoyacity.jp/museum/

引手(引手)の名古屋城
昭和20年の空襲で焼失、焼け残った引手が焼け跡から残った。国宝本丸御殿の遺品として保管されてきました。その中に、痛ましく焼け残った引手が数点あります。引手がついていた杉戸(あるいは襖)は漆喰で補修したため、金属である引手だけ残ったことがわかります。薄く小さな破片ですが、まさに名古屋城の近代史を語る証人なのです。



(4)「本丸御殿に秘められた意味—将軍たるもの、清貧であれ、人格者たれ—」

展示概要

会期：令和4年（2022）11月19日（土）～12月18日（日） 30日間

入館者数：27,058人（1日平均901.9人）

出品件数：60件

展示趣旨：

寛永11年（1634）、京都に上洛する途中の三代将軍徳川家光が、名古屋城を訪れた。時の名古屋城主徳川義直は、甥の家光を饗応するため、父家康が作った本丸御殿に家光用の御書院を増築した。その後上洛殿と呼ばれるこの御書院は、襖絵や天井画、飾り金具で埋められた豪華な建物であった。しかも襖絵には、将軍の指針である善き政治、高潔な生活の手本が、天才画家狩野探幽によって描かれていた。本展覧会では、上洛殿を飾っていた探幽の襖絵を一挙公開する。西の丸御蔵城宝館の幅20メートルの展示ケース一杯に、重要文化財の襖絵13面を並べるといふ、初めての試みである。飾り金具、天井画の遺品もあわせて展示し、当時の空間の再現をめざす。

作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面は省略した。ここに収録しないパネル・キャプションもある。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

テーマ1 本丸御殿上洛殿と帝鑑図

名古屋城本丸御殿は、慶長20年（1615）、初代尾張藩主徳川義直の居城として、義直実父・徳川家康の命により築かれた。20年後の寛永11年（1639）、三代将軍家光の御成御殿として上洛殿が増築された。上洛殿は、幕府御絵師・狩野探幽の描く障壁画で彩られ、中でも将軍家光と藩主義直が座したであろう上段之間と一之間には、「帝鑑図」という格調高き画題が選ばれた。本丸御殿は、昭和20年（1945）5月14日の空襲により全焼し、床の間などの壁に貼り込まれていた壁貼付絵は建物とともに焼失した。一方襖絵は、空襲直前の3月末頃に取り外され城内御深井丸の乃木倉庫に保管されていたため、奇跡的に焼失を免れた。現在、帝鑑図を描く襖絵は、上段之間・一之間あわせて26面が現存し、すべて重要文化財に指定されている。今回は、一之間の襖絵16面の内13面を一堂に展示する。もちろん初めての機会である。

作品1「帝鑑図説」

慶長11年（1606）刊 二巻六冊 古活字印版 名古屋市蓬左文庫蔵

『帝鑑図説』は、中国明の隆慶6年（1572）、幼くして即位した万曆帝の帝王教育用に編まれた本。中国歴代帝王の著名な善政や悪行計百十七話を分かりやすく書き、挿絵を付けている。16世紀末頃日本に舶載され、慶長11年、豊臣秀頼の命により出版された。いわゆる秀頼版で、本書はその一本。徳川家康が所持し、尾張藩初代藩主義直に与えられた。読み下しのための返り点や注記が朱や墨で加えられ、その意味でも極めて貴重。

作品2「帝鑑図襖絵 高土」 名古屋城本丸御殿上洛殿一之間南側戸襖 四面中東端一面

寛永11年（1634） 狩野探幽筆 重要文化財

寛永11年に増築された上洛殿は、上段之間・一之間・二之間・三之間・松之間・納戸之間の六室から成り、将軍専用の湯殿（風呂）と洗面所が付属した。上段之間は、南側に続く一之間より畳面が一段高い、最上の格式の部屋であるが、上段之間と一之間の画題は帝鑑図で統一されていた。二之間以下は部屋ごとに画題が異なっており、上段之間と一之間は、格に違いを持たせた続きの間として用いられたことがわかる。将軍を藩主が饗応するという至上の儀式がこの二部屋で行われたと考えられる。

作品3「帝鑑図襖絵 褒獎守令」 名古屋城本丸御殿上洛殿一之間東側襖四面

寛永11年(1634) 狩野探幽筆 重要文化財 『帝鑑図説』善行・第二十六話

帝鑑図襖に描かれた説話は、十歳で即位した中国明代の万暦帝に教育書として献上された書物『帝鑑図説』に収録されている。『帝鑑図説』は、中国歴代帝王の善政八十一話と悪政三十六話を収め、幼い帝が理解できるよう挿絵を添えていた。色の無い挿絵を襖という大画面に拡大し、彩色を施したのが、上洛殿の襖絵である。すなわち、三代将軍家光という日本での最高職の為政者がめざすべき政治の理想を、帝鑑図襖は示しているのである。

作品4「帝鑑図襖絵 明弁詐書」 名古屋城本丸御殿上洛殿一之間北側襖四面

寛永11年(1634) 狩野探幽筆 重要文化財 『帝鑑図説』善行・第二十五話

上洛殿障壁画の筆者については、「事蹟録」という尾張藩の公記録に、狩野探幽(1602~74)と門人杵之助に作画を命じたと記されている。探幽は、当時三十三歳の若さながら幕府御絵師の筆頭にあり、幕府の障壁画制作の大半に関わっていたが、それらの大半は現存しない。名古屋城の上洛殿では、上段之間・一之間・二之間・三之間の四部屋の障壁画を探幽ほぼ一人で描いたことが、様式から推定できる。数、伝来、質の高さから、上洛殿の障壁画は探幽、そして日本絵画史の金字塔とされている。

作品5「帝鑑図襖絵 蒲輪徴賢」 名古屋城本丸御殿上洛殿一之間西側襖四面

寛永11年(1634) 狩野探幽筆 重要文化財 『帝鑑図説』善行・第二十四話

探幽は、『帝鑑図説』にある町並みや木々をすべて消し、蒲(がま)の穂を巻いた車、門から出る申公、贈り物を差し出す使者という説話を語る最小限のモチーフだけ残し、広い空間の中に配している。本の挿絵という小画面を障壁画に拡大する場合、モチーフを増やすのが最もたやすいが、探幽はあえて、説話を語るための限界までモチーフを減らし、物語の本質に視点を絞る。さらに、モチーフを削って生まれた余白を確固たる空間として魅せている。驚くべき読解力と技量を、三十歳前半の探幽は有していたのである。

テーマII 帝鑑図と家康・義直

帝鑑図の源泉は、絵入り本として出版されていた『帝鑑図説』である。儒学の考えにのっとり皇帝が鑑とすべき政治を説くもので、中国で皇帝の教養書として編まれ、日本では豊臣秀頼の命により出版された。駿府城で家康が没した後、遺言により実子義直に与えられた「駿河御讓本」の中に秀頼版『帝鑑図説』があり、尾張藩主の蔵書を納める名古屋市蓬左文庫に伝えられている。寛永11年(1634)に将軍家光のため造営された本丸御殿上洛殿では、将軍饗応の舞台となる上段之間と一之間に、探幽により帝鑑図が描かれた。帝鑑図は、すでに寛永3年、二条城行幸殿に探幽が描いており、藩主義直はその襖絵を目にしていたはずである。また義直は中国文物に憧れ儒学に傾倒していた。義直が、父から遺贈された『帝鑑図説』を読み、上洛殿の画題として帝鑑図を選択し、そして探幽に作画の命を下した可能性はきわめて高い。

作品6「帝鑑図説」

江戸時代刊 十二巻七冊 名古屋市蓬左文庫蔵 無跋

帝鑑図は、障壁画のみならず屏風や掛軸の遺品もあり、江戸時代前期には大名家の調度として好まれたと考えられる。『帝鑑図説』も藩主の教養書として需要があったと考えられるが、秀頼版はいわゆる漢文であり、読みにくい。よって早い時期から平易な和文に書き変えた本が出版された。本書もその一つ。跋がなく出版時期は不明である。

作品7「帝鑑図画帖」

江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

和文の詞書(解説本文)と挿絵を色紙に描く珍しい帝鑑図で、名古屋の旧家に伝来した。二曲一隻の屏風に貼り込まれていたが、近年画帖に改装された。絵は丹書受戒・蒲輪徴賢・敬受母教・拒関賜布の四場面が現存する。構図は『帝鑑図説』の挿絵をほぼ踏襲しているが、蒲輪徴賢の場面では、『帝鑑図説』の地面を描く線を橋と見間違えたようで、川と橋を描き足している。筆者は、17世紀前半の狩野派系の絵師と考えられる。各画面は次のとおり。

丹書受戒・善行十二。周の武王は、政治の鑑を記す丹書という秘書を老師の尚夫に請い、礼を尽くして得た。尚夫とは、太公望呂尚のこと。釣りをしていた時、その器に驚いた武王の父文王により師として迎えられた。絵は、書を差し出す尚夫と、謹んで頭を下げる武王。

蒲輪微賢・善行二四。漢の武帝は、老儒学者申公を迎えるにあたり、蒲の穂を車輪に巻いた車を用意した。絵は、申公を迎える立派な車。

敬受母教・善行六十六。宋の太祖が即位しその母杜氏が昭憲皇太后となったが、皇太后は「子のおかげで尊い位につけただけ」と喜ばず、さらに君主であることの難しさを憂えた。この言葉を聞き太祖はさらに母を敬った。絵は、皇太后に祝いの言葉を述べる大勢の家臣と、膝をついて母の言葉を聞く太祖。

拒闕賜布・善行三十。後漢の光武帝は狩猟を好み、狩に出ると閉門時間を過ぎても城に戻らなかった。門を守る揮は、規則だからとして開門しなかったが、翌朝光武帝は揮に布を与えて報償した。絵は、閉じられた門の外で慌てる光武帝の一行。右頁には、准蔡成功という善行六十二の詞書が貼られているが、対応する絵は失われている。

脯林酒池・悪行二。夏の最後の暴君桀王は、庭に脯（干し肉）を林のように吊るし、池を掘り酒を注ぎ、三千人の民に一斉に飲ませた。民が池に口をつけ牛のように飲む様子を、寵姫とともに笑って見物した。殷の紂王の酒池肉林とならぶ愚行として知られている。

テーマIII 失われた帝鑑図の意味

名古屋城上洛殿完成後も、帝鑑図は、覇者の座を飾るにふさわしい画題として江戸城や内裏にしばしば描かれ、屏風や画帖にも取り上げられた。しかし、それらの制作時期はおおむね江戸時代前期に限られる。絵だけでは理解しにくい高尚な画題であるところから、しだいに描かれなくなったと考えられる。名古屋城においても同様で、江戸時代後期に編まれた名古屋城百科事典ともいべき書物である『金城温古録』に、上洛殿の上段之間について、「ここを帝鑑の間という」が、「その伝、失われて今知りたし」と記されている。つまり部屋の名称だけは伝えられていたが、逸話の詳細は忘れ去られていたのである。藩祖義直が上洛殿帝鑑図襖絵に込めた、「將軍たるもの、かくあるべき」という意味は、二百年後には見失われてしまった。今も、上洛殿の襖絵の真の意味を知る人は多くはない。

作品8 「金城温古録」 奥村得義編 江戸時代後期成立 明治時代写

「金城温古録」は、尾張藩士奥村得義が名古屋城について詳述する書。本丸御殿障壁画の画題も故事を引きつつ長文で考察しているが、上洛殿の上段之間・一之間に限っては「唐の人物」と記すに過ぎない。当時の尾張藩きっての博学者で多くの知識人と交遊していた得義すら、何が描かれているか知らなかったのであり、帝鑑図の意味が早くに見失われていたことを示している。

翻刻（一之御間）

「御下段ナリ 北境御上段縁高六寸 上巾六寸御襖四本絵唐の人物鴨
居上欄間彫物彩色松ニ牡丹鶴五羽亀一 両面彫御上段ノ方ハ此裏形ナリ
東境御襖四本唐の人物、鴨居上欄間彫梅竹鶏雌雄二
雛三太鼓金彩色是諫鼓ナリ西南二方御戸襖ニ明ル障子同所鴨居上御壁張絵山水折上天井黒漆絵色紙
朗詠集註ニ曰六帖ニ唐堯ノ時敢諫ノ鼓有リト見ヘ其心ハ上ニ在ル臣政道
ニ私アレハ万民愁ヘ甚シソレヲ君ニ訴ヘントスレトモ佞臣妨ケテ君ヘ
達セス帝堯ハソレヲ嘆カセラレ御門外ニ太鼓ヲ懸置レ是敲ケハ御
直ニ下々ノ心ヲ聞シ召ルルトナリ世治リ民愁ヒナケレハ彼太鼓ヲ敲キテ訴
ヘ出ル者モ無ク太鼓ハ苔ムシ果ニハ鳥集ヒ遊ンテ居ル聖人ノ世ヲ治メ給フルカ
ヤウニ静ナリト後代ノ帝王ヲ諫ムル鑑トトイフ故事ナリト云フ
此故ニ爰ヲ帝鑑ノ間ト云サレハ御上段ヲ始御間毎ニ
唐人ノ絵ハ皆漢邦帝鑑ノ図ナリ其伝ヘテ今知レ
難シ或ハ云ク江戸狩野ノ家ニハ此御間々々ノ絵手本ヲ
伝ヘシカ度々ノ災ニ罹リテ失ヘタリトモ云フ」

（大意 一之間の欄間は、中国の皇帝堯の時代、政治がすばらしいので皇帝をいさめる太鼓に苔むし鶏が眠るほどだったという逸話を彫っている。このため、一之間を帝鑑の間という。襖に描かれた人物図も、中国の帝鑑図と伝えられるが、細かいことはわからない。狩野探幽の子孫の家に、絵の手本があったというが、火事で焼けたということだ。）

テーマⅣ 襖の上の彫刻欄間

上洛殿では、各部屋を仕切る襖と天井の間に、彫刻欄間と呼ばれる巨大な欄間がはまっていた。一之間では、北側の上段之間との境と東側の二之間との境に、計四面の彫刻欄間があった。それぞれの高さは約四尺（123.0cm）で、幅は襖二枚分、すなわち九尺（275.0cm）にのぼる。厚み七寸（21.0cm）の桧板に、花や鳥を掘り込み、突出部は竹釘等で接合し、金泥と岩絵具を厚く塗っていた。帝鑑図襖は墨を基本としていたが、襖の上の欄間は、極彩色で着色されていたのである。かかる豪華な欄間も、昭和20年（1945）の空襲によりすべて焼失した。しかし、いくつかの断片が奇跡的に名古屋城に伝来する。空襲前に何らかの要因ではずれ、大切に保管されてきたものと考えられる。その一部は、戦前に撮影されたガラス乾板写真との比較により、どこの部分か特定可能である。制作当初の顔料も残っており、金泥を豊かに用いた縹緗彩色が確認できる。

作品9-1「彫刻欄間 断片」寛永11年（1634）

緑色の棒は、上洛殿上段之間と一之間との境の長押上にはめられていた「鶴に松図」彫刻欄間のうちの、鶴の足であろう。このような小片は、板から彫り出すのではなく、別に作って木釘や膠（にかわ）等で接着したと考えられる。牡丹の葉は、二之間と三之間との境の「山鳥に牡丹図」欄間の断片と考えられる。葉には、下塗りの胡粉と、その上から塗った緑青や金泥が残っている。

作品9-2「彫刻欄間 断片」寛永11年（1634）

椿の花と葉は、上洛殿二之間と入側の境の「椿に雉子図」彫刻欄間の断片と確定できる。表面の顔料は剥落しているが、裏側には、鮮やかな朱や緑青が残っている。彫り口は速度感があり、力強い。寛永期の御殿の彫刻欄間は、二条城二の丸御殿にしか現存せず、名古屋城のこの資料は断片ではあるが貴重である。

参考出品「彫刻欄間 試作品」復元御殿上洛殿一之間東側長押上欄間 北より一枚目 平成

平成の本丸御殿復元に先立って作られた試作品。上洛殿一之間と二之間の境の彫刻欄間で、画題は「諫鼓苔むす」として知られる中国聖帝の善政。伝説上の天子堯が、悪政を諫める人民に打鳴らさせるための諫めの太鼓を朝廷の外に設けたが、悪政がないため鼓に苔が生え、鶏もその上で休んだという善政のたとえ。この彫刻欄間の下に、帝鑑図襖がはまっていた。ガラス乾板写真は白黒であるため色彩が明らかでなく、検討の結果現在のような色彩となった。制作は今も彫刻で知られる富山県砺波市で行われた。

テーマⅤ 襖のあいだの紙障子

帝鑑図襖の仕立て方には、二種類ある。一つは、部屋と部屋の間仕切りとして用いられた普通の紙襖。絵を描いた紙（本紙という）が襖の両面に貼られている。もう一つは部屋と入側（廊下）との境にはめられた戸襖で、室内側の面に本紙が貼られ、廊下側は舞良子という横棧を打ち付けた板戸となっている。後者を舞良戸ともいい、舞良戸を閉めると室内は暗闇となる。上洛殿では、舞良戸と舞良戸の間に水腰障子という全面紙の障子一枚を挟みこみ、三枚引きとしていた。舞良戸を開けても水腰障子を引けば、穏やかな日の光が障子越しに部屋に差し込み、中に座す貴人のプライバシーも保たれる。三枚引きの絵襖は、上洛殿と黒木書院にしかない。この二棟がいかに特殊か、障子からもうかがわれる。そして、上洛殿と黒木書院の水腰障子は、空襲前に絵襖とともに御殿から外され保管されたため、奇跡的に焼失を免れた。とくに上洛殿の水腰障子は、枠に黒漆を塗り金蒔絵で唐草文をあらわした、まことに瀟洒な障子である。

作品10-1「水腰障子 大」本丸御殿上洛殿一之間南側 寛永11年（1634）

上洛殿の入側と室内の仕切りとして、舞良戸二枚の間にはめられていた、明り取りのための水腰障子。水腰障子は、腰板がない紙障子のこと。幅約140.0cmのものが六枚現存する。それぞれの框に「西側北より三 拾式」「南側西ノ一 拾」「南側東ノ一 四」などの墨書があり、上洛殿一之間西、一之間南、三之間南にはめられていたことが近年明らかになった。なお、上段之間西側にも二枚の障子があったはずだが現存せず、昭和20年（1945）の空襲により、本丸御殿とともに焼失したと考えられる。

作品10-2「水腰障子 小」 本丸御殿上洛殿三之間東側 寛永11年（1634）

幅の狭い水腰障子。六枚現存し、框に「南側東ヨリ四 三」などの墨書や「東側北ヨリ二」などの刻銘があり、上洛殿二之間南と三之間東の水腰障子と判明した。框には、舞良戸や襖と同じく黒漆が塗られ、金時絵で唐草模様が表されている。障子紙の細い継ぎ目が、棧の間に見える。小さな和紙を貼り重ねているため、千鳥貼り、あるいは石垣貼りという、書院や茶室で受け継がれてきた伝統的な貼り方である。手間はかかるが、細く白い垂直線が律動的な美しさを生んでいる。復元本丸御殿では、もちろんこの仕様とした。

テーマVI 帝鑑図と飾り金具

日本絵画の画題には、格がある。最上の格が山水図で、次が人物図。次が花鳥図。末席が走獣図。技法的には、水墨画が最上で、彩色画は格が下がる。本丸御殿では、上洛殿の奥に続く黒木書院が、家康の部屋を清須城から移築したとされ、水墨で山水図が描かれており別格の建物となる。上洛殿上段之間・一之間の帝鑑図襖は、墨画着色人物図であり格としては黒木書院より下になる。一方、帝鑑図襖の上の天井や長押には、厚く金鍍金され金色に輝く金具が取り付けられており、簡素な黒木書院と明確な対比が図られていた。すなわち上洛殿は、將軍御座所にふさわしい、精緻で豪華極まりない空間であった。金具の大半は、昭和20年（1945）の空襲で本丸御殿とともに焼失した。しかし、同年12月、敗戦直後の混乱の中で、形の残る金具が焼け跡から収集され、俵（たわら）に込められて名古屋城で保存されてきた。それら痛ましい焼損金具を参考として、平成復元本丸御殿が完成した。

補助パネル「金具と拓本」

名古屋城が今のように名古屋市の所蔵となったのは、昭和5年（1930）からである。明治維新後しばらく名古屋城は名古屋離宮の名で宮内省により管理されていた。昭和五年、名古屋離宮は名古屋市に下賜され、同時に本丸御殿や天守など24棟が国宝建造物に指定された。名古屋市は、昭和7年から国宝建築物の調査を開始し、金具や蒔絵など文様があるものについては実物に紙をあてて拓本を制作した。

調査半ばの昭和20年（1945）5月、焼夷弾の直撃により、本丸御殿は全焼した。拓本や調査ノートは焼失を免れ、戦後の昭和27年、307枚の清書図面が完成した。そのうちの21枚に、拓本が貼り付けられている。その他、未装のままの拓本が、木箱に入れて保管されてきた。金具拓本には、往時の精緻な金具の彫りが、息づくように写されている。拓本を作ったのは、文部省の指導により東京から派遣された建築技術者と名古屋市職員で、彼らの技術と熱意に首（こうべ）を垂れる他はない。

作品11-1「釘隠 本丸御殿焼損金具 二」 寛永11年（1634）

釘隠とは、長押に打った釘の頭を隠すための金具。釘の頭は数mmに過ぎないが、上洛殿では幅62cm・高さ17cmという巨大な釘隠が打たれていた。本資料は、栗鼠文花熨斗形釘隠の断片。痛ましく破損しているが、精緻に打ち出された花（桔梗あるいは鉄線）はよく残っている。熨斗形に折った懐紙で花を包む様を表すところから、この形式の釘隠を花熨斗形と呼ぶ。

作品11-2「釘隠 本丸御殿焼損金具 五」 寛永11年（1634）

栗鼠文花熨斗形釘隠の熨斗の部分。栗鼠と葡萄を肉高に打ち出し、毛並や葉脈などの細かい線は蹴彫で表す。成分分析により金銀が検出され、全体を金箔で水銀鍍金し、葡萄の実はさらに銀を鍍金していたと推定された。焼失する前に制作された拓本類から、上洛殿入側と三之間に栗鼠文の花熨斗が用いられていたことが知られる。なお上段之間・一之間・二之間・納戸之間の釘隠は、唐獅子文の花熨斗で、モチーフの格は栗鼠より高い。

作品11-3「釘隠 本丸御殿焼損金具 一」 寛永11年（1634）

激しく損傷した栗鼠文の花熨斗形釘隠。名古屋城に今遺る焼損金具のうち最大で、文様の大半が焼け落ちているが、五枚の銅板を釘で止めるという構造はかろうじてわかる。構造を伝える花熨斗は本資料しかなく、本資料があるがゆえ、平成に行われた復元本丸御殿の金具制作は大きく進展した。本資料は、第二次世界大戦による本丸御殿焼失、その後の焼損金具収集保存、そして平成の御殿復元工事を語る象徴的存在といえる。

作品11-4「釘隠 本丸御殿焼損金具 七」 寛永11年（1634）

七宝繫に四弁花文を彫る出八双形の釘隠。全体を水銀鍍金で金色とし、七宝繫は片切鑿で輪郭を彫り、四弁花は鋤彫し、煮黒目により黒く発色させている。中央部は欠損している。上洛殿北側の松之間の長押に打たれていた金具で、表側諸室の花熨斗形より小振りとはいえ、幅約50.0cmに及ぶ。なお松之間は、総金箔地に松を描く華やかな濃彩画で長押上まで飾られていた。

作品12-1「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 二六」 寛永11年（1634）

上洛殿の天井は、格天井という形式で、黒漆を塗った角材（格縁）を格子状に組み、その上に方形の天井板を置く。格縁が十字形に組まれる「辻」の中央に葵紋を彫った金具を打ち、格縁自体を金具でおおう。これらの金具を天井辻金具（金物）と総称する。辻金具は、ごく小さな破片を含めて数十点が焼け跡から拾い集められ、現存する。本資料は、二之間の辻金具で、菱形の中に四弁花を表している。

作品12-2「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 六七」 寛永11年（1634）

七宝繫四弁花文がかろうじて見え、拓本との比較から、三之間の天井辻金具と知られる。格縁の三方（下から見上げた時に見える、中央部と両側面）の内、側面の片方が完全に欠損し、中央部の先端も失われている。三之間の辻金具の遺品は、この展示した一点しかない。目視ではほとんどわからないが、成分分析により微量の金が表面に残ることが確認された。本来は金で覆われた銅金具であった。

作品12-3「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 四七」 寛永11年（1634）

入側の辻金具。格縁の側面をくるむ部分まで完全に残っている。辻金具の焼損金具のうち最も保存がよく、魚々子の有無で表した市松文もよく見える。成分分析により、1mm厚さの銅板に漆で金箔を貼り（漆箔）、型鑿や蹴彫で文様を彫り、墨差で黒色を差したと判断した。

作品12-4「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 七五」 寛永11年（1634）

辻金具の中央部分。葵紋を蹴彫し、周囲は直径1mmという細かな魚々子で埋めている。格縁に止めるための釘も残存しており、昭和20年（1945）の焼損金具収集事業が慎重に行なわれた事を物語る。葵紋はどの部屋にも用いられていたため、どの部屋のものか特定できない。

作品12-5「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 十一」 寛永11年（1634）

唐草を蹴彫で表す辻金具。外周は優美な曲線を描いており、側面部はない。中央部のみというこの形式の辻金具が、上洛殿松之間・鷺之廊下・菊之廊下の天井を飾っていた。空襲の戦火により茶褐色に変色しているが、本来は他の辻金具と同様漆箔により金箔が貼られ、金色に輝いていた。

作品12-6「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 七七」 寛永11年（1634）

辻金具の辻、すなわち十字が交わる中央部分の金具。花のつぼみのような形を四つ組み合わせる四花裏葵紋が蹴彫で表されている。裏葵紋はつぼみを六つ配する六花が一般的で、四花は珍しい。四花裏葵紋の辻金具は、松之間・鷺之廊下・菊之廊下に用いられていた。

作品12-7「天井辻金具 本丸御殿焼損金具 七六」 寛永11年（1634）

辻金具の中央部分で、四花の裏葵紋を表している。納戸之間の金具で、松之間の裏葵紋金具より大きい。また松之間等の金具が空間をすべて魚々子で埋めるのに対し、本資料は、極小の菊花文を外周に密集させている。納戸之間は裏向きの部屋ではあるが、帳台構の襖によって上段之間に通じており、将軍待機の部屋であった可能性がある。そのため辻金具も凝った仕様となったのかもしれない。

作品13-1「釘隠 拓本 一七三」 拓本制作昭和前期

「上段ノ間ノ西入側」の墨書があり、上洛殿上段之間の西側廊下の長押に打たれた栗鼠文花熨斗形釘隠の拓本とわかる。左側三分の一がなく、長押の端に打たれた釘隠と見なされる。現存する焼損金具は、細部が焼け落ち、熱で変形しているため寸法もわかりにくい。この拓本により、細部意匠や法量が正確に把握できる。

作品13-2「天井辻金具拓本 二〇七」 拓本制作昭和前期

戦前に上洛殿の金具から直接とられた拓本。「一之間」「隅支輪下バ上部」と薄く記されており、一之間天井の折上部分角の天井辻金具とわかる。これら拓本や焼損金具から、各部屋の天井の意匠が知られる。すなわち一之間は亀甲、二之間は菱に四弁花、三之間が七宝繫に四弁花、松之間・納戸之間が唐草、入側が市松（いちまつ）と部屋により異なっており、上段之間は七宝繫四弁花文を金時絵で表していた。一之間の辻金具の遺品は現存せず、本拓本は極めて貴重である。

作品13-3「天井辻金具拓本 一八一」 拓本制作昭和前期

「三之間」「格天井 格緑」と薄く記されており、三之間の辻金具の拓本とわかる。下から紙を当てて採拓しており、格縁の中央部しかなく、側面はとれていない。四弁花の周りを小さな魚々子でびっしりと埋めていることがよくわかる。

作品14「昭和実測図 三〇六 名古屋城御殿上洛殿拓本 其の二四」 拓本制作昭和前期

戦前に御殿の金具から直接とった拓本を、戦後に整理し、台紙に張り込んだもの。左上に金具の位置と種類を記入しており、花熨斗形釘隠は二之間と三之間の南入側の長押、天井辻金具は一之間の南入側の天井に打たれていた金具と知られる。選りすぐりの拓本と考えられ、拓本としても優れた出来栄を示している。

作品15「昭和実測図 三〇八 名古屋城御殿上洛殿拓本 其の二六」 拓本制作昭和前期

上洛殿納戸之間・松之間の釘隠や天井辻金具、引手の拓本を貼り込む。右端の辻金具拓本は、側面と中央の二面をとっている。本丸御殿上洛殿の天井は、松之間で約十四尺（4.2m）。この高さまではしごで上るか足場を組むかし、真上を向いて天井金具の拓本をとったことになる。昭和十年代に行われたこの名古屋城国宝建造物調査がいかに真摯な作業であったか、改めて噛みしめたい。

テーマVII 上洛殿の天井画①

玄関・表書院など慶長20年（1615）に創建された棟と寛永11年（1634）に増築された上洛殿は、入側でつながっている。創建部と増築部には多くの違いがあり、そのひとつが天井画の有無である。上洛殿の天井は、黒漆塗の木枠を格子状に組んだ格天井となっており、枠には金具や時絵で金色の加飾がなされ、しかも格子ごとに絵のある天井板がはめ込まれている。上洛殿に入って上を見れば、漆黒と黄金に囲まれた鮮やかな絵が広がっていたのである。名古屋城管理事務所（当時）は、昭和20年（1945）の空襲の直前、襖絵だけでなく天井画700枚もとらずに乃木倉庫に避難させた。それらは今も現存し、重要文化財に指定されている。これほどの天井画が残る江戸期の建物は、二条城二の丸御殿と名古屋城だけである。

テーマVII 上洛殿の天井画②

700枚の天井画は、現在収蔵庫に保管されている。今回、戦前に撮影されたガラス乾板写真にもとづき、一之間北東の天井画を江戸期のように並べてみた。絵は、山水図や花鳥図がほぼ交互に並べられ、規則性はなかったようだ。また幕末や明治期の修理の際、向きを誤って収めたものもある。天井画は構造上本紙が常に下を向くため、顔料の落下が避けられず、何を描くか明瞭でない画面も多い。しかし、仔細に見ると、中国絵画や日本の室町漢画を深く学習し、一方で実際の花や鳥の写生を自ら行った画家でないと描けない表現が見いだされる。寛永期、古画学習と実物写生の第一人者は、帝鑑図の筆者探幽であった。少なくとも一部の天井画は、探幽その人の作と考えたい。

テーマVII 上洛殿の天井画③

上洛殿一之間の天井は、折上格天井といい、長押上小壁の上に曲面状の格天井を一段分立ち上げ、その上に平面の格天井を貼っている。折り上げた分天井が高くなり、部屋の格も高くなる。

テーマⅦ 上洛殿の天井画④

上段の間は、折上が二段ある二重折上格天井で、一之間よりさらに天井が高く、最上格となる。二之間以下は折上がない平らな格天井で、格はさがる。天井を見上げるだけで、部屋の格差がわかる仕組であった。

作品16「小禽図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）重要文化財

上洛殿一之間天井の最下部、すなわち折上部分（立ち上がり）にはめられていた天井画。湾曲させた桧の薄板に絵を描いた本紙を張り込み、裏に支輪を釘で打ち付け、湾曲を固定している。絵は、花咲く枝にとまる小鳥を描いている。花卉や長く伸びる尾は速筆ながらきわめて流麗で、帝鑑図襖の筆者探幽自身の作の可能性もある。

作品17「椿図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）重要文化財

懐紙を熨斗形に折って椿一枝を包み贈答用とした、いわゆる折枝を描く。椿の葉には岩絵具の緑青が残っている。一之間天井の、作品13「小禽図」の左横にはめ込まれていた。一之間には、32枚の湾曲した折上天井が掲げられており、空襲直前に取り外されていたためすべて現存する。

作品18「山水図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）重要文化財

柵に囲まれた村の脇を、人馬が行きかう。構造は、薄い桧の板の上に、唐花模様を金で擦りだした装飾料紙（雁皮紙）を貼り、その上から山水図を描いた本紙を貼っている。本紙は、竹から作った紙（竹紙）で、墨画を描くには最適な高級紙であるが、脆弱で傷みやすい。

作品19「山水図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）

部屋の角に置かれた天井画。画面左側に作品20「山水図」が亀の尾と呼ばれる材をはさんで配されていた。絵は、海に張り出す断崖、漁舟、梅樹、雪を抱く遠山をくっきりとした墨線で描く、雪舟風の楷体山水図。小さな天井画とは思えないほどの完成度を示している。

作品20「山水図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）重要文化財

作品19「山水図」の左に配されていた天井画。残念ながら本紙の劣化が激しいが、もとは草書風の山水図であったと考えられる。画面中央などに三列に並ぶ黒い斑点は、本紙が貼られている下地板から滲みでた鉄錆。支輪を固定するため板に打たれた鉄釘が、経年により錆び、その錆が本紙を損ない穴が開くまでになったのである。

作品21「飛雁図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）

雁が戻る様を描く。明治期の修理時にまかれた金砂子により画趣が損なわれているが、描線は的確である。一之間の天井画は96面現存し、山水図や花鳥図が描かれている。同じ構図の絵は一枚もなく、しかも驚くべき高い技量が発揮されている。

作品22「竹図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）重要文化財

竹を描く天井画。天井の水平面にはめ込まれていた。構造は、折上部分とはまったく異なり、材木を格子状に組んだ方形の骨組の両面に下貼り用の和紙を貼り重ね、その上に本紙を貼っている。ガラス乾板写真では、上下が逆向きにはめられている。修理時にまちがえたものと考えられる。

作品23「猿図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）重要文化財

愛らしい顔立ちの手長猿が、木にぶらさがって遊んでいる。実は、中国南宋時代の画僧牧谿が得意とし、日本でも禅宗寺院によく描かれた伝統的な画題で、単純化された顔も牧谿様式にのっとりしている。古画をしっかりと学習した跡が明瞭な逸品である。

作品24「山水図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）

点描を重ねて山を描き、また右上の海に数隻の舟を浮かべている。点描法は、中国南宋の画家玉潤にちなみ玉潤様と呼ばれる描法。また画題は、中国の景勝地を描く伝統画題「瀟湘八景図」中の「遠浦帰帆図」で、やはり玉潤が得意とした。様式・画題ともに南宋画にのっとっており、本図を描いた画家が中国古画について深い知識を持っていたことがよくわかる。

作品25「山水図」 上洛殿一之間天井板絵 寛永11年（1634）

狭い谷合に家が連なり、家の中の小道を人が歩く。手前から奥へと描線の墨を淡くし、たくみに遠近を作っている。こうした描法や図様は、室町時代の巨匠雪舟の様式を学んだものと考えられる。簡潔な構図ながら、空間構成にゆるぎはなく、画家の力量をうかがわせる。

テーマⅦ 上洛殿の天井画⑤

上段之間・一之間・二之間の天井画は一面ずつ絵が違うが、三之間と入側は、同じ文様を繰り返すもので、格がさがる。入側の天井には菊文画と桐文画が交互に並べられていた。外光や風にさらされるため、室内の天井より傷みがひどい。明治26年（1893）、宮内省により修理され、あまりに傷んでいた画面は新規に制作されたものと取り換えられた。

作品26「菊文図（緑）」上洛殿入側天井板絵 写三八六 寛永11年（1634）

上洛殿の入側（廊下）の天井には、菊と桐を色違いで描く天井画が、交互に配されていた。江戸後期の名古屋城について詳述する『金城温古録』でも「御天井錦紋 菊 桐形」と記されている。室内とは異なり同じような画面を繰り返しており、室内との差別化が図られていた。

作品27「桐文図」上洛殿入側天井板絵 写五二四 寛永11年（1634） 重要文化財

大きな桐の葉を緑青（緑色の岩絵具）で塗りこめ、金箔を貼って葉脈を表す。三房の花は現在白く見えるが本来は臙脂色であったと考えられる。入側の菊・桐文天井画は、36面現存し、室内天井板絵の附けたりとして重要文化財に指定されている。

作品28「桐文図」上洛殿入側天井板絵 写五八二 寛永11年（1634） 重要文化財

入側天井画の構造は、室内天井と同じく文様を擦りだした料紙を板に貼り、その上から本紙を貼り重ねている。環境の変化を受けやすい入側にあるため劣化が激しく、幕末期と明治期、昭和期に修理され、さらに今も年に数面ずつ修理されている。

テーマⅦ 上洛殿の天井画⑥

名古屋城では、重要文化財本丸御殿障壁画1,047面について、修理は永遠という基本方針のもと、文化庁の補助事業として点検・修理を続けている。天井板絵については、本紙を木部からはずし、補修して再度張り込むという根本修理を行っている。

作品29「桐文図修理銘」 明治26年（1893） 3月

作品28「桐文図天井板絵」を令和3年度（2021～2022）に解体修理した時、下貼りから修理銘が見いだされ、明治26年（1893）3月、東京の表具師が来名し修理した事が明らかとなった。当時本丸御殿は陸軍が管理していたが、同24年（1891）10月の濃尾震災で損壊したため、宮内省の建築技師木子清敬の指導により修理された。障壁画の修理仕様書が現宮内庁に伝えられており、解体修理であることが知られる。修理完了直後の6月1日、本丸御殿は宮内省に移管され、名古屋離宮となった。

翻刻「明治廿六年巳三月修復 東京府下芝 芝區柴井町壱番地 大経師 市川□□郎」

経師（きょうじ）とは、表具師のこと。柴井町には、多くの表具師が居住していた。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館 企画展「本丸御殿に秘められた意味 —将軍たるもの、清貧であれ、人格者たれ—」

令和4年11月19日(土)~12月18日(日)

指定	名称	数	備考	作者	時代	所蔵
1	帝鑑図説	6冊	古活字印版 (秀頼版)	張居正撰	慶長11年(1606)	名古屋市蓬左文庫
2	重要文化財 帝鑑図換絵 [高士]	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間南側左端 戸換絵	狩野探幽筆	寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
3	重要文化財 帝鑑図換絵 [褒獎守令]	4面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間東側 換絵	狩野探幽筆	寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
4	重要文化財 帝鑑図換絵 [明弁詐書]	4面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間北側 換絵	狩野探幽筆	寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
5	重要文化財 帝鑑図換絵 [蒲輪敬賢]	4面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間西側 戸換絵	狩野探幽筆	寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
6	帝鑑図説	7冊			江戸時代	名古屋市蓬左文庫
7	帝鑑図画帖	1帖			江戸前期	名古屋博物館
8	金城温古録	1冊	御本丸編	奥村得義編	江戸後期成立 明治写	名古屋城総合事務所
9	旧国宝 彫刻欄間 断片	15点	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間戸換絵		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
参考	彫刻欄間 試作品	1点	復元本丸御殿用		平成	名古屋城総合事務所
10-1	旧国宝 水腰障子 大	1枚	名古屋城本丸御殿上洛殿		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
10-2	旧国宝 水腰障子 小	1枚	名古屋城本丸御殿上洛殿		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
11-1	旧国宝 釘隠	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具2		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
11-2	旧国宝 釘隠	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具5		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
11-3	旧国宝 釘隠	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具1		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
11-4	旧国宝 釘隠	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具7		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-1	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具26		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-2	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具67		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-3	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具47		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-4	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具75		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-5	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具11		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-6	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具77		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
12-7	旧国宝 天井社金具	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 焼損金具76		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
13-1	釘隠拓本	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 拓本173		拓本制作昭和前期	名古屋城総合事務所
13-2	天井社金具拓本	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 拓本207		拓本制作昭和前期	名古屋城総合事務所
13-3	天井社金具拓本	1点	名古屋城本丸御殿上洛殿 拓本181		拓本制作昭和前期	名古屋城総合事務所
14	昭和実測図306	1枚	名古屋城本丸御殿上洛殿 拓本24		拓本制作昭和前期	名古屋城総合事務所
15	昭和実測図308	1枚	名古屋城本丸御殿上洛殿 拓本26		拓本制作昭和前期	名古屋城総合事務所
16	重要文化財 小禽図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 111		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
17	重要文化財 椿図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 116		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
18	重要文化財 山水図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 121		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
19	重要文化財 山水図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 128		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
20	重要文化財 山水図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 130		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
21	重要文化財 飛雁図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 118		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
22	重要文化財 竹園	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 163		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
23	重要文化財 猿図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 193		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
24	重要文化財 山水図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 195		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
25	重要文化財 山水図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿一之間 天井板絵 165		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
26	重要文化財 菊文図(縁)	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 386		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
27	重要文化財 桐文図(縁)	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 524		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
28	重要文化財 桐文図	1面	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 582		寛永11年(1634)	名古屋城総合事務所
29	桐文図修理館	1枚	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 582		明治26年(1893)	名古屋城総合事務所

総計29件58点のうち重要文化財17件26点 旧国宝4件28点

(5)「家康とごはん 名古屋城でいただきます」

展示概要

会期：令和5年（2023）1月1日（日）～3月5日（日） 63日間

＊前期 1月1日（日）～2月3日（金） 33日間

＊後期 2月4日（土）～3月5日（日） 30日間

入館者数：48,420人（1日平均768.5人）

出品件数：22件

展示趣旨：

名古屋城は、徳川家康が息子義直のために建てた城である。家康は何度も名古屋城を訪れ、慶長20年（1615）には、大坂夏の陣に向け名古屋城から出陣した。その後も名古屋城は、時の將軍はじめ多くの貴人を迎え入れ、家臣を慰労する宴の場ともなった。響応が行われた本丸御殿の障壁画はじめ、食にまつわる名古屋城の遺品を紹介する。

作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面は省略した。ここに収録しないパネル・キャプションもある。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

テーマ1-1 家康と名古屋城

江戸幕府を開いた徳川家康は、尾張藩初代藩主義直の実父である。家康は、義直の居城としてこの地に名古屋城を建てた。慶長20年（元和元年・1615）4月、完成直後の本丸御殿で義直と正室春姫の婚儀が行われた。その祝宴に出席した家康は、大坂城にのこる豊臣秀頼を滅ぼすため、名古屋城から出陣し、圧勝した。大坂夏の陣である。大坂からの帰路の家康が再び泊るなど、名古屋城本丸御殿は、家康の接待所としても機能した。翌年家康が亡くなると、二代將軍秀忠や三代將軍家光が、上洛のおり名古屋城に宿泊した。その頃義直は二之丸御殿に移っており、將軍家の接待には本丸御殿が用いられたと考えられる。その後、寛永11年（1634）の家光上洛にともない、御成御殿（上洛殿）が本丸御殿に増築された。ここでは、將軍応接の儀礼や饗宴の場となった本丸御殿表書院の襖絵を展示する。

作品1「徳川家康坐像」 江戸時代前期

元和元年（1615）に豊臣一族を滅ぼした翌年、家康は病没した。没後、家康は神格化され、東照大権現という神号が宮廷から贈られた。東照大権現を御神体とする神社として久能山東照宮（静岡県）と日光東照宮（栃木県）が江戸の南北に並び立ち、さらに各地に東照宮が建立された。東照宮の総数は五百を超えるとされている。本坐像は伝来不明だが、厨子が付属しており、どこかの東照宮の御神体であったと考えられる。厳しいながらも穏やかな尊顔である。

作品2「徳川家康画像」 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

名古屋東照宮に伝来する家康画像。賛者である盛胤親王（1651～80）は、後水尾天皇の第十八皇子で、万治3年（1660）出家し、無品のまま延宝8年（1680）に没した。よって着賛はその間のこととなる。狛犬が護る神社本殿に座す神君家康を描き、金雲には金箔を裏から貼り、裏彩色を施している。構図や技法は、鳳来山東照宮や大阪城天守閣に所蔵される家康画像と同じだが、賛者は異なる。家康没後の早い時期、主だった東照宮にこのような尊像が奉納されたと考えられる。

賛「涅槃経云 汝勿啼泣 於閻浮提 或復還生 現大明神 無品盛胤親王書」

作品3「桜花雉子図襖絵」 重要文化財 名古屋城本丸御殿表書院一之間東側襖 慶長19年（1614）

表書院一之間の東面を飾っていた襖絵。表書院は、上段之間・一之間・二之間などからなる。一之間は、北側に接する上段之間より畳面が一段低く、下段之間にあたる。將軍家の人を尾張藩主が響応する場合、將軍家が座するのは上段之間で、藩主は上段之間か一之間に位置した。下位の家臣を藩主が引見する場合、藩主は一之間中央に東を向いて立ち、年寄（家老）がこの襖を開け、二之間で拝伏する家臣を一瞥し、また襖が閉じられた。

作品4「松竹禽鳥図襖絵」重要文化財 名古屋城本丸御殿表書院上段之間南側襖 慶長14年（1614）

表書院上段之間の南面を飾っていた襖絵。表書院は、大広間とも呼ばれ、公式の儀式が行われる建物である。中でも上段之間は、他四室より畳面が一段高く、表書院のうち最上格の部屋となっていた。家康など將軍家の人々が本丸御殿を訪れたり、尾張藩主が家臣を引見したりする場合、最上位の貴人が坐すのは上段之間の上座、すなわち北側であり、貴人はまさにこの襖に相對したことになる。

テーマⅠ-Ⅱ 東照宮縁起絵巻

家康は、大坂夏の陣で圧勝した翌年の元和2年（1616）4月17日、駿府城において75歳で死去した。遺体は駿府南東の久能山に埋葬された。元和3年（1617）、東照大権現の神号が贈られ、日光の東照社に改めて葬られた。家康の二十五回忌にあたる寛永17年（1640）、三代將軍家光は、幕府御絵師狩野探幽に命じて家康の事績と日光東照宮（当時は東照社）の縁起をまとめた「東照宮縁起絵巻」を描かせ、奉納した。さらに大和絵系絵師住吉如慶により複数の縁起絵巻が制作され、紀州など主だった東照宮に納められた。尾張藩では、九代藩主宗睦の代になって縁起制作が企画され、寛政6年（1794）、名古屋東照宮に奉納された。大和絵系の幕府御絵師住吉内記広行、板谷慶意広長、板谷慶舟広当の三名が住吉家の図様をもとに絵を描き、幕府右筆森尹祥が詞書を記した。幅40.0cmを数え、保存も完好。名古屋東照宮にふさわしい美しい美しい縁起であり、同宮の格別の御高配によりここに全五巻を一挙に公開する。

補助パネル「名古屋東照宮」

名古屋東照宮は、元和5年（1619）、尾張藩初代藩主徳川義直により、名古屋城三之丸に創建された。東側に亀尾天王社、西隣には別当寺院の尊寿院が並んでいた。明治8年（1875）、名古屋鎮台（のちの陸軍第三師団）が城内に設置されたため、亀尾天王社とともに藩校明倫堂の跡地である現在地に移転した。本殿は豪華な権現造りで国宝に指定されていたが、昭和20年（1945）5月14日の空襲により焼失した。現本殿は、昭和28年（1953）、建中寺にあった義直正室高原院春姫の御霊屋を移築したもので、愛知県有形文化財に指定されている。春姫の生家紀州浅野家の家紋である違鷹羽紋の金具を付けた、壮麗な格天井が遺されている。また戦前まで4月17日の家康命日に斎行されていた東照宮祭礼は、神輿と山車九両が城下を練る大祭であったが、戦災で山車が焼失したため、4月16日・17日に神事が挙行されている。現所在地は名古屋市中区丸の内二丁目。

作品5の1「東照宮縁起絵巻」巻一【家康誕生】

寛政6年（1794）名古屋東照宮蔵

縁起は、松平広忠の妻お大の方が鳳来寺に参詣して懐妊の霊夢を見、天文11年（1542）岡崎城で家康を出産するところから始まる。画面右側では、家臣が墓目という音の鳴る矢を射て悪霊を封じている。左端では、出産を終えたお大の方が白い搔卷にくるまれ休んでいる。侍女も白装束で、屏風には白の胡粉と銀で松竹が描かれている。清浄な白により妖魔を退ける風習である。中央で、乳母に抱かれた誕生直後の家康を前に、父広忠が手を広げ喜んでいる。他の東照宮縁起諸本に比べ、表情が豊かである。

作品5の2「東照宮縁起絵巻」巻二【勅使饗応】

寛政6年（1794）名古屋東照宮蔵

巻二は、関ヶ原戦と大坂夏の陣の勝利により家康が天下を掌握し、元和2年（1616）、太政大臣宣下を受けるまでを描く。右は、駿府城を訪れた後水尾天皇の勅使三人が大広間下段之間に並び、上段之間に座す大御所家康と二代將軍秀忠に挨拶する場面。その左は、場を替え秀忠が勅使に饗応の膳をふるまう場面。海山の御馳走を高く盛った本膳・一の膳・二の膳がならぶ。二の膳には、大きな伊勢海老がのっている。床の間には掛軸と立花が飾られている。

作品5の3「東照宮縁起絵巻」巻三【家康他界】

寛政6年（1794）名古屋東照宮蔵

巻三の冒頭は、元和2年（1616）4月17日の、駿府城での家康臨終。上畳に伏す家康は、小袖で身を覆われている。日光東照宮本など他の東照宮縁起の多くが土気色をした家康の顔を描くのに対し、名古屋東照宮本は身体全体を隠している。名古屋東照宮本の発注者である九代尾張藩主宗睦は、すでに実子を全て失っており、家康・義直と続いた血が絶えることを自覚していた。家康への畏敬が、本場面に吐露されているのかもしれない。

作品5の4「東照宮縁起絵巻」 巻四【家光奇瑞】

寛政6年(1794) 名古屋東照宮蔵

寛永14年(1637)、三代将軍家光は、二代将軍秀忠が建てた江戸城紅葉山東照社の改築を決め、新たに用地を定めた。そこに二羽の鶴が飛来し東の方に飛び去った。この奇瑞を目にした人々は、家康と家光をいっそう讃えたという。名古屋東照宮本だけでなく、寛永年間(1624~1644)期に家光の命により制作された諸本に描かれた逸話で、もちろん史実ではない。家康の後継者たる家光を称賛するための創作と考えられる。

作品5の5「東照宮縁起絵巻」 巻五【聖地日光】

寛政6年(1794) 名古屋東照宮蔵

巻五は、日光山中の中禅寺湖や華嚴の滝などの景勝地を描き、日光が古来聖地であり東照大権現を祀るにふさわしい土地であることを説く。末尾に長文の跋と筆者の落款があり、天明8年(1788)尾張藩九代藩主宗睦の命により縁起制作が開始されたこと、寛政6年(1794)に完成し、同9年(1797)名古屋東照宮に奉納されたこと、住吉家に伝来する下絵をもとに描いたことが記されている。

テーマI-II 殿のお勝手

慶長20年(1615)に完成した初期本丸御殿にも当然台所があったが、寛永11年(1634)の上洛殿増築時に壊された。ここに展示するのは、上洛殿の北側に併設された上御膳立所(上御膳所)の襖絵である。上御膳立所は、貴人の膳を調える部屋で、北西を襖や板壁で区切り上段之間とし、それ以外の鍵手部分を上之間と称していた。上之間の東に御膳場を設け、桧に黒漆塗という贅沢な縁で囲炉裏を切っていた。御料理之間と上台所が別棟として北側にあり、江戸時代の記録『金城温古録』によれば、上台所で具材の下拵えをし、御料理之間で煮炊きし、御膳場で温め直し盛り付けた。出来上がった膳を上段之間に置き、期を見て貴人の前に運んだという。上段之間は窓のない小部屋で、内側からのみ鍵がかかる。陪臣がここに控えて膳を守り、宴の始まりを待ったと考えられる。なお、御殿には下台所と大勝手もあり、貴人以外の者の料理はそこで作った。

作品6「花卉図襖絵」 重要文化財 名古屋城本丸御殿上御膳所上段之間南側襖 四面

寛永11年(1634)

上御膳所上之間は二十一畳からなり、北西角を区切り、畳面を一段上げて上段之間としていた。上段之間は、江戸後期までは東西二間南北二間半の十畳間であったが、明治以降、南北一間半の六畳間に改変された。この襖絵は、上段之間の南面の襖絵。穏やかな風景の中に、とろろあおい、つつじ、くちなしなどの初夏の花木を配している。とろろあおいは八重咲と一重咲を描き分けている。

作品7「枝垂桜図襖絵」 重要文化財 名古屋城本丸御殿上御膳所上段之間東側襖 二面

寛永11年(1634)

しだれる桜を描く大型の襖絵で、二面しか現存しない。昭和16年(1941)に撮影されたガラス乾板写真にこの二面が写り、「上御膳所上之間上段の間内部東面襖絵」と記されている。戦前には上段之間と上之間の境の上段之間側(東側)にあったことになる。しかし、桜の大枝が中央でずれ、二枚ともに縦に紙継があるなど異例で、上段之間南側襖絵(6)との整合性もない。『金城温古録』によれば、江戸期には枝垂桜図襖四枚が上之間側にはまっていた。つまり、明治以降の上段之間の縮小にともない、四枚の襖の中央と左右端を切り詰め、二枚に仕立て直し、裏側にはめたと推定できる。

作品8「鴉花卉図襖絵」 重要文化財 名古屋城本丸御殿上御膳所上之間西側襖 二面

寛永11年(1634)

右側に山茶花とおぼしき白い花と岩、左面に二羽の鴉を描く。第二次世界大戦の空襲により本丸御殿が襖絵以外全焼する前の昭和16年(1941)頃に撮影されたガラス乾板写真には、上之間東側襖の外側として本襖が写っている。しかし上之間南側外側襖(9)との連続性がなく、明治期に大きな改変を受けたと考えられる。

作品9「梅竹雀図襖絵」 重要文化財 名古屋城本丸御殿上御膳所上之間北側襖 四面

寛永11年（1634）

水際で大きく屈曲する白梅と竹林を描く。竹林には雀がひそんでいる。昭和16年（1941）頃に撮影されたガラス乾板写真から、当時は、上段之間と上之間の境の北側にはまっていたことがわかる。しかし、大きく破損し修理をした跡があり、明治以降大規模な改変を受けたと考えられる。

テーマⅢ 殿のごちそう

寛政10年（1798）4月、十一代幕府將軍家斉の甥にあたる一橋徳川家の愷千代（1793～1850）が、九代尾張藩主宗睦（1733～1799）の養子となった。宗睦は実子や孫、甥など血縁の後継者すべてに先立たれており、やむなくしての養子であった。同年5月4日、祝の宴が、江戸市谷にあった尾張藩上屋敷で行われた。御奥で供された膳を囲んだのは、当主宗睦、六歳の愷千代、五年前の寛政5年（1793）に早世した宗睦養子治行の正室であった聖聡院、宗睦養女琴姫の四名。内々の宴であったが、三汁十菜という正規の料理が供された。この翌年宗睦は没し、愷千代はわずか七歳で十代藩主斉朝となった。残されていたメニューから名古屋城では膳の一部を再現し、大天守閣（現在閉館中）三階で展示していた。今回は約五年ぶりの公開となる。

作品10「葵紋付段替文銀椀」 江戸時代中期 名古屋城振興協会蔵

葵紋をつけた銀椀。蓋付の椀四合と蓋のない椀一口のあわせて9点が木箱に入って伝来しており、飯・汁・煮物・膾・香の物からなる本膳用の器と考えられる。木を挽いてつくった椀に薄い銀板を貼っており、手にすると意外に軽く温かみがある。

模様は、雷文・木瓜文・唐草文・七宝繫文・紗綾形文の段替わりとし、極小の魚々子で空間を埋めている。大名家にふさわしい、贅沢にして優美な椀である。

作品11「祝膳品書控」 平尾健氏寄贈資料 寛政10年（1798） 名古屋城総合事務所蔵

寛政10年（1798）5月4日、一橋徳川家の愷千代（1793～1850）が九代尾張藩主宗睦（1733～99）の養子となり江戸市谷の尾張藩上屋敷に転居したことを祝う宴が、同屋敷で開かれた。最初座敷と表御座之間で盃を干す三献の儀が行われ、続いて大奥に移動し、刺身、煮物、汁物、焼魚などのさまざまな料理が季節の野菜や薬味とともに供された。締めくくりは、落雁、葛煎餅、唐夏目（干しナツメ）であった。

作品「祝膳複製」《特別出品》

寛政10年（1798）4月、江戸の尾張藩上屋敷で行われた、のちの十代藩主斉朝の養子入りを祝う食膳の一部を復元しました。本膳の膾（生の魚）は、赤貝と鯛のお刺身に細く切った栗や薬物をあしらい、金柑の実を添えています。汁は、四角に切ったはんぺいに、ゴボウと葉のついた小大根を入れたおすまし。三の膳の汁は赤味噌で、貝割菜を散らしています。お向うは鰻と鯛の焼物。鰻は、お武家ですから開かずに筒切りです。魚を主体に、季節の薬味や野菜をたくさん使った、いかにもおいしそうな御膳です。

翻刻 ◆表記方法は原文とは異なる

外に 御手箱

御盃土器 木地御三方

銀御銚子 同

付紙 御取肴 寿るめ 御文鎮置 同

御下捨土器 同

愷千代様

三汁十菜御料理

御本

御膾 赤貝 たひ しらが栗 ぼう風 金かん

御汁 しきし半へん かわこほう 葉付大こん

御香之物 華瓜 浅瓜 華茄子 華しほ 枝山椒

御煮物 やききす 角ふ いんけんたけ かわたけ 長芋

御飯

御二

丸杉箱 みとり 石かれい 茄子 岩茸 赤味噌

御猪口 梅かへ

御汁 端白 ゆず

杉小角 御焼物 片平 相並 付やき

御三

南天熊笹 杉地紙

御刺身 子付 細作 鯉 平作り 三白 白てん 華れんこん わさひ

御猪口 いり酒 御汁 薄赤味噌 かいわりな

御坪皿 御煎物 くしこ さとふ ふき

御向

御焼物 たひ

御引物

付紙 大板かまほこ

御吸物 かれい めうが

御盃塗

御銚子

御かは魚 うなぎ

御煎物 きす 木耳

御湯

御水

御茶漬 摘羊官 水くり しいたけ 杉御やうじ

御皿菓子 紅落がん 唐夏目 葛せんべい 白御やうじ

やす千代様

聖聡院様

琴姫様

御銘々様御口

二汁七菜御料理 薄小盤

右御献立之儀ハ三汁十菜之内にて印之分

差上之

御茶受御皿菓子分ハ別にて差上候

御茶受 麻地飴 長芋 川たけ 杉御やうじ

御皿菓子 金華 源氏 きく

補助パネル「本丸御殿の本畳」

平成復元本丸御殿の表書院納戸之間のために制作された本畳。本丸御殿の畳の寸法は、部屋により少しずつ異なるが、縦六尺三寸横三尺一寸五分（約192.0×95.0cm）を基準とする。今の中郡地方で一般的な畳（中京間。京間より小さく江戸間より大きい）が縦六尺横三尺（約182.0×91.0cm）であるのに対し、一回り大きい。稲藁を縦横にきっちりと配して麻糸で縫い固め畳床とし、熊本県八代産の畳表を縫いつけており、厚みは7cm。JAS規格で畳表・床ともに特上・特級の本畳はおおむね5cm厚さで重さ28～34kgだが、この畳は実重量で38kg。本当に重い。吸湿性にすぐれ、夏は涼しく冬は比較的暖かい。現在九割以上の家庭で用いられている畳は、ポリスチレンフォームなどをはさんだいわゆるスタイロ畳で、軽い。なお、名古屋城では、本丸御殿のみならず天守にも畳を敷き詰めていた。その寸法は本丸御殿よりさらに大きく、六尺六寸（198.0cm）。名古屋城は、畳においても別格だったのである。

作品「復元本丸御殿の本畳」《参考出品》

平成の本丸御殿復元工事は、特別史跡名古屋城の中での工事であったため、史実に忠実であることが求められました。そのため、畳は最上の仕様の本畳とし、江戸時代に敷かれていた数をすべて作成しました。ただし運営上外さざるを得ない畳もあり、ここに展示した二枚は、外して保存されてきた畳です。復元本丸御殿では、車椅子のお客様などの便宜のため、動線上の本畳にはマットを敷いております。ここで、本畳の手触りをお楽しみください。ただし、座らないでくださいね！

テーマⅠ-Ⅳ 君臣作法

お城では、ことあるごとに客人や家臣に酒食が出された。お酒にはじまり、刺身や焼魚、煮物や汁物が幾皿も出され、果物と菓子で締めくくられた。そもそも食事をともにすることは、空腹を満たすだけでなく、縁を確認し絆を深めるための重要な儀式であった。よって食べ方や配膳方法には、すべて細かな仕来りがあり、給仕する側もされる側も、作法を覚えるだけで大変だった。ここでは、「進饌要覧」という江戸時代の尾張藩における給仕の手引書をもとに、その一端を紹介する。給仕者のまさに一挙手一投足まで細かく文字で説明し、部屋での立ち位置や移動経路も図示している。同じような典札図が、江戸城など他の城郭でも多数作られており、江戸時代の武士が、先例や仕来りを間違えないよう、びくびくしていたことがうかがわれる。

補助パネル「進饌要覧」

「饌」とは、神あるいは貴人に供えられる食物のこと。「進饌要覧」は、尾州徳川家の諸行事において藩主や客人に饌を進めるときの配膳作法の説明書。尾張藩士清原重巨（1779～1847、号舎人）による天保9年（1838）の序文によれば、新しく給仕役となった藩士の手引きとなるよう先例書を引きつつ編集し、江戸と尾張に置くという。現在、名古屋市蓬左文庫に十三巻本と十八巻本の二類が伝えられている。十三巻本は、年中行事での配膳を行事ごとに記し、部屋の平面図を添付する。十八巻本は、この十三巻に、天保十四年元旦などの献立実例を記録する付属四巻・別巻一巻を添えるもの。十三巻本・十八巻本ともに、天保九年以後の作法の変更を注記している。徳川林政史研究所にも十八巻本が所蔵されている。重巨は、珍植物を挿絵入りで解説した『草木性譜』『有毒草木図説』（文政10年）の編者としても知られており、学者肌の藩士であった。

作品13の1「進饌要覧」 十三冊のうち第一冊

天保9年（1838）名古屋市蓬左文庫蔵

「進饌要覧」第一冊は、基本的な作法を記す。「御敷居を踏べからず」（敷居を踏むな）、「空手にて出入の節は手を前に置くべし、右の手を下タ、左の手ハ上エに、指先き重ね」（何も持っていない時は、右手を下にし左手を重ね、前でそろえよ）、「畳の縁の上は歩くな、部屋に入る時は下手の足から入れ」など、実に細かい。給仕役となった藩士は、殿の御前で我身をいかに処すべきか、頭を悩ませていたのである。

作品13の2「進饌要覧」 十三冊のうち第二冊

天保9年（1838）名古屋市蓬左文庫蔵

第二冊「御熨斗鮑御昆布飾方之事」では、熨斗鮑と昆布という、武家作法での基本的なアイテムについて説明している。熨斗鮑は、アワビの肉を薄く延ばし干したものだ。古くから神饌として用いられ、武家社会では武運長久の縁起物とされた。現在の熨斗鮑は、紙で包んだ熨斗鮑が型式化したものである。昆布も長寿に通じる縁起物で、勝栗とともに元旦や出陣儀式で用いられた。

作品13の3「進饌要覧」 十三冊のうち第十一冊

天保9年（1838）名古屋市蓬左文庫蔵

第二冊の「御熨斗鮑御昆布飾方之事」に対応する図。熨斗鮑や昆布、それらを乗せる三方を図示する。熨斗鮑は、差し渡し一尺一寸三分（約33.0cm）という大きな三方からはみ出すほど長い。盃を乗せる嶋台や、清浄な酒杯であるため一度しか使わない土器の図もある。膳の注記文字が逆になっており、藩主や客から見た図となっている。

作品14の1「進饌要覧」 十八冊のうち附録 亨

天保9年(1838) 名古屋市蓬左文庫蔵

「進饌要覧」十八冊本は、元亨利貞という付録四冊を加え、天保9年から14年までに江戸藩邸や名古屋城二之丸御殿で出された献立を記す。料理名や食材名だけでなく、切り方や味付けも記している。藩主や家臣がどのように移動したかの記述もある。各部屋の使われ方や襖の開け閉めの実際が知られる、きわめて貴重な資料である。

作品14の2「進饌要覧」 十八冊のうち附録 元

天保14年(1843)か 名古屋市蓬左文庫蔵

付録の「元」では、天保11年(1840)2月、十二代藩主となった斉荘が、本丸御殿や天守を初めて巡覧した時の次第をまとめている。本丸御殿に入った斉荘は、御書院(上洛殿)上段之間に置かれた上畳に着座した。数熨斗をのせた三方が右方に持ち出され、斉荘手ずから家臣に熨斗を一束ずつ下げ渡した。その後斉荘は小天守を経て大天守に登り、五重目(五階)の上段之間で手熨斗の儀が繰り返された。

作品14の3「進饌要覧」 十八冊のうち附録 貞

天保14年(1843)か 名古屋市蓬左文庫蔵

付録第四冊「貞」は、「御本丸御座之間」として、天保11年(1840)の斉荘による上洛殿上段之間の熨斗下賜を図示する。平面図中の左上の部屋が上段之間。斉荘は中央の上畳二畳に南面して座し、その左に刀懸が置かれ、前に熨斗鮑を載せた三方二口がある。背後には小姓が五人座っている。熨斗鮑を藩主から与えられる年寄は、一之間二之間の廊下際に控えている。細かい文字の間から、当時の情景がいきいきと伝わってくるのである。

作品14の4「進饌要覧」 十三冊のうち第三冊

天保9年(1838) 名古屋市蓬左文庫蔵

「年頭御礼御流頂戴之御次第」は、元旦に行われる藩主と家臣の儀礼で、主従関係を確認するための最も重要な年中行事であった。場をかえては御目見や手熨斗、三献の儀が繰り返された。まず二之丸御殿の中奥である中御座之間での儀礼がある。それが終わると、藩主は同御殿の表である書院に移動し上段之間に着座する。そこで、熨斗鮑を家臣に藩主手ずから与える手熨斗の儀が行われる。

作品13の4「進饌要覧」 十三冊のうち第三冊

天保9年(1838) 名古屋市蓬左文庫蔵

さらに藩主は広間に移り、上段之間に入ってから、下段之間(一之間)に降りる。隣接する鳳凰之間との間の襖を年寄(家老)が開ける。大番組以上の藩士や御目見の町医師などが拝伏する中、小姓が襖を閉め、藩主は上段之間に戻り褥に着座する。年頭挨拶は二之丸御殿の広間で行われたが、同広間の間取りは本丸御殿の広間(表書院)の間取りとほぼ同じで、本丸御殿でも同じような襖の開け閉めが行われていたと類推でき、きわめて貴重な記述である。

「御広間 渡御御下段立御鳳凰之間御襖御年寄披之、町医師共拝伏御小姓御襖閉之」

作品14の4「進饌要覧」 十八冊のうち第十一冊

天保9年(1838) 名古屋市蓬左文庫蔵

「年頭御礼御流頂戴之御次第」のうち「御広間御流」を図示する。二之丸御殿の上段之間に藩主の座があり、下段之間(鳳凰之間)の間に「御簾」の文字があり御簾が掛けられていたことがわかる。右側の巢鷹之間の間には「襖シマリ」との注記があり、御目見の儀式以外は閉められていたことがわかる。広間の右端の虎之間(本丸御殿表書院麝香之間に相当する大部屋)に居並ぶ馬廻組には、殿の姿はまったく見えなかったであろう。

作品14の6「進饌要覧」 十八冊のうち別冊

天保10年（1839）以降 名古屋市蓬左文庫蔵

別冊「上使御饗応御膳部」は、天保10年（1839）3月に逝去した十一代尾張藩主斉温の弔問として、同五月に名古屋城を訪れた將軍の使者（上使）に、隠居中の前藩主斉朝がふるまった膳を記す。本膳の「膾 たひ きす 木耳 せうか くり 金柑」・「汁 つみ入 皮牛蒡 才椎茸」は、きくらげや生姜を添えた鯛とキスの刺身に、魚のすり身をいれた澄まし汁。弔問といいながら生魚を多用した豪華な三汁十菜であった。

作品13の5「進饌要覧」 十三冊のうち第十二冊

天保9年（1838） 名古屋市蓬左文庫蔵

代替わりなどの時に来城する上使の饗応について記す。饗応の場は二之丸御殿の書院であったが、上段之間は使わず藩主・上使ともに一之間に着座する原則であり、『金城温古録』にもその旨が記されている。飯、吸物、煮物、刺身、香の物からなる本膳に、二の膳、三の膳、お向うとして焼物や刺身が続き、料理がかわるごとに銚子に入った爛酒がつがれる。

作品13の6「進饌要覧」 十三冊のうち第六冊

天保9年（1838） 名古屋市蓬左文庫蔵

上使饗応では、書院での三汁十菜ののち、鎖之間に移って茶事が行われた。まず、羊羹、おぼろまんじゅうなど五種類の主菓子を盛った縁高の菓子器が出され、薄茶が点てられた。次に、後段として「御葛切」が出された。小皿にもられ、蓼と辛子、出汁がそえられており、醤油味のところてんに似た一皿で、延々と続いた御馳走のあとの口直しであった。

作品14の7「進饌要覧」 十八冊のうち第六冊

天保9年（1838） 名古屋市蓬左文庫蔵

二之丸御殿鎖之間における上使饗応では、薄茶のあと再び爛酒の入った銚子が出され、竹輪麩・椎茸・しんじょの煮物や鯛の天麩羅が次々に登場する。さらに「松風」「露みどり」「源氏香」という干菓子が出され、煎茶が最後に出て、酒、料理、酒、料理、菓子、茶、酒と繰り返された膳がようやく終了するのである。

作品14の8「進饌要覧」 十八冊のうち第十二冊

天保9年（1838） 名古屋市蓬左文庫蔵

「上使饗応」の五番目の図。右側が二之丸御殿の鎖之間（右が西）で、□が藩主と上使の位置を示す。藩主と上使はやはり上段之間ではなく二之間に坐している。たくさんある▲が、酒や菓子を給仕する者や控えの者の位置である。

作品13の7「進饌要覧」 十三冊のうち第五冊

天保9年（1838） 名古屋市蓬左文庫蔵

「近衛左府様御来臨 表御座之間御上段御書院床之方近衛様御着座 御前御張台下之方」と別頁にあり、文化十二年に近衛基前（正妻は宗睦の養女静子）が尾張藩江戸上屋敷に来臨したときの献立を記している。基前は表御座之間上段之間の床之間前、藩主斉朝は張台構の下手側に着座した。本膳のお造りはキスと赤貝で、彩りは青ほおずき。お平ははんぺいと筍の薄葛仕立。初夏の献立である。二の膳には、くるみを甘辛く炊き花かつおをかけた猪口が添えられた。

作品13の8「進饌要覧」 十三冊のうち第七冊

天保9年（1838） 名古屋市蓬左文庫蔵

尾張藩江戸上屋敷の「年頭御老中御招請御式之御次第」を記す。本膳は、鯛や赤貝の刺身、葉付き小燕や嫁菜の澄まし汁、蒸した白魚と豆腐に葛をひきとろみをつけた煮物、香の物、飯。二の膳は敷味噌仕立の鮫鱈で、皮と肝を添える。冬の献立である。上屋敷は、市谷（東京都新宿区）にあり、楽々園という回遊式庭園もあった。今は防衛省の敷地になっており、高塀の中に庁舎や隊舎はじめ市谷記念館や防衛研究所など多くの施設が建っている。

作品13の9「進饌要覧」 十三冊のうち第八冊

天保9年(1838) 名古屋市蓬左文庫蔵

「御帰国之節御老中御招請御式之御次第」とあり、帰国にあたり幕府老中を市谷屋敷に招く時の膳の例とわかる。表御座の間で行われた宴である。本膳の汁は大根や生椎茸の白味噌仕立て。煮物はしんじょとくしこ(干した海鼠)の葛引き。二の膳の汁は鯛の澄まし汁で木の芽が添えられ、杉箱に麩入り卵焼きが盛られていた。なお三の膳の汁物は赤味噌で、口の肥えた老中向けなのか、変化に富む献立となっている。

テーマⅠ-Ⅳ お城でお菓子

江戸時代、饗応の締めくくりは茶と菓子であった。茶は、濃茶、薄茶と続き、煎茶が出ることもある。濃茶の前にお茶請けとして果物や味の濃い煮物が出され、さらに蒸菓子(羊羹や饅頭などのいわゆる主菓子)と干菓子の盛り合わせが供される。尾張藩には、干菓子と蒸菓子の見本帳が数種類伝来し、尾張藩の凶書を納める名古屋市蓬左文庫に所蔵されている。このうち小型本は大型本の写しと考えられる。菓子にはみな銘があり、ある程度普遍的な菓子であったことがわかる。銘は季節の草花、景物、古典文学などにちなんだ優雅な名前で、羊羹の「夜の梅」は今も作られている。白餡、小豆餡などの材料や、練る、焼くなどの作り方も記されており、それらは、今の和菓子とほとんど変わらない。カステラ、有平糖など、南蛮渡来の菓子もよく供されていた。季節感にあふれ美味しそうな小世界を、小さな図からお楽しみいただきたい。

作品17の1「御蒸菓子御見本」

江戸時代後期 名古屋市蓬左文庫蔵

尾張徳川家に伝来した蒸菓子の見本帳。菓子銘のいろは順で羊羹や饅頭を列挙する。右頁は「よ之部」。「養老羹」は玉子を入れた練羊羹らしい。「夜の梅」は、今とは異なり、白餡に米粉を混ぜ蒸して揉みこなし「こなし生地」で白梅の花を作る。左頁は、「た之部」。「達磨餅」(真薯製・餡入)・「玉椿」(かすてら製・中真薯餡)・「大徳寺金飴」(白餡製・中求肥)、「大根餅」(真薯製・餡入)。玉椿は、つくね薯入り白餡をカステラで巻く。

作品16「御菓子見本」

江戸時代後期 名古屋市蓬左文庫蔵

干菓子や焼菓子の見本帳。右端の丸い菓子は「たまご煎餅」。玉子製、平やきとあり、卵入りの種を薄く焼いた甘い煎餅。「濃染糖」は、八重咲きの紅梅に雪が降る様子を煮詰めた砂糖をかけて表わす。左頁右側は「玉章」。玉章は手紙のこと。白玉粉と水飴を練った求肥餅を細長く切り、恋文のように折る。左端の紅白の砂糖菓子は「ほのぼの」。砂糖を煮詰めた有平糖を表裏で紅白に染め分け、朝の曙を示す。

作品14の9「進饌要覧」 十八冊のうち附録 利

天保14年(1843)か 名古屋市蓬左文庫蔵

天保14年(1843)11月21日から二泊三日で十二代藩主齊荘が犬山城を巡覧した時の記録。犬山城主は尾張藩付家老の成瀬正住。お成りではなく巡覧とし、料理は尾張藩側が用意した。初日の締めくくりは「玉子煎餅」などの干菓子、「黄外郎」、「紅白金鱈」などの蒸菓子、「夜の梅」という羊羹。この巡覧には尾張藩の御用絵師が同行した。記録画を残すための下命と思われる。

作品15の1「御干菓子御見本」

江戸時代後期 名古屋市蓬左文庫蔵

干菓子の見本帳で、いろは順。右上は「紅葉落雁」。「源氏物語」第七帖「紅葉賀」で、光源氏が頭中将と共に朱雀院行幸のため紅葉をかざし青海波を舞ったことにちなみ、源氏がかぶった鳥兜を紅葉の上に置く、凝った意匠の落雁。「源氏物語」の素養がないと理解しにくい。その下は満月を表す「最中月」。最中は、満月にちなむ菓子名。左頁は「せ之部」で、石竹、千成瓢箪、雪中花、青海波、先家松葉という砂糖菓子。

作品17の1「御干菓子絵図」

江戸時代後期 名古屋市蓬左文庫蔵

うど、紅苺、かきつばたなどを有平糖で作った干菓子。有平糖は、南蛮渡来の甘いお菓子で、砂糖に少量の水飴を加え、火にかけて練り上げる。熱い内なら様々な形が作れるが、高い技量とセンスがいる。江戸時代後期の名古屋城下において、菓子職人たちの技術がすでに完成の域に達していたことが、この図からもうかがわれる。

作品17の2「御干菓子絵図」

江戸時代後期 名古屋市蓬左文庫蔵

右は干菓子の「清涼糖」。左頁は「御蒸菓子」。右の茶色の饅頭は「冬の峯」。小豆餡に米粉（上新粉）や道明寺粉を混ぜ裏ごした時雨種で白餡を包み、上へ大和芋をすりおろした薯蕷をかけ蒸す。冬枯れの山に雪が降る景である。左の「雪の窓」は、桃色に着色した道明寺で小豆餡を包み、薯蕷種を裏漉した朧をかける。道明寺は餅米を蒸してから干しアルファ米化したもの。雪の降る夜、ほんのり明るい窓を表す。

作品18「御干菓子之図」

江戸時代後期 名古屋市蓬左文庫蔵

右から、「末広香」・「あやせ香」・「御所車」・「大和香」。御所車は有平糖か。それ以外には「形無し」の付箋がはられており、みじん粉や和三盆などを木型に詰めて押し出す「打物」や「押物」と考えられる。今の干菓子は淡い色が主流だが、見本帳では鮮やかな色付がされている。昭和の頃までお菓子には、心浮き立つような華やかさがもともとめられていたのである。

テーマⅤ お城でおよばれ

嘉永6年（1853）5月、驚くべきことに、数十名の町人が名古屋城の御深井丸御庭に呼ばれ、接待された。尾張を代表する商人や豪農で、清須越しの家も多かった。財政難に直面した十四代藩主慶勝（慶恕）は、それまでも莫大な調達金を差し出していた町人に対し、一層の調達を求め、多額な金を申し出た関戸家、伊藤家などの町人を5月3日と9日の二度に分けて名古屋城に招待したのである。調達金が返済されるはずがなく、接待は、「町人からの寄付の申し出に対するお殿様の慰労」という事になっていた。本件は水野正信編「青窓紀聞」（名古屋市蓬左文庫蔵）にも記録されているが、津島の大橋家に、接待された当主武左衛門による記録が伝来している。御馳走や庭のスケッチもあり、名古屋城にかかわる絵画としてきわめて貴重。また当主は、前代末聞の冥加と喜びつつも、借金帳消を冷静にとらえており、当時の世相を語る一級資料となっている。

作品19「嘉永六年藩侯御招待ノ時ノ記録」

嘉永6年（1853） 個人蔵

嘉永6年（1853）5月9日、津島の旧家である大橋家当主の武左衛門は、藩主慶恕のもとに依り多額の調達をした返礼として、他の献金者とともに下御深井御庭での遊宴に招待された。広い庭を案内され、藩主直々に声をかけられ、瀬戸茶屋で御馳走を出され、掛軸を下賜された。料理を持ち帰るための重箱も用意されており、縄でしばった重箱をぶらさげ掛軸を肩にかついで夜半帰路についた。汁物以外には手を付けず家族への土産としたかと想像される、名誉な一日であった。

作品19「嘉永六年藩侯御招待ノ時ノ記録 付属 御用札」

嘉永6年（1853）か 個人蔵

「御勝手御用達格 大橋武左衛門」と墨書された木札。表には「御勝手方 御勘定所 御用」と書かれ、「勝」の焼き印が押されている。「嘉永六年藩侯御招待ノ時ノ記録」とともに大橋家に伝えられてきた。一般的な御用札（鑑札）より大きく、嘉永六年の御庭拝見の時に用意された特別の御用札と考えられる。

補助解説【下賜された軸】

大橋武左衛門は、下賜の軸について「御軸 鄭倍筆 拝領被仰付候」と記している。また「青窓紀聞」は、「花鳥 唐画 鄭陰」としている。鄭倍・鄭陰という画家は知られず、鄭培のことと思われる。鄭培は、中国清代の南蘋派という流派の画家で、緻密な花鳥図を得意とした。尾張藩は南蘋派の作品を好んで購入しており、嘉永年間には南蘋派の画家を御用絵師にも登用していた。よって鄭培の花鳥図が武左衛門に下賜されて不思議はない。ただし「青窓紀聞」の編者は鄭培を知らず、また武左衛門は書き間違えたか、あるいはやはり知らず、落款（画家のサイン）を読み間違えたのであろう。

翻刻【瀬戸御茶屋での料理】

御罷附 梅の椀 白味噌 実さんしょう
挽目折敷 大鯉大筒切
御硯蓋 海老長いも 大蒲鉾
きくらげ 新生姜 鯛小串
巻玉子 已上七種
御鉢肴 大鯛焼付四枚
大鉢 江戸表 すし
大井 五月豆 すし物
御吸物 御染 順才 すまし
大平 鱧長焼
造身 鮎 みる
とさかのり
木瓜
かんでん

御罷附 吸物之図
指椀
挽目折敷
鯉大筒切如此
蓋上るほど也

鯉大筒切之図
何れも
不捌にて
開てハ
無之候

補助解説【向付の吸物の図】

ぶつぎりにした大きな鯉が蓋つきの碗に入っており、大きすぎて蓋が持ち上がっていた。武家であるため、鯉はさばいていない。

補助解説【下御深井御庭の荒増図】

左端に「紅葉矢来・茅庵御門」とある。大橋武左衛門ら町人一行はここから庭に入った。蓮池の周囲を小道が巡り、竹長押茶屋、瀬戸茶屋、松山茶屋、御二階などの茶屋が点在する。御庭焼である御深井焼を焼いた「焼物釜 ((マ>))」(窯)も右端にある。「石燈籠千余 手水鉢 数不知」と注記されており、数えきれないほどの石燈籠と手水鉢があったことがわかる。さらに、これらの見所を残らず拜見したとあり、武左衛門が実際に見た景色の真景図（写生図）であることが確認できる。

補助解説【瀬戸茶屋の見取図】

瀬戸茶屋は、北西角に上段之間があり、その南の大座敷が蓮池に張りだしていた。招待された一行は、東側の床之間付き玄関から入り、大座敷で御料理を頂戴した。玄関脇には石灯籠が据えられ、奥に芭蕉が植えられていた。『金城温古録』によれば、瀬戸茶屋は古くからの藩主饗宴の場であった。また同書は嘉永六年のこの調達について、「(藩主の) 賢明英断を感じ奉った豪農富商からの献金の願いを聞き召した藩主が、優れたるを召して酒食・宝物を下した」と記している。あくまでも、町人からの自主的な献金申出とされていたのである。右が松山茶屋の見取図。図の下方が東。東端に懸作りの御涼所があり、その西に上段之間があった。上段之間の南に続く広間の西側に「古法眼極彩色」という注記があり、狩野派の名手永徳(あるいは元信)筆と伝承される極彩色の襖絵(あるいは壁貼付絵)があったことがわかる。ただし『金城温古録』は「北御襖、雪の松原の絵」としており、今後の検討を要する。左は竹長押茶屋の図。現在弥富市に移築されている同茶屋の間取りと異なっており、今後の課題となっている。

テーマⅠ-Ⅳ 榎の木伝説

名古屋城には、「実に渋がなく人を養う霊樹」とたたえられた木がある。ここ西の丸御蔵城宝館の南面にそびえる榎の木である。榎の木は雌雄別株の針葉樹で、成長はきわめて遅い。4月頃葉先に小さな花が咲き、緑色の実がなる。一年半かけて実は熟し、翌年の9月頃自然に落ちて割れ、中から固い殻が現れる。この頃は深い森のような芳香に一带が包まれる。殻の中の薄皮に包まれた種が、食用となる。一般の榎は渋抜きしないと食べられないが、名古屋城の榎は、殻のまま軽く炒るだけでえぐみがとれ、一年寝かせればさらに渋が抜ける。油分を多く含むため揚げたような歯ごたえと香ばしさがあり、木の実として最上の風味という。江戸時代後期に編まれた『金城温古録』に、名古屋城築城以前からある老木で、渋がないことが記されている。この記述を指定理由として昭和7年(1933)、国の天然記念物となった。同20年5月の空襲で被災したが、生き延び、名古屋市に所在する唯一の国指定天然記念物となっている。

作品20「出陣之心得之事」

江戸時代中期か 名古屋市蓬左文庫蔵

金銀の砂子や切箔を密に撒いた華麗な料紙に、金泥で界線を引き、出陣の心得や作法を記す。相似た内容の出陣作法書は多数あるが、このように贅を凝らしたものは珍しい。鎧を運ぶ櫃には鯉節(勝男節)を入れておけば必ず勝つとか、茶は勝軍木(ぬるでの異名)の千切りと思って飲めなど、縁起担ぎの文が多い。勝栗は、お守りとして胸元におさめるべきで食うべからずという記述もある。江戸時代の武家の食が必勝祈念と不可分であったことを示している。

作品21の1「金城温古録」第二冊

万延元年(1860)成立 明治写 名古屋城総合事務所蔵

金城温古録は、尾張藩士奥村得義が名古屋城の建築や歴史をまとめた大著。原本は名古屋市蓬左文庫等にあり、名古屋城には明治期に宮内省が作った写本が伝えられている。巻二に「御城地取大体」として慶長の築城期における図を乗せ、榎の木について「慶長大営の前、既に民居の物にして、幸いに今まで遺伝せらる」と記し、築城期以前の人家が建っていた頃から生えていたとする。なお図中の朱字は明治期の注記で、原本にはない。

作品21の2「金城温古録」第二十八冊

万延元年(1860)成立 明治写 名古屋城総合事務所蔵

江戸時代末期の榎は、地表から三尺(90.0cm)上の幹周が二丈七尺七寸(8.2m)という巨木であった。実は、出陣の祝膳にも盛る嘉瑞の物で、藩主の正月の食い積み(昆布、勝栗などを積み上げた膳)として供されていたという。さらに白川藩主松平定信の随筆「関の秋風」に記されたような渋皮のない榎の名木に似た、世にもまれなる名物と賞賛している。名古屋城の榎の味について直接書かず、「関の秋風」を引いてばかりしているのであり、たとえば味を知っていたとしても書けなかったと思われる。

作品21の2「金城温古録」 第二十九冊

万延元年（1860）成立 明治写 名古屋城総合事務所蔵

「御深井丸御植木之古体 元禄以降」として、御深井丸や西之丸の古樹を示した図。得義の関心は樹木にまで及ぶ。西之丸の中央に「榎樹」がある。この図では描かれていないが、当時西之丸には米蔵六棟が軒を並べており、今のような梅林もなかった。そもそも城郭では、木は侵入者の隠れ場所になりかねず、御庭以外には救荒用の実のなる木しか植えないのが原則である。鬱蒼と葉を茂らす榎の巨木が存続しえたのは、築城以前の霊木という共通認識があったがゆえと考えられよう。

作品22「天然記念物指定申請ノ件」

昭和7年（1932）1月26日起案 名古屋城総合事務所蔵

戦前名古屋城管理事務所を管轄していた名古屋市土木部庶務課による、榎の木を天然記念物に指定されるべく文部大臣に申請する件の起案。決裁時の文部大臣は鳩山一郎氏。榎の木の現状として、地上五尺の周囲二丈三尺六寸（7.0m）と記しており、『金城温古録』の数値「地上三尺で二丈七尺七寸」よりむしろ小さい。本起案の数値のほうが正確であろうが、100年を経てもさほど成長していないとも言え、いかに老樹であるかの傍証となる。

参考出品「榎の実」

去年（2022）9月、国指定天然記念物である名古屋城の榎の木になった実。青い外皮を取り去り、乾燥させている。茶色の殻の中に、黒い薄皮（内種皮）に包まれた白い種がある。去年の春咲いた花が、一年半かけて結実したもの。名古屋城では、自然落下した榎の実を毎年すべて採取し、数を記録している。なお、指定名称は「名古屋城のカヤ」であるが、本展覧会では「榎」と表記した。☆展示の実は、他の展示品に影響を及ぼさないよう消毒処理をほどこしており、食べられません。

新春特別出品「紅地花菱に鳳凰四季花卉唐織」

平成8年（1996）制作 生駒里翠氏寄贈

鳳凰と桜・菊など四季の花を配する華麗な唐織。尾張藩重臣の御子孫である生駒里翠氏が演能のため京都・西陣で誂えた能衣装で、昨年名古屋城にご寄贈いただいた。唐織は、女性役が身につける衣装。とくに若い女性役は「紅入（いろいり）」と呼ばれる赤い唐織を着る。地紋・文様ともに織りで表すのが基本だが、本衣装は、文様を手で刺繍しており、よりふっくらとした表現になっている。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展 「家康とごはん 名古屋城でいただきます」

令和5年(2023)1月1日(日)~3月5日(日)

指定	資料名	備考	時代	員数	所蔵	展示期間
1	徳川家康坐像		江戸時代前期	1軀	名古屋城総合事務所	全期
2	徳川家康画像		江戸時代前期	1幅	名古屋東照宮	全期
3	◎ 桜花雉子図襖絵	名古屋城本丸御殿表書院一之間東側	慶長19年(1614)	4面	名古屋城総合事務所	前期
4	◎ 松竹禽鳥図襖絵	名古屋城本丸御殿表書院上段之間南側	慶長19年(1614)	4面	名古屋城総合事務所	後期
5	東照宮縁起絵巻	住吉広行他筆	寛政6年(1794)	5巻	名古屋東照宮	全期
6	◎ 花卉図襖絵	名古屋城本丸御殿上御膳所上段之間南側	寛永11年(1634)	4面	名古屋城総合事務所	前期
7	◎ 枝垂桜図襖絵	名古屋城本丸御殿上御膳所上段之間東側	寛永11年(1634)	2面	名古屋城総合事務所	前期
8	◎ 鴉花卉図襖絵	名古屋城本丸御殿上御膳所上之間西側	寛永11年(1634)	2面	名古屋城総合事務所	後期
9	◎ 梅竹雀図襖絵	名古屋城本丸御殿上御膳所上之間北側	寛永11年(1634)	4面	名古屋城総合事務所	後期
10	葵紋銀膳		江戸時代中期	1組	名古屋城振興協会	全期
11	祝膳品書控	平尾健氏寄贈	寛政10年(1798)	1冊	名古屋城総合事務所	全期
12	祝膳復元		平成	4膳	名古屋城総合事務所	全期
13	進饌要覧	清原重巨編	天保9年(1838)	13冊	名古屋市蓬左文庫	全期
14	進饌要覧	清原重巨編	天保9年(1838)	18冊	名古屋市蓬左文庫	全期
15の1	御干菓子御見本		江戸時代後期	1冊	名古屋市蓬左文庫	全期
15の2	御蒸菓子御見本		江戸時代後期	1冊	名古屋市蓬左文庫	全期
16	御菓子見本		江戸時代後期	1冊	名古屋市蓬左文庫	全期
17	御干菓子絵図		江戸時代後期	2冊	名古屋市蓬左文庫	全期
18	御干菓子之図		江戸時代後期	1冊	名古屋市蓬左文庫	全期
19	嘉永六年藩侯御招待ノ時ノ記録 大橋武左衛門筆		嘉永6年(1853)	1綴	個人蔵	全期
19付	御用札		嘉永6年(1853)	1口	個人蔵	全期
20	出陣之心得之事		江戸時代中期	1帖	名古屋市蓬左文庫	全期
21	金城温古録	31冊のうち2・28・29	万延元年(1860) 成立 明治写	3冊	名古屋城総合事務所	全期
22	天然記念物指定申請ノ件		昭和7年(1932)	1綴	名古屋城総合事務所	全期
特別出品	紅地花菱に鳳凰四季花卉唐織 贈 生駒里翠氏寄贈		平成8年	1領	名古屋城総合事務所	全期

◎は国指定重要文化財

◆ 前期 1月1日(水)~2月2日(木) 後期 2月3日(金)~3月5日(日) (展示期間はかわることがあります)

2 西の丸御蔵城宝館 情報ルーム

(1) 西之丸発掘調査成果速報展

会期：令和4年（2022）9月21日～令和5年（2023）5月16日

展示資料：4点

展示趣旨：令和4年に実施した名古屋城西之丸発掘調査の調査成果を写真や出土遺物の展示によって紹介した。

展示資料

1 大鉢

江戸時代 19世紀 瀬戸産

調査区C区で出土した大鉢。19世紀以降に瀬戸で生産された復興織部と呼ばれる製品で、器の特徴から手水鉢として用いられたと考えられる。器には松竹梅やつるし柿といった文様が器の内側と外側に描かれている。緑色釉と白色釉が施釉されており、その上から鉄絵が描かれている。これらの特徴から青織部を意識した製品と考えられる。

このような製品が、形状がおおよそわかる状態で出土することは非常にまれな事象である。

2 灰釉皿

江戸時代 17世紀 瀬戸・美濃産

3 灰釉皿

江戸時代 17世紀 瀬戸・美濃産

2と3は瀬戸・美濃産の小皿でいずれも調査区H区で出土している。製作年代はいずれも17世紀代である。

4 播鉢

江戸時代 17世紀 瀬戸・美濃産

調査区H区で出土した播鉢の底部である。本製品は口縁部が存在しないものの、同地点からは多くの17世紀代の播鉢が出土していることから本製品も17世紀代に生産された陶器だと考えられる。

前述の2、3の資料と合わせて、17世紀代に比定される遺物が調査区H区からは多く出土しており、その時期は西之丸に米蔵が形成される以前にあたる。これらの出土遺物は、17世紀当時に当該地点で生活者が存在していたことを匂わせている。



展示風景

3 その他

(1)「名古屋城刀剣展 一尾張に伝わる刀剣一」

展示概要

「尾張に伝わる刀剣」をテーマに、歴史的・美術史的にも貴重な刀剣を展示。

主催：日本美術刀剣保存協会名古屋支部、名古屋城総合事務所

会期：令和4年(2022)4月29日(金・祝)～5月15日(日) 17日間

会場：名古屋城本丸御殿孔雀之間

入場者数：22,801人(会期中における本丸御殿孔雀之間の入場者数、1日平均1341.2人)

出品件数：8件

展示趣旨：

日本刀は武器であると同時に、世界に比類なき美術品であり永く後世に伝えるべき文化遺産です。刀剣は古くから、武器の中でも特別視、神格化され永く日本人の精神的支えともなってきました。刀剣について、より多くの方々に理解をしていただく為、日本美術刀剣保存協会名古屋支部と名古屋城総合事務所との共催により、本展を開催した。今回は「尾張に伝わる刀剣」をテーマに8口の刀剣と拵を紹介した。その産地は山城国、備前国、備中国、筑前国、摂津国、伊勢国と多岐にわたっている。この展示が、日本刀の歴史的、文化史的価値を再確認していただく機会になれば幸いである。

作品解説

1 短刀 銘 来國俊 附 黒呂色塗鞘出鮫合口拵

鎌倉時代 13世紀 山城国・来派 刃長7寸2分(21.8cm)

國俊には二字銘と「来」を冠する三字銘の2種があり現在では研究が進み同人説が濃厚になりつつある。来國俊の作品は多く現存しており、優れたものが多く熱田神宮の「短刀 銘 来國俊」は有名で国宝に指定されている。

2 太刀 銘 備州長船盛光/応永廿六年八月 附 黒紺変り塗鞘打刀拵

室町時代 14～15世紀 備前国 刃長2尺3寸1分3厘(70.1cm)

室町初期の長船派は盛光・康光が著名で、その作刀も太刀・脇差・短刀と多種にわたり、多くの作刀が現存する。本品の鍛えは板目で、刃文は互の目に丁子刃交じり、映りを配し地刃に働きがある。

3 刀 無銘 青江 附 黒呂色塗鞘打刀拵

南北朝時代 14世紀 備中国 刃長2尺3寸8分3厘(72.2cm) 佐竹家伝来

本品は元来3尺を越える太刀として製作されたが、室町期の戦闘様式の変化により、茎を切詰めて刀として改良された。そのため作者名を失っているが、その鍛え刃文から青江派と極められており、豪快で優れた出来である。

4 脇差 銘 桑名住村正(初代) 附 金沃懸地塗鞘脇差拵

室町時代 15世紀 伊勢国 刃長1尺1寸5分8厘(35.1cm)

村正初代は文亀元年の年紀が古く、三代までは作品が残されているが、徳川家の忌避にふれて江戸時代には銘を消されたり、改ざんされた作品が存在する。が作者に責任の無いことである鍛えは板目に柁が交じり、刃文は表裏が揃うのが特徴とされる。伊勢国を代表する刀工で一般的に著名である。

5 短刀 銘 筑州住貞弘 附 黒石目地腰鶯色塗鞘 合口拵 和田一真作

南北朝時代 14世紀 筑前国 刃長9寸4分7厘(28.7cm) 伊東巳代治旧蔵

左一派の弘安子と言われ、寸法・身幅の割に重ねが薄い南北朝期の姿で、左一派の刃文は浅い湾れに互の目が交じり、帽子は突き上げて返るのが特徴であり、貞弘の現存刀は希少である。

6 脇差 銘 津田越前守助廣/延宝八年八月日 附 黒呂色塗鞘脇差拵

江戸時代 延宝8年(1680) 摂津国 刃長1尺7寸4分3厘(52.8cm)

助廣は始め師父・そぼろ助廣風の丁子乱れから絢爛たる濤瀾乱れを創始するが、その間直刃もあり極めて上手である。この作刀は濤瀾乱れを最高に表現している。新刀期の横綱は東に虎徹、西に助廣と言われている。

7 脇差 銘 於南紀重国造之 附 黒呂色塗鞘脇差拵

江戸時代 17世紀 紀伊国 刃長1尺4寸6分5厘(44.4cm)

重國の本国は大和で後に駿府に移り、徳川家康の抱え工となった。元和5年(1619)、徳川順宜頼宣に従って紀州和歌山に移って鍛刀し、相州伝と大和伝が有る。この作刀は大和伝であり沸出来の直刃を焼き優れた出来である。

8 太刀 銘 勢州桑名住廣房作/切物尾州二子山住則亮 附 金梨子地揚羽蝶紋衛府太刀拵

江戸時代 19世紀 伊勢国 刃長2尺3寸7分9厘(72.1cm)

三品廣房の作刀に、尾張の幕末の著名金工・二代則亮が刀身の表裏に彫りを施している他に類が無い太刀である。依頼主は尾張藩家老大道寺家であり、この太刀には大道寺家紋の揚羽蝶紋衛府太刀拵が添えられている。

IV 教育普及事業

1 刊行物

(1) 名古屋城調査研究センター研究紀要 第4号

概要

名古屋城調査研究における研究成果を公開するため、『名古屋城調査研究センター研究紀要 第4号』を刊行した（令和5年3月発行）。

目次

天守建つ・続名古屋城築城考	服部英雄
「山下家覚書」から読み解く徳川光友生誕背景	原史彦
名古屋城下御深井御庭の景観と利用	堀内亮介
〈資料紹介〉名古屋城の刻印・刻銘（その1）	
— 一川地義郎氏寄贈史料について —	服部英雄・大村陸
〈資料紹介〉名古屋城小天守台西から出土した鯉瓦	西本菜由
〈資料紹介〉御深井丸茶席庭園の石造物	大村陸
名古屋城の近世資料にみる測量の精度について	
— 『金城温古録』と「御本丸御深井丸図」を題材に —	酒井将史

(2) 名古屋城調査研究センターだより 第4号

概要

名古屋城調査研究センターの活動を広く市民に周知するためのリーフレットとして、『名古屋城調査研究センターだより 第4号』を刊行した（令和5年3月発行）。

目次

調査研究センターの裏方仕事	小村拓也
発掘された名古屋城〈天守台〉	二橋慶太郎
〈搦手境門〉	西本菜由
〈西之丸〉	酒井将史
〈表二の門〉	大村陸
〈二之丸庭園〉	村上慶介
〈文献資料担当より〉孔雀の尾が長すぎて遠回り!?	今和泉大

(3) 西の丸御蔵城宝館特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」リーフレット

概要

令和5年（2023）3月18日（土）～6月18日（日）に開催された西の丸御蔵城宝館特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」の内容・出陳作品を紹介するリーフレット（A4、カラー8ページ）を刊行した（令和5年3月発行）。

(4) 特別史跡名古屋城跡未告示地区（二之丸）発掘調査報告書 第3次・第4次 [名古屋城調査研究報告4・埋蔵文化財調査報告書3]

概要

令和3年（2021）～令和4年（2022）に実施した特別史跡未告示地区の発掘調査の成果を報告した（令和5年3月発行）。
発掘調査の結果、近世遺構の残存状況は悪いが、部分的に遺構面を確認することができた。主な近世の遺構は石組溝、礫敷土坑である。主な近代の遺構は建物基礎である。

(5) 特別史跡名古屋城跡本丸内堀発掘調査報告書(令和元年度・令和2年度)[名古屋城調査研究報告5・埋蔵文化財調査報告書4]

概要

令和元年度(2019~2020)、令和2年度(2020~2021)に実施した本丸内堀での発掘調査の成果を報告した(令和5年3月発行)。

令和元年度は戦後の天守閣再建工事に伴う廃材等を処分した土坑を複数検出したほか、石垣根石付近では石垣一段目(根石)を据えるため土を掘りこんだ痕跡(根切)を検出した。

令和2年度は、大天守台西面において石垣面に対し直交し西側に向かって伸びる2条の石列と、その周辺を礫や瓦片で覆うように敷き均した礫群を検出した。石列は築城期の石垣基部の可能性があり、礫群は宝暦期の天守大修理に伴う作業の一部と考えられる。

(6) 名古屋城表二の門試掘調査報告書 第1次・第2次調査[名古屋城調査研究報告6・埋蔵文化財調査報告書5]

概要

重要文化財名古屋城表二の門の大規模修理工事の計画に伴って、令和元年度(2019~2020)と令和4年度(2022~2023)に実施した試掘調査の報告書を刊行した(令和5年3月発行)。

令和元年度調査は表二の門控柱と附属土塀控柱の基礎部分を調査し、近代以降に改修された痕跡を確認した。令和4年度調査は附属土塀背面で雁木の遺構残存状況を確認し、雁木の最下段や円礫が密集する背面構造、隣接する石垣表面の階段状の加工痕などの関連遺構が残存していることが判明した。

(7) 国秘録 御巡覧留[名古屋城調査研究報告7・名古屋城史料叢書1]

概要

名古屋城調査研究センターにおける文献調査の成果報告および名古屋城の歴史的な調査研究の一助とするため、名古屋城史料叢書の刊行を開始した。今年度は、徳川林政史研究所が所蔵する名古屋城本丸の巡覧記録である『国秘録 御巡覧留』を刊行した(令和5年3月発行)。

(8) 名古屋城調査研究センター年報3 令和3年度

概要

令和3年度の名古屋城調査研究センターの活動実績を示す年報を刊行した(令和4年11月発行)。

2 レファレンス

名古屋城調査研究センターでは、市民からの質問のうち、特に名古屋城の文化財・歴史に係るものについて回答を行っている。令和4年度（2022～2023）は合計で6件の問い合わせがあった。内訳は表の通りである。

内容	件数
記念物（特別史跡・名勝・天然記念物）に関すること（石垣、二之丸庭園など）	3件
建造物に関すること（天守・本丸御殿など）	1件
その他（名称に関すること、発掘調査遺物に関すること）	2件
合計	6件

3 現地説明会

発掘調査の成果（遺構・遺物）を市民の皆様にご覧いただき説明会を開催した。なお、現地説明会の資料は名古屋城調査研究センターホームページ（<https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/center/>）にて公開している。

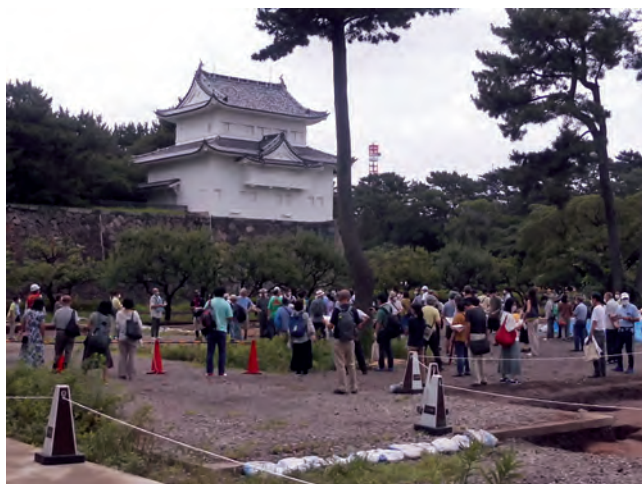
（1）西之丸発掘調査

日時 令和4年（2022）7月16日（土）午前10時～午後12時

参加人数 320人

概要

全体説明の後、六番御蔵、一番御蔵の調査区を導線に沿って見学していただいた。各調査区には学芸員を配置し、遺構の説明等を行った。



説明会会場の様子



遺構説明の様子

(2) 二之丸庭園第10次発掘調査

日時 令和5年(2023)2月4日(土) 午前10時～午後12時

参加人数 約290名

概要

会場は庭園東側の調査区で、来場者の導線配慮として、見学路を設定した。また、会場入口付近に出土遺物を展示したほか、各地点に調査担当学芸員による解説ポイントを設け、来場者に対して随時遺構の出土状況等調査成果の説明を行った。現地説明会資料は当日を含めて約500部配布した。



遺構説明の様子(北より)



出土遺物現地展示(西より)

4 講師派遣

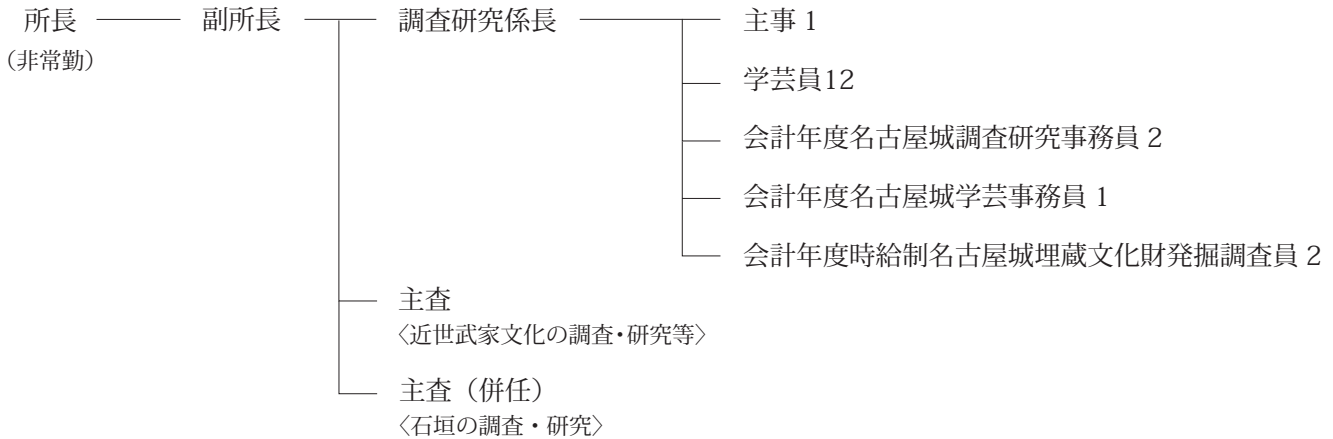
年月日	題目	主催者	講師
令和4年(2022) 6月21日(火)	あった会6月例会	あった会	原史彦
令和4年 7月1日(金)	歴史講演会「徳川家康から義直、光友へ」	特定非営利活動法人 本丸ネットワーク	原史彦
令和4年 7月13日(水)	歴史講演会「尾張徳川家初代義直公側室、二代光友公生母お尉の方」	特定非営利活動法人 本丸ネットワーク	原史彦
令和4年 7月23日(土)	AGGN年度第4回研修会「オンライン講演会」	NPO法人 愛知善意ガイドネットワーク	朝日美砂子
令和4年 7月23日(土)	桶狭間合戦と美濃攻略合戦の虚と実	名古屋城天守閣を木造復元し、旧町名を復活する会	原史彦
令和4年 8月27日(土)	連続講演会「徳川将軍と大名」	高知県立坂本龍馬記念館	原史彦
令和4年 9月3日(土)・4日(日)	ふるさと全国お城サミット	ふるさと全国県人会まつり事務局	原史彦
令和4年 10月1日(土)	水南公民館文化部講座「徳川家康公ゆかりの地を訪ねる」	瀬戸市水南公民館	原史彦
令和4年 10月12日(水)	歴史講演会「尾張徳川家初代義直公」	特定非営利活動法人 本丸ネットワーク	原史彦
令和4年 10月15日(土)	こんなに凄かった尾張藩の庭園	名古屋城天守閣を木造復元し、旧町名を復活する会	堀内亮介
令和4年 10月28日(金)	熱田湊まちづくり協議会第5回勉強会	熱田湊まちづくり協議会	原史彦
令和4年 12月9日(金)・11日(日)	技能者養成研修(講義研修・実地研修)	文化財石垣保存技術協議会	村木誠 西本茉由
令和5年(2023) 1月13日(金)	高年大学公開講座「名古屋城と尾張徳川家」	名古屋市高年大学鯉城学園	原史彦
令和5年 2月1日(水)	教室学習会「名古屋城築城の歴史」	ASC歴史文化悠遊会	原史彦
令和5年 3月11日(土)	令和4年度シンポジウム「東浜御殿について」	あつた宮宿会	原史彦
令和5年 3月19日(日)	長篠城址史跡保存館歴史講座	新城市教育委員会	朝日美砂子

※当センター職員を職務の一環として派遣したもののみ掲載(名古屋城総合事務所(名古屋城調査研究センター含む)が主催又は主催として含むものを除く。)

V 組織と職員

[令和5年(2023)3月31日現在]

1 組織



2 職員

所長 (非常勤)	服部 英雄
副所長	村木 誠
主査 〈近世武家文化の調査・研究等〉	原 史彦
主査 (併任) 〈石垣の調査・研究〉	瀬瀬 茂 (4.4.1～)
調査研究係長	小村 拓也 (～5.3.31)
主事	駒田 智子
学芸員	角田 美奈子 (4.4.1～)
	朝日 美砂子
	堀内 亮介
	今和泉 大 (4.4.1～)
	酒井 将史
	西本 茉由
	花木 ゆき乃
	二橋 慶太郎
	濱崎 健
	高橋 圭也
	大村 陸
	村上 慶介 (4.4.1～)
会計年度名古屋城調査研究事務員	種田 祐司
	大西 健吾
会計年度名古屋城学芸事務員	鶴見 沙耶伽 (～5.3.31)
会計年度時給制名古屋城埋蔵文化財発掘調査員	米倉 由佳 (4.4.1～)
	森 朋子 (4.4.1～)

VI 参考資料

1 名古屋城の活動

(1) 催事等

会期	事項
令和4年(2022)4月23日(土)～6月12日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展「風薫る 殿の御庭」
令和4年(2022)6月25日(土)～9月4日(日)	名古屋城振興協会所蔵品展「火縄銃」
令和4年(2022)8月6日(土)～8月15日(月)	名古屋城夏まつり
令和4年(2022)9月17日(土)～11月6日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展 「初公開 門外不出 巨大杉戸絵」
令和4年(2022)10月1日(土)～11月23日(水・祝)	名古屋城秋まつり
令和4年(2022)10月23日(日)～11月23日(水・祝)	第75回名古屋城菊花大会
令和4年(2022)10月29日(土)～11月6日(日)	重要文化財「東南隅櫓」「西南隅櫓」特別公開
令和4年(2022)11月12日(土)～11月20日(日)	本丸御殿「湯殿」「黒木書院」特別公開
令和4年(2022)11月19日(土)～11月23日(水・祝)	茶席特別公開
令和4年(2022)11月19日(土)～12月18日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展 「本丸御殿に秘められた意味—將軍たるもの、清貧であれ、 人格者たれ—」
令和5年(2023)1月1日(日・祝)～1月9日(月・祝)	名古屋城冬まつり
令和5年(2023)1月1日(日・祝)～3月5日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展 「家康とごはん 名古屋城でいただきます」
令和5年(2023)1月2日(月・祝)～1月9日(月・祝)	重要文化財「東南隅櫓」特別公開
令和5年(2023)3月4日(土)～3月13日(月)	第49回名古屋城つばき展
令和5年(2023)3月18日(土)～6月18日(日)	西の丸御蔵城宝館特別展 「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」
令和5年(2023)3月21日(火・祝)～5月7日(日)	名古屋城春まつり
令和5年(2023)3月25日(土)～3月31日(金)	重要文化財「東南隅櫓」特別公開

(2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議

年	月日	会議名称※
令和4年(2022)	5月13日	第49回 全体整備検討会議
	5月22日	第49回 石垣・埋蔵文化財部会
	5月30日	第30回 建造物部会
	6月3日	第50回 全体整備検討会議
	7月13日	第24回 天守閣部会
	7月15日	第50回 石垣・埋蔵文化財部会
	8月5日	第51回 全体整備検討会議
	9月4日	第31回 庭園部会
	9月7日	第51回 石垣・埋蔵文化財部会
	10月7日	第52回 全体整備検討会議
	10月19日	第31回 建造物部会
	10月24日	第32回 庭園部会
	11月2日	第25回 天守閣部会
	11月18日	第52回 石垣・埋蔵文化財部会
	12月9日	第53回 全体整備検討会議
12月16日	第2回 金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会	
令和5年(2023)	1月17日	第26回 天守閣部会
	1月24日	第53回 石垣・埋蔵文化財部会
	2月3日	第54回 全体整備検討会議
	2月10日	第54回 石垣・埋蔵文化財部会
	2月10日	第32回 建造物部会
	2月17日	第27回 天守閣部会
	2月24日	第33回 庭園部会
	3月17日	第55回 石垣・埋蔵文化財部会
	3月17日	第3回 金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会
	3月22日	第28回 天守閣部会
3月24日	第55回 全体整備検討会議	

※各部会の正式名称には部会名称の前に「特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議」が付されるが、煩雑になるため省略した。
同様に全体整備検討会議についても「特別史跡名古屋城跡」を省略した。

2 入場者の推移

(1) 名古屋城入場者数

(単位：人)

月	令和元年度 ^{※1}	令和2年度 ^{※2}	令和3年度 ^{※3}	令和4年度
4	282,561 (147,842)	10,775 (0)	65,849 (31,621) 〈 5,049〉	124,209 (45,277) 〈19,695〉
5	226,278 (134,526)	199 (0)	31,777 (17,300) 〈6,528〉	130,851 (54,740) 〈27,823〉
6	139,213 (111,996)	21,208 (13,732)	14,819 (11,279)	67,029 (40,167) 〈11,904〉
7	134,635 (108,517)	30,302 (26,228)	41,449 (23,658)	72,716 (46,167) 〈14,897〉
8	222,148 (134,832)	25,423 (23,228)	58,529 (24,076)	154,226 (68,146) 〈31,222〉
9	166,354 (116,789)	46,333 (30,065)	27,122 (16,402)	92,460 (52,515) 〈23,184〉
10	189,577 (118,772)	55,784 (44,090)	56,547 (32,998)	142,262 (72,507) 〈28,277〉
11	210,298 (131,809)	90,109 (61,874)	105,035 (42,274) 〈30,610〉	154,783 (71,037) 〈30,610〉
12	129,109 (84,350)	31,957 (29,173)	65,340 (36,713) 〈14,265〉	103,327 (55,320) 〈18,735〉
1	170,855 (101,728)	20,559 (17,183)	59,678 (30,475) 〈17,230〉	120,645 (63,773) 〈22,329〉
2	120,341 (80,447)	25,942 (16,597)	37,470 (22,138) 〈10,382〉	113,811 (61,622) 〈21,663〉
3	44,902 (0)	164,893 (53,250)	123,690 (50,791) 〈23,409〉	252,968 (95,185) 〈31,121〉
計	2,036,271 (1,271,608)	523,484 (315,420)	687,305 (339,725) 〈107,473〉	1,529,287 (727,556) 〈285,602〉

() 内は本丸御殿の入場者数。〈 〉内は西の丸御蔵城宝館の入館者数。

※1 令和2年2月29日から同年4月9日までの間、本丸御殿入場休止。

※2 令和2年4月10日から同年5月31日までの間、名古屋城開園休止。

※3 令和3年4月16日から同年6月20日までの間、土日のみ名古屋城開園休止。令和3年4月16日から5月9日までの間、プレオープン。令和3年11月1日開館。

名古屋城調査研究センター年報 4
令和4年度
2024年3月

発行 名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター
〒460-0031 名古屋市中区本丸1番1号
TEL (052) 231-2481